
Puzzle

a-m

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Puzzle

【コード】

N9042V

【作者名】

a - m

【あらすじ】

魔法や不思議に満ちあふれた世界”ソロン”しかし地球との1番の違いは魔法が存在するかどうかではない。それは血のつながりというものがない世界だということだ。 ”————”死ぬ時

幸せであるには、幸せの片割れの存在が、大切なピースとなるのだ。そして、幸せの片割れは永遠の一瞬を感じさせてくれる……。人間一人一人の過去と未来、そして、今は決して完成する事のないPuzzleなのだ。一秒一秒歴史は刻まれつづけるのだから……。

”————”

登場人物紹介（前書き）

簡単に登場人物を紹介します。

登場人物紹介

<主要登場人物>

ミー・・・12歳の女の子、護衛魔法使い

チエド・・・13歳の男の子、護衛魔法使い

コペ・・・ザガール王の友達、護衛魔法使いの長

ベル・・・新しく来た子、4歳までの記憶を持つ。

シャルル・・・気品がある猫、チエドの隣にある洞窟に住んでいる

スモレット・・・ユーモアあふれる九官鳥、ミーの家の前にあるク

ルミの木に住むようになる。

ザガール王（王様）・・・ソロンの王

サン・・・ドリスでもある。地球で死んだ。

イガ・・・サンにより殺された。

カール・・・校長、闇の現をドリスより受け取った人

<妖精>

対応魔法の妖精・・・レベル4、いたずら好きで気分屋な男の子、のちにチヨコと命名される（ミーの妖精）

浮遊魔法の妖精・・・レベル4、シャルルのことをとても気に入っている女の子、のちにキャンディーと命名される（チエドの妖精）

透明魔法の妖精・・・レベル1、内気な性格だが、うわさ好きな女の子^{ハツエ}

虚ろ魔法の妖精・・・レベル6、とても美しく花を使い予言するのが趣味。（預言者）

望遠魔法の妖精・・・レベル6、品の良い妖精、コペのパートナー、死んだ。（博士）

離脱魔法の妖精・・・レベル3、ザガール王のパートナー。（かぼちゃ）

第1話（前書き）

作者の処女作です・・。しかも10代の頃の。一応完結しています
が文章ひどいです。なのでこれから誤字脱字&mp;文章を編集
or修正していきます。*ストーリー展開などの変更はありません。

第1話

「チャリンチャリン・・・」と、足に鈴をつけた真つ赤な小さい鳥達が曇り空の中を流れるように飛んで行った。ここソロンでは、鈴をつけた鳥達を時計と呼び、真つ赤な鳥が教える時刻は太陽が眠る時間。オレンジ色の大きな鳥達なら太陽が目覚める時間。紫色の翼を持ち、胴体は黄色というユニークな可愛い鳥達なら太陽が空気を食べる時間。そしてもちろん、ソロンの人々がお昼を食べる時間でもある。この時間だけはほとんどの人が守るがほかの2つの時間は守る人は少ない。いわゆる寝坊と、いろいろな事情が・・・というものである。他にも温度を教える木々や、曜日を教えるもぐら達などがいるがまた後で話すとして、まずソロンとはどういう世界なのか話しておいた方が良さだろう。

ここソロンは魔法があつて当たり前であり魔法が使えない人は絶対にいない世界である。ソロンに住む人々は自分だけの特別な妖精を10歳になった日、つまり誕生日に呼び出し一生のパートナーとする。妖精の種類はその人の魔力の強さによつて変わってくる。妖精のレベルは、1〜6まであり、レベル1の妖精を呼び出した人はあまり強い魔力の持ち主とはいえないだろう。しかし、レベル1の妖精を呼び出したからといって、馬鹿にされる事は決してない。ソロンに住む大体の人のパートナーとなつている妖精はレベル1なのだから。妖精の特徴といえれば使える魔法が1つと決まっているということだろう。そのためパートナーに選ばれた妖精は、自分の主人が自分にできない魔法を使いたいと言つたなら、その魔法が使える仲間の妖精を探しに行き頼まなくてはいけない。それもパートナーとなつた妖精の役目なのである。そんなソロンをもし地球の人々が発見したとすれば、第一声は「ありえない・・・。」と言つと思う。それほど魔法に満ち不思議な動物や妖精にあふれる世界なのだ。

しかし地球と違う1番の大きな点は魔法が存在するかしないかで

はない。1番の大きな違い・・・それは血のつながった存在、つまり親子や兄弟がいない世界・・・家族というものを知らない世界という事だ。

これから話すある2人の話はここソロンが舞台となっている。

そしてその2人も血のつながりというものを知らない人間だった・・・。

第2話

ミーとチエドが歩いている道の左側には、温度計と呼ばれる木が葉っぱを真っ赤にして30度以上と教えている。

空では同じ色をした時計が飛んでいる。

「暑い!!」と、ミーがピンクのハンカチで汗をふきながら叫んだ。「最後に対応魔法をかけたのはいつ?」チエドが呆れたように聞くと、

「朝起きた時……。」と、ミーは顔をりんごのように赤くし下を向いて答えた。

「まったく。ミー、今何時だかわかってる?!もう夕方だよ?!そんなに対応魔法の妖精をほっとけば暴走するに決まってるだろ。」

「わかってるわよ。だからお昼に調節しようと思ってたのに、せん・
・・。」

「うん。知ってるよ。先生に呼ばれたんだって?で、かける時間がなくなった。」

「そう。そこまで知ってるのならそんなに怒らなくてもいいじゃない。」と、ミーがすねて言うと、

「怒ってはいないよ。ただ対応魔法の妖精は温度を司る妖精ってだけあって気分も変わりやすいからね。あまり時間を空けないでかまっつてあげた方がいいって事を言いたかっただけだよ。」そう言っつてチエドは笑いミーに今やるよう促した。

「わかったわ。」と、ミーは観念し小さくため息をつくとき霧がかかったようなやわらかい声で

「対応魔法の妖精さん。聞こえたら出てきて頂戴。」と、ささやいた。

すると、ミーの回りの空気がざわめき、ヒュッと小さな音をたてて半透明な手のひらサイズの男の子が笑いながらミーの目の前に現れた。

パタパタと綺麗な緑色の羽をはばたかせ「ははっ。汗かいちゃってどうしたの?」と、いたずらっぽく首をかしげミーに尋ねた。

「もっつ。私を囲んでいる魔法の壁の中の温度を壁の外と同じ温度にしたでしょ?!外は30度以上なのよ?お願いだからすぐ快適な温度に戻して。」

「ふんっ。ずっと呼び出してくれなかったミーが悪いんだろ。チエドはちゃんと呼んでくれたのに。お昼にパートナー通してお願いしてきたもん。」と、小さな男の子は拗ねたように怒った。

「いろいろあって忘れてたのよ。」

「忘れてたの?!」と、妖精はシヨックで羽を動かすのをやめてしまい、ヒラヒラと地面に向かって落ちていった。

あわててミーが手で受け止め

「ごめんね。でもこれからは何があっても忘れないで呼ぶから機嫌直して。」と、優しく見えるように精一杯努力し謝る。

「ふんっ。約束だよ。やぶったらミーにゆで卵と同じ気持ちを体験させてあげるからね。」

「了解。約束するわ。だから戻して。」納得した妖精は、にかつと笑うと、フツと息をミーの回りを囲む透明の壁に吹きかけた。

そして「絶対だよ。」と、一言いうとまたヒュツと音をたて消えた。

「はあ。涼しくなった。」ミーが嬉しそうに微笑む。

「そう。じゃあ急いで帰ろう。僕まだ研究レポート書いてないんだ。明日は提出しないと・・・。で、ミーのパートナーのあの妖精、地面に落ちそうになるの何回目だっけ?」と、チエドは笑った。

「ハリネズミの毛の数より多いんじゃない?」と答え、ミーも笑った。

ミーとチエドはいろいろな事を一緒に体験してきた友達であり大切な仲間でもあった。ミーは12歳で、ちよつとなまけるクセがあるがとても動物が好きで、パートナーを大切にしている優しい子だ。チ

エドはミーより1歳年上でとても頭のいい責任感の強い子であり、ミーと同じでとてもパートナーを大切にしている。

ミーの家が見えて来た頃「ニャオーニャオー・・・」と、猫が鳴くのが聞こえた。どうやらミーの家のすぐ前にたっているクルミの木から聞こえてくるらしい。

急いで駆け寄ると、哀れにも今にも折れそうな枝に必死にうづくまって助けを求めている猫はチエドの家の隣の洞窟に住んでいる猫、シャルルだった。

「また、降りれなくなっただね。」ミーが心配そうにシャルルを見てつぶやいた。

「シャルル。今降ろしてあげるからそこから一步も動かないで待って。ミー、もう暗いし僕一人でできるから家に入っていよいよ。」

「嫌よ。シャルルがちゃんと地面に足をつけるまで見てる。」

「わかった。じゃあ、ついでに僕の荷物持ってて。」

チエドはそう言うとミーに、本が3冊入ったリュックを預けた。

ミーはうなずきリュックを受け取り

「集中してやるのよ。」と、真剣な顔でチエドに声をかけた。

チエドは”こりゃ、まいったよ。本気で心配してるみたいだ。そりゃこの前はあと少して所で別の事に気をとられて落ちそうになっただけれど、あれはミーが下で青虫に驚いて悲鳴をあげたからじゃないか。”と、内心不満に思ったが「わかってるよ。」とだけ言うてパートナーである浮遊の魔法の妖精を呼び出した。

「やあ。またシャルルが木から降りれなくなっただ。シャルルの所まで僕を連れて行ってくれないかい。」と、くすぐったい低い声で妖精に話かけた。蝶の羽のようにも見える紫色の羽をもつ女の子の妖精は、そよ風のようにくすぐすと笑いながら、

「ふふつ。いいわよ。その代わりシャルルに触ってもいい？」と甘い声でチエドに問う。

「もちろん。いいよ。」

「取引成立ね。」と、言つてチエドの回りをヒラヒラと飛びながら歌をうたつように呪文をささやいた。するとチエドはフワフワと宙をただよい、チエドの言うことを聞き石のように固まっているシャルルの元へ近づいた。妖精は楽しそうにチエドの回りを飛びながらシャルルに投げキッスをしている。

ミーはというと、下でチエドのリュックを重たそうに持ち

「シャルルー、もう少しの辛抱よ。動かないでね。」と、叫んでいた。

第3話

チエドはシャルルに、手を差し出し声をかける。

「おいで。」

するとシャルルは勢いよくチエドに飛びつきチエドの胸に顔をすりつけ喉をゴロゴロと鳴らし喜んだ。

「シャルル、そろそろ自分が降りれなくなるような木には登らないって決めた方がいいんじゃないかい？」

シャルルはチエドの忠告など聞こえなかったかのように、浮遊の魔法の妖精を見て鳴いている。

「シャルル、また木から降りれなくなった時は私の事を呼んでね。」と、嬉しそうにシャルルの鼻にキスをしてささやいた。

「チエド。早く降りてきて。」

しびれを切らしたかのようなミーの不機嫌な声が下から聞こえ、チエドは妖精に頼み急いで下に降りしてもらった。

「シャルル、よかったね。」と、チエドからシャルルを渡されたミーは微笑みながらギュツとシャルルを抱きしめる。

チエドがリュックを持ったのを見届けた妖精は「じゃあ、またね。」と囁くとチエドの「ありがとう。おやすみ。」と言う言葉を聞きながら静かに消えるのであった。

「ミー、シャルルを貸して？洞窟まで送っていく事にしたから。」

そんなチエドの言葉に「じゃあまた明日ね。おやすみ。」とシャルルに告げながらチエドにシャルルを渡しミーは家に帰って行った。チエドはミーがあまりにもあっけなく帰ってしまったので逆に少し驚いた。

いつものミーならばすぐには家に入らずチエドが見えなくなるまで見送るのだ。

———お腹すきすぎたのかな。

なんとも楽観的に考えながらチエドはシャルルを腕にシャルルの住処である洞窟へと送るのであった。

チエドの家はミーの家から5分くらいの場所にある。チエドが家に着いた頃にはすでに真つ暗だったので、シャルルを洞窟の入り口に降ろし急いで家に入った。そして電気を付け、チエドの世話人だった隣のおばさんからもらったチキンを食べた。

ソロンの人々はみんな4歳でソロンにやって来る。その日から誰か好きな人と一緒に暮らすようになるまでずっと一人で暮らす。そのため近所のおばさんやおじさんが、その子が10歳になって自分の妖精を持つまで世話人となり面倒を見るのが習慣となっているのだ。そして、優しい人は世話人ならば10歳を過ぎても、食べ物を与えたりおこずかいをくれる。チエドは、運良く優しいおばさんが隣にいる家が与えられたので、今でもたまにこうしてご飯を作らなくてもいい日がある。

お腹がいっぱいになったチエドはさっそくレポートにとりかかった。

その頃ミーはというと、夕飯を食べ終わりシャワーを浴びているところだった。シャワーを浴びながらミーは明日校長室にある伝説の世界から誰かがもってきたという何かを見つけ出そう、と心に決

めていた。伝説の世界について学校の先生が何も教えてくれない事をミィは昔からずっと不満に思っていた。しかし自分で勉強をしようと思えば本を調べても「伝説の世界と呼ばれる地球は昔はソロンの一部だったと言われている。しかしその説を否定する学者の方が多くはつきりとした事は未だに解明されていない。中にはそもそも伝説の世界など存在しなかったというものもある。」というような事しか、どの本にも書かれていなかったのだ。最初は誰も地球を探し出せなかったから伝説の世界を否定する意見があるのだ、と考えていたミィであったが、月日がたつにつれ伝説の世界は存在しない可能性の方が高い。と思うようになっていた。

しかし今日のお昼、校長室の前を通りかかったミィは校長室の中から耳を疑うような話を聞いたのだ。

第4話

校長室から、誰かが、ひそひそと話している声がドアの隙間から聞こえて来たためミーは、足を止め、ドアの影に隠れ耳をすませた。

「信じられない。まさか、伝説の世界なんて・・・。」と、黄土色のマントを着た背の高いほっそりとした男が、言った。

「いや、本当なのだ。レベル6のパートナーを持つ、ドリスという魔法使いが地球に行き、証拠として持ってきた物がこれなのだ。」と、えらそうな態度でイスに座り、言葉を放った男は、ミーとチェドの通う学校の校長、そう、カールだった。最初ミーは、自分の目を疑った。しかしまぎれもなくその人物が、校長だとわかると、シヨックで、胸が裂けそうだった。ミーは、いつもニコニコと笑いながら、声をかけてきてくれるカールが大好きだったのだ。そしてまた背の高い男が口を開いた。

「と、すると本当に伝説の世界とは、実在するという事なのですか？しかも滅ばず今も存在すると？」この言葉を聞いた時、ミーはおもわず声を出しそうになった。あまりにも信じられなかったのだ。諦めていた地球への思いが、よみがえった瞬間だった。その時ミーは、地球のことしか考えていなく、2人がまさかイスから立ち上がり、ドアに近付いているなどは、知る由もなかったのだ。そして再び部屋をのぞき込むと、2人が自分のすぐ近くにいる事がわかりとても驚いた。そしてミーは、気づかれたと思い目をつぶり、全身に緊張が走った。だが、どうやら2人はミーには、気づかなかつたらしくまた話を始めた。ミーは、自分が息を止めていた事に気づきあわてて呼吸をした。聞えてきた話し声は、カールだった。

「そうだ。しかし今詳しい話をするのは、やめておこう。私は、明日隣村の学校に、行かなければいけないので、今日は、これからその準備をしなければいけないので、もう家に帰りたい。この話は、明後日にもどうだね？」

「ええ、もちろん私は、いつでもいいですよ。それでは、明後日お会いいたしましょう。」と、聞いたので、ミーはあわててドアから離れ一目散に、来た道に戻った。そして曲がり角まで来ると、後ろを振り返り、気づかれてないか確認した。どうやら、まだ校長室から出てきていなかったらしく廊下に2人の姿は、なかった。ミーは、しばらくの間、自分の心臓の音しか聞えなかった。手は、強く握りしめていた事が、わかるしるしがついていた。爪が、手のひらに、くいこんだらしく血がにじんでいたのだ。それでも緊張していたので痛みを感じる事は、なかった。それから、だんだん落ちていくと、先生に呼ばれていた事を思い出し、また校長室の前を通らなければ、いけないと気づいた。仕方なくミーは、校長室の前を急いで通り先生の元へと急いだ。先生の話の話を聞いている間、伝説の世界からもって来た物に、ついて最初に考えたが、検討もつかなかった。ので、諦め、何故校長が、それを手に入れることが出来たのか、あの男は誰なのか、どうやってドリスという魔法使いは、地球に行つたのかなど、次から次へと浮かんでくる疑問を、頭をフル回転させ考えたが、全てわからなかった。なので、帰り道にチエドにこの事を話し、意見を聞こうと、思ったが妖精の話になってしまい、しかもチエドがお説教を始めたので言うのをやめたのだった。そして今、シャワーを、止めると、ミーは、はつきりしない内は、チエドに話すのはやめておこう。と思ひ直したのだった。ミー自身何故そう思ったのか、わからなかったが、その方がいいと思つたのだ。それから、ベッドに入ったミーは、遅くまで、校長室で聞いた話の意味を考えた。そしてもしかしたら、カールは、悪事を働いたわけではないのかもしれないという、今にも消えそうな希望を抱き、眠りに落ちた……。

第5話

翌日、ミーを迎えに来たチエドは、クルミの木の向かい側にある家に人が集まっているのが見えた。おかしいな、あそこは、誰も住んでいないはずなのに……。と思い、近づいてみたが、人がたくさんいて家の中まで見ることが、出来なかった。

「今度は、何て言ったの？」と、みんなと一緒に騒いでいる友達のサナに聞いてみた。

「サナ、おはよう。何かあったの？みんな集まってるけれど。」

「おはよう。凄いのよ。今、光がバアってなって一人の男の子が、テーブルの上に現れたの。」

「えっ？新しい子が来たの？」

「そうよ。それがね、ちよっと変わってて何か変なことを言ってるの。だから、みんなどういう意味なのか、って話してるのよ。」

「変なことって？」

「何で僕のケーキなくなっちゃったの？とか。いろいろ言ってたんだけど、最初泣いてて、凄かったから、あんまり言ってる事分かんなかったの。今やっと泣き止んで、みんなと話せるようになってきたのよ。」

「へえ、それで誰が世話するか、決まったの？」

「それが、本当ならあそこに立って泣いてるウィックおばさんが、家が隣だし、世話人になるはずなんだけれど、お気に入り、リボンを汚されたのに、何で私が面倒見なくちゃいけないのよ?! って言ってるの。」

「リボン？そのぐらい洗えばいいじゃないか。」

「みんなも、そう言って慰めたんだけど、納得しないのよ。」

「じゃあ、他に誰かいないの？」

「近所であと住んでいるのは、ミーだけなの。」

「ミー?!まさかミーに世話人になれなんて頼んだの?!」

「まだ、でも多分そうなるんじゃないかしら。コペおじいさんが、今、中で決めているはずよ。だから早くミー呼んできた方がいいと思うわ。」と、サナが言い終わる前に、チエドは、ミーの家に駆け込んだ。

「ミー！起きて！！大変なんだ。」と、叫びながら階段を登り、ミーの寝室のドアをたたいた。少ししてから、ドアがガチャツと開き、眠そうな顔をした、ミーが顔を出した。

「朝から、どうしたの？私まだ着替えてもいないし、ご飯も食べてないの。もし、学校間に合わないなら、チエド先に行つて。」

「ああー、もう違うんだよ。学校が始まるまでには、まだ時間あるから、大丈夫だよ。僕が早く来ただけなんだ。」

「まだ早いならもう少し寝かせてよ。」

「だめだ。今すぐ着替えて、下に来て。」と、行つてチエドは、階段を下りていった。ミーは、文句を言いながらも、言うことを聞き、着替えてチエドの元へと急いだ。チエドは、

「朝ご飯は、後。まずは、僕について来て。」とだけ言い、ミーの手を引き外に出た

さつきよりも、人の数が増えている。間をかき分け、サナを探した。「何？チエド。みんなどうしてこんなに集まっているの？」

「新しい子が来たんだ。」

「本当?!女の子?男の子?コペおじいちゃんは、もう来た?」と、やっと目が覚めたらしい、ミーがはしゃぎながら尋ねた。チエドは、小さくため息をつくと、今ミーが尋ねてきた質問の答えと、1番重要な事を、ミーに教えた。

「ちよつと変わった男の子、好きな食べ物は、ケーキ。コペさんはもう来てるよ。それと、ミー、世話人候補のおばさんが、ああ・・・、何ていうか、リボンが好きで泣いてて、世話人になるのを断つたんだ。その代わりに世話人になる確率が高いのが、ミーなんだよ。」
「えっ?世話人?ちよつと待つて無理よ!私まだ学校に行つてるのよ?」

「そんな事、僕に言われても・・・あつ！！いた。サナ！！」チエドの声に気づいたサナは、早く来て、と手を振りながらジャンプした。

「ごめん。ミーに説明してて・・・」と、チエドはサナに謝った。

「私まだよく理解できてないの。本当に私が世話人になるの?！」

ミーは、サナに早口で聞いた。

第6話

「ええ、あなたが、断らなければ、多分あなたを、世話人にコペおじいさんは、選ぶと思うわ。」

「でもっ、私まだ学校に行ってるのよ？」

「そうだけれど、あなたは、レベル4の妖精を、パートナーに持つ魔法使いだし、王様の護衛魔法使いにも、指名されたじゃない。」

「それって関係あるの？」

「あるわよ。だって護衛魔法使って事は、仕事に就いている。って事じゃない。それも、身分が高く普通の人では、就けない仕事にね。」とサナが言った時、コペが、家の中から出て来た。そして、ミーを、見つけ微笑むと近づいてきた。

「やあ、おはよう。もう聞いたと思うが、世話人候補にミーの名前が挙がったんじゃない。詳しい事を説明したいのじゃが、ついて来てくれるかの？」と、言った。

「おはよう。コペおじいちゃん、もちろんついて行くわ。」と、ミーも笑顔で答えた。

コペとは、ソロンの王であるザガートの友であり護衛魔法使いの長でもある。護衛魔法使いとは、王の座を狙う者が、戦いを起こした時、王を守り戦う仕事である。その他にも、ソロンの人々の誰かが、禁じられた魔法を使った場合など、ソロンのどこであつてもすぐに駆けつけ犯人を見つけ罰するのも護衛魔法使いの仕事である。もちろん誰でも就ける仕事ではない。パートナーのレベルが3以上である事が絶対条件なのだ。

とても身分の高い仕事であるため、護衛魔法使いの人と、普通の身分の人は、話す事さえ出来ない。ましてや護衛魔法使いの長であるコペと友達のように話すという事は、あつては、ならないような事なのだ。しかしこの村の人々にとっては、ごく普通の事である。なぜかというと、コペがこの村にやって来た者の世話人を決める係り

なのだ。そのためみんなコペに親近感があり、コペ自身も、

「わしに頭を下げる必要などない、普通に接してくれ。」と言ったので、今ではみんな友達のようにコペに話しかける。そして先月ミールとチエドが2人そろって護衛魔法使いに指名された。2人は、護衛魔法使いに指名される事は、名譽な事であると、わかっていたのですぐに承諾した。しかしミーとチエドが、護衛魔法使いだと、正式に発表されてから、友達や周りの人は、急に態度を変え2人に頭を下げあいさつをしたり、話し掛けてこなくなった。そのことがとても嫌だった2人は、

「今までと同じようにして。護衛魔法使いになったからって態度を変えないで。」とみんなにお願いをし、それを聞いたみんなは、嬉しそうに笑うと前と同じように接してくれるようになったのだ。

コペの後を歩いて行き、家の中に入ると、噂の男の子は、イスに座りケーキを食べていた。ミーが入ってきた事に気づいた男の子は、ケーキで汚した顔を、くちやくちやにして笑い、「お姉ちゃんにそっくり!」と大きな声で、言った。ミーは、意味がわからず、コペの方を向き、助けを求めたが、コペもわからないというように首を傾げた。

「お姉ちゃんって誰?」と男の子の顔をハンカチで拭きながら尋ねた。男の子は、キョトツとした顔を見ると、

「僕のお姉ちゃんだよ。アンっていうんだ。とっても美人でモテモテなんだよ。」と笑って答えた。

「あなたのお姉ちゃん? ああ、今まで世話をしてくれてた人の事ね。」

「世話? お姉ちゃんは、僕の家族だよ。」

「家族? 何それ?」ミーはとても混乱してしまい、またコペの方を見たが、どうやらコペも同じだったらしい。

「家族って一緒に住んでる人の事だよ。僕4人家族なんだ。」

「一緒に住んでる人がいるの?」驚いたミーは、大きな声で聞いた。男の子もその声に驚いたらしく、体をビクツとさせた。それに気づ

いたミーは、

「ごめんね。ちょっとびっくりしちゃって。」と謝った。

「一緒に住んでるよ。家族なんだもん。」と、男の子は、何でびっくりするの?と思いつながら答えた。

「よくわからないけれど、結婚してるって事?」

「僕まだ4歳になつたばかりだもん、結婚なんかしてないよ。結婚してるのは、ママとパパ。お姉ちゃんにだつてママいるでしょ?」

「ママ? いないわ。」世話人のことかしら?とも思ったが、なんとなく違う気がしたので言うのをやめた。

「いないの? じゃあ、お姉ちゃんどうやって生まれたの?!」ミーの言葉に男の子は、心底驚いたようだ。

「生まれる?! 私は、人間よ。動物じゃないわ。聖なる木から命を授かつたの聖なる木から命を授かつたのよ。」ミーも男の子の言葉に、心底驚いた。

「人間だつて動物と同じなんだよ。女の人と、男の人が愛しあうと赤ちゃんができるんだ。ママが教えてくれたもん。お姉ちゃんにだつて、ちゃんとママとパパがいて、愛し合つたから生まれてきたんだよ。木が命をくれるわけがないよ。だつたら体は、何からもらったの?」と、男の子が、なにげなく言つたこの言葉が、のちにコペとミーの人生を大きく変える言葉になるとは、誰も気づいてはいなかった。そしてチエドの人生が、変わるかどうかは、ミーがこの事を話すかどうかによつて変わってくるという事は、言うまでもないだろう……。そして、もちろん昨日聞いた話を、いつチエドに教えるのか、という事もとても重要なのである。

第7話

あの男の子の言葉を聞いた後、コペとミーは言葉をなくした。最初に、気を取り直したのは、コペだった。

「その話は、また今度ゆっくり話すとして、ミー、もうすぐ学校に行く時間じゃろ？わしもそろそろ宮殿に戻らなくちゃなんのじゃ。そこで急がせて悪いんじゃないが、今、世話人になってくれるかどうか決めてもらえんかの？」コペの言葉で我に返ったミーは、

「世話人になるのはいいの。でも私が、学校に行っている時間この子の面倒を見る事が、出来ないわ。どうすればいいの？」と、言った。

「その事については、すでにウィックさんに頼んである。お前さんが学校やら仕事で、お昼をこの子にあげられない時、代わりにやってくれるそうじゃ。それで了解してくれるかの？」

「ええ、それなら私世話人になるわ。」と、ミーが、笑って言うときコペも安心したように笑った。そしてミーは、男の子に名前を尋ねた。男の子は、

「ベルだよ。」と、言ってまたケーキを食べ始めた。

戸を開けると、外には、まだ少し人が残っていたが、ほとんどの人は、学校や仕事に行ってしまったらしい。ミーは、チエドがいなか探したが、いなかだったので先に学校に行ってしまったのだろうと思ひ、コペに別れをつけ家へと向かった。コペの問いにちゃんと答え、笑顔を作ることが出来たが、実の所ミーは、とても混乱していた。

「昨日に続いて今日は、これ?!一体何なの?私の信じていた世界がどんどん変わってゆくじゃない。伝説の世界が、存在すると分かったのは、嬉しかったけれど、他の世界から物を持ち込んだ事に校長先生が、関わっているかも知れないなんて。それに、ベルの言うことが本当なら、私に、ママという存在の人がいて、その人が私を

生んだって事になるの？」と誰も、答えてくれることの、ない問いを、家につくまで繰り返し唱えていた。

戸を開けると、とてもいい匂いがしたのでミーは、驚いてキッチンへ向かった。すると、机の上に朝ご飯が用意してあり、イスにはチエドが座っていた。ミーが、びっくりしてチエドを見つめると、

「けっこう時間かかったね。もう学校行く時間になっちゃうから、早く食べなよ。」と、笑いながら、チエドは言った。ミーは、本当に嬉しかったので、

「チエド、もう行っちゃったのかと思った。朝ご飯用意してくれて本当にありがとう。」と、心からお礼を言った。チエドは、どうって事ないよ、という感じに笑うと

「いいから、早く食べて学校行くよ。」と、だけ言った。

「うん。いただきます。」と言ってミーは、おいしそうに、ご飯を食べはじめた。あつという間に食べ終えたミーは、さっきベルが話した事をチエドに、教えようと思ったがチエドが、

「食べ終わった？なら早く学校行くよ。用意して。」と、お皿を片付けながら言ったので、学校が終わってからにしようと思いきやまた言うのをやめたのだった。そしてまだ対応魔法をかけていない事に気づき、急いでパートナーを呼び出し、かけてもらった。ついでにチエドも、と思い、妖精に頼もうと思ったが、妖精がチエドならミーより先にかけたよ。と言ったので、そんな事頼もうと思ってなかったわ、という顔をして妖精を見た。もちろん妖精は、嘘だとわかったので、いたずらっぽく笑って消えた。ミーは、妖精に見透かされたことを悔しく思ったが、時間がない事を思い出しあわててチエドの元へと走った。外に出ると、カレンダーと呼ばれるもぐらが、頭を出していた。ミーとチエドに気づくとフウーと赤い息を吐き、宙に「火曜日」という文字を作った。そしてミーとチエドが、

「ありがとう。」と言うと、もぐらは、宙に文字を残し地面にもぐってしまった。そして、もぐらが消えると文字もスウと消えた。それから2人は、時間がぎりぎりなことに気づき学校までずっと走っ

たのだった。

教室につくとすでに先生がいて、出席をとっていた。

第8話

「あと、3秒で席につかなくちゃ、遅刻にするぞ。」と、息をきらしながら、教室のドアをガラツと開けた2人に、先生は言った。2人は、急いで席まで行き慌てて着席すると、先生は、

「5秒かかったが、まあセーフにしてやろう。」と言いニカツと笑った。この人物は、ミーとチエドの担任であり、歴史の教師である。彼の名は、サンといい、みんなから、とても好かれていて、ミーとチエドもとても信頼していた。

ソロンには、村ごとに、1つ学校があり、6歳から15歳までが、通っている。そして学年というものはなく、魔力とパートナーの強さによってクラス分けされているのである。そのためミーとチエドのクラスにも、6歳の子がいたり、15歳の子がいたりする。しかし、7歳の子もミーやチエドと同じように、歴史や数学などを勉強するわけではない。同じ時間を過ごすのは、魔法授業とお昼の時間だけなのだ。だが、ミーとチエドは、みんなそろって授業を受ける時間、つまり魔法の授業の時間が嫌いだった。理由は、みんながそろってからではない。その授業の教師が、嫌いなのだ。そして、最悪なことに今日の1限目の授業は、魔法授業だった。

魔法授業の教師、イガは、教室に入ってくるなり、
「話すのをやめろ。魔法とは、神聖なものであり、本来ならお前たちのような薄汚いガキ共が、使う事さえ許されないものなのだ。」と一括した。(イガとは、とても強い魔法使いだが、それに反比例するように、性格が悪いとみんな思っていた。逆にサンは、とても弱そうな魔法使いだが、性格はとても良いと思われていた。)そして、自分のパートナーを呼び出し、何か命ずると、妖精は、教室の中を監視するように、1人ずつの顔をのぞきこみながら、ゆっくりと、飛びまわり始めた。ミーは、イガのパートナーの事が、怖かった。他人のパートナーのレベルと能力を、知ることは、その相手が

教えてくれない限り不可能なため、この妖精のレベルがいくつなのか、知らなかったが、ミーは、絶対に自分のパートナーよりもレベルが上だと思っていた。自分のパートナーより、レベルが上の妖精に、会うと、人は、恐怖を覚えるのだ。そのため、もし自分のパートナーより、上の妖精の魔法を使いたいのなら、恐怖に打ち勝ち、その妖精を従わせなければならない。ミーは、何度も、恐怖を乗り越えてきたが、これから先この妖精の能力を使いたくなくなったとしても、多分、この妖精を、従わせる事など、出来ないだろうとも思っていた。そして、イガの妖精が、ミーの顔の前に来た。そして、ミーをカマキリのような目でのぞき込むと、鼻で笑い飛び去っていった。時間に換算すれば、ほんの数秒だっただろうが、ミーにとっては、とても長かった。そして、クラス中の人間を確認すると、イガの元へ帰り何か呟き、消えた。それから、イガは、妖精の領域の話をし、そこに行った者は、生きては帰れないとみんなに何回も、言った。この話は、以前にも聞いている、イガのお気に入りのお話なのだ。そのため、ミーの意識は、今日の計画の事にとんだ。この後の音楽の授業も、歴史の授業もすべて計画の事だけを考えて過ごしたのだった。しかし、パートナーと約束した通り、お昼に呼び出す事だけは、忘れなかった。そんなミーの様子を、見ててチエドは、不安を、抱き、昨日から何か変だ。と思ったが、何かあったのなら、話してくるだろう。と思い聞くのを、やめた。

そして、いよいよ放課後になった。チエドには、
「サナと遊ぶから、先に帰ってて。」と言って教室で別れた。そしてサナのクラスに行くように、チエドに思わせると、さっそく校長室へ向かった。本当は、今日計画を、練っている内に、何度も、チエドに助けてもらおう。と考えたが、もし計画が、失敗した時チエドにまで、迷惑をかけてしまう。と思い、諦めたのだ。そして、校長室のそばまで来ると、ミーは、計画の第一歩を踏み切った。まずパートナーを通し透明魔法の妖精を、呼び出した。その妖精は、レベル1の内気な、とても可愛い女の子であり、ミーのパートナーと、

とても仲が良い妖精の1人である。さつそくミーは、自分を透明にしてもらった。そしてゆつくりと校長室に近寄ると、ドアをそつと開け、中に誰もいない事を確かめた。透明魔法の妖精と、ミーのパートナーの妖精は、ミーの後を興味しんしんの顔をし、静かについてきた。

第9話

ミーは、2人に「ここから、先は、少しも音を立てちゃいけないのだから、絶対に話したり、変な物を、触ったりしないでね。」と真剣な顔でささやいた。2人は、満面の笑顔で、こくこくと、うなずき、小さな手で小さな口をおさえた。ミーは、にっこり笑い、1回静かに深呼吸をすると、校長室の中へと忍び込んだ。最初に、校長の机の周りを、何か変わった物がないかどうか、調べた。そして、奇妙な柄の物や、箱を見つけると、その都度引つ張り出し疑念した。しかしこれだ。と思うものがなく、時間だけが過ぎてった。いくら探しても見つからず、昨日の事は嘘だったのか、とさえ考えた。しかし、その時、2人の妖精が、何か言いたそうに、ミーの回りをぐるぐると飛び回り始めた。ミーは、仕方なく2人の方を見ると、妖精たちは、まだ手を口にあてていた。そして、首を、ブンブン横にふり、目をドアの方に向けた。ミーには、どういう意味か分からず、「小さな声でなら話してもいいわ。」と、そっと耳打ちした。すると、パートナーの妖精が、

「ドアのそばに、誰がいるんだ。早く探し出して逃げた方がいいよ。」とあわてて言った。

ミーは、一瞬血の気が、引いたが、すぐに校長先生は、今日いないんだから、誰か違う人が、通っただけだわ。と思っ

「大丈夫よ。だってこのこの部屋の人は、今日いないんだから。人が通りかかっただけよ。」

と言いままた探し始めようとした時、

「残念だったね。さあ、どこにいるんだ？隠れてても私が、ドアを閉めたら君は、もう逃げられなくなるんだ。さあ！出て来い！！」と、言った人物は、今日いないはずの、カール校長だったのだ。ミーには、何故こんな事になったのか、訳がわからなかった。確かに昨日カールは、隣村に行くって言ったのにどうしているの？！しか

も、どうして誰かいるってわかるの？ 私ちやんと透明になつては
ずなのに！ そう思った時、2人の妖精の事を思い出し、ミーは必死
に、自分の回りに目を走らせた。2人が見つかったら一環の終わり
なのだ。しかし、妖精の姿は、どこにも見当たらなかった。ミーは、
どこかに隠れたのだろう。と思い一安心すると、どうやってこの場
を逃げるかどうかに、意識を集中した。カールは、それほど強い魔
法使いという訳でもないの、すばやくドアに向かって走れば、逃
げられるだろう。と考えた。しかしこの後ある男の出現により、ミ
ーの考えは、砕けた。

「校長、そろそろ遊びの時間は、終わりにして頂きたい。」と、背
筋の凍る声で、言ったのは、あのイガだった。そういうとイガは、
校長が答えるよりも、早く解除魔法を、部屋中にかけて。するとミ
ーの姿が、一瞬にしてあらわになってしまった。ミーは、恐怖のあ
まり身動きが出来ず、ただただその場にじつと立っていた。ミーの
姿が、現れた瞬間イガは、興味をそそれたらしく、片方のまゆを、
神経質にあげミーを見ていた。カールはというと、怒りですさまじ
い顔をしていた。ミーは、頭では、早くにげなくちゃ。と思ってい
たが、体が動かなかった。しかし、もし動く事が、出来たとしても、
イガを出し抜き逃げる事など、できなかつただろう。そんな重々
しい空気の中、最初に、沈黙を破つたのは、カールだった。

「これは、驚いた。まさか護衛魔法使いともあろう者が、盗みを働
くとは。」と、怒りで声を震わせながら、言った。ミーは、
「盗もうなんて思っていなかったわ。ただ何なのかつきとめようと
思っただけよ。」と反論しようとしたが、声が出てこなかった。し
かし、ミーが答えなくても、カールは、また話し出した。

「恐怖のあまり声もでんか？ ふんっ。誰かが、昨日立ち聞きしてい
た事は、知っていた。それでわざと今日は隣村に出かける。といっ
て、誘い出したんだ。まさかこんなに、上手くいくとは、思わなか
ったがな。しかもそれが、護衛魔法使い殿だとは。」ここまでい
うと、校長は、高らかに笑った。この言葉を聞いた時、ミーは、自分

がまんまとこんなやつ、罨に引つかかってしまった事が、とても悔しかった。そんなミーの様子を見たカールはさらに言葉を続けた。「護衛魔法使いなんぞみんな、お前のようなフヌケな者ばかりだ。

ドリスが禁断の魔法を使った時だって気づかず宮殿で、のほほんとお茶でも飲んでいたんだろう。」と、あざ笑った。この時、ミーは、カールが、護衛魔法使いを、馬鹿にしたことに、怒りを覚えたが、ふと、カールが、口走った事に気が付いた。そう、この時カールは、ドリスが、どうやって地球に行ったのか、自分でも知らない内に、ミーに教えてしまったのだ。ミーは、その事に気づくと、だんだんと、恐怖がやわらいでいき、冷静に物事を考えられるようになっていた。もちろん声を出すことも出来たが、まだカールが何かヒントを言うかもしれないと思い、恐怖におののいている、ふりを続けた。しかし、イガは、ミーの変化に敏感に気づき校長が、また何か言おうとする前に、割って入った。

「校長、この娘は、どうするんです？どこかに閉じ込めますか？」とカールに、尋ねた。カールは、気分が高まっていたため、イガの言葉など耳に入っていなかった。そして、カールは、今までの人生の中で1番の過ちを犯したのだった。しかし、もちろんミーにとっては、ふってわいた幸運だった。なんと、カールは、地球からドリスが、持って帰ってきたという物を、自分のかばんの中から取り出し、ミーに見せたのだ。

「お前に最後の土産として、お前が探していた物を、見せてやろう。」と言い、ミーに近寄ると、目の前に突き出して見せた。それは、黒く奇妙にゆがんだ丸い玉だった。ミーは、これが、どれほどの価値があるものか最初わからなかったが、親切にもまた、カールがヒントを、あたえてくれた。

第10話

「この玉は、ただ飾るだけ代物ではない。闇の現というとても、すばらしい物なのだ。お前が、もしこんな馬鹿な真似をしなかつたら、最も魔力の弱いクラスの者を、実験台にしようと思ったが、しかたあるまい。自業自得というものだ。」といい、笑うと、ミーに、その黒い玉を近づけた。すると、その玉は、紫のまがまがしい光を放ちミーを、覆い隠そうとしたのだった。ミーは、何故だか、わからなかったが、自分は、死ぬんだ。と、いう漠然な思いが、全身に駆け巡った。しかし、恐怖はなく、不思議と心地よい感覚に、陥ったのだった。そしてミーの目がうつろになり、体が、隙透き通ってきた。このまま誰も何も言わず、時間が過ぎたのなら、ミーは、確実にこの世から消え、もう2度とチエドに会う事もなかっただろう。しかしある者が、ミーを助けたのだった。なんと、それは、イガだった。

「やめろ。」と校長の腕をつかみ止めた。校長は、戸惑いながらもイガをにらみ、

「何をするんだ。放せ！」と、言った。イガは、

「校長、これは、どういう事なのか説明いたしたい。私は、校長室に盗みに入った者が、いる、助けてくれ。」と校長が、おっしゃったので、解除魔法をかけ盗人の姿をあらわにし、逃げ出さないようにした。しかし今までの、話を聞いてると、私には、校長が、違法をなさつておられるように、思えてならない。生徒に限らず生きている者を、実験台にする事や、どう考えてもソロンに、あつたとは思えない玉を、持っていらっしゃる。それだけでも、2つも法を、犯している事になる。さあ、どういう事なのか、説明して頂こう。」と今までに、聞いた事が、ないような声色で、校長に、詰め寄った。ミーは、イガも校長の仲間だと、思っていたのでこのイガの、言葉には、とても驚いた。校長も、イガの言葉に、驚き、説明しよう

したのか、口を開きかけた時、ミーの横に、いきなりチエドが、現れた。そして、カールやイガそして、ミーが、口をひらくまでに、チエドは一瞬にして、ミーを校長室から、連れ出した。その手際の鮮やかさには、イガも感嘆の声をもらったほどだった。

第11話

校長室では、ミーとチエドが消えたあと、カールは、必死になってイガからのがれようとしたが、イガは、決して腕を放さずスキをあたえる事はなかった。

チエドはミーを校長室から、連れ出した後、すぐ近くの、部屋に駆け込んだ。ミーは、チエドに手をひかれたまま、何も言わずに、チエドと一緒に部屋に入った。そして、次の瞬間、ミーは、自分の家にいたのだ。

「チエド・・・。何で?!」どうやってここに連れてきたのか、どうやってイガにまで気づかれず自分の横に現れたのか、そして何よりも、何故自分が校長室にいるのが、わかったのか聞きたかったが、何で?としか、聞く事が出来なかった。

「僕が、家で本を読んでいたら、ミーの妖精と、この透明魔法の妖精が、僕の目の前に現れてミーが、校長室にもぐりこんで何か探そうとしてただけで、それが畏だったらしく見つかった。って、凄い剣幕で騒いだんだ。そりゃ、最初ミーは、サナと一緒にいるはずだ、と思ったけれど、今日ミーの様子がおかしかった事を思い出して、急いで学校に戻ったんだよ。」とチエドが説明した。ミーは、妖精たちが、チエドの横にいるのを、見つけた。その中にはチエドのパートナーもいた。

「それで、校長先生が、護衛魔法使いは、フヌケだとか何とか言っていた時には、もうドアの所で透明になって、立ってたんだけど、これでミーのそばに行って上手く連れ出しても、追いかかれてつかまるに決まってるって、思って、1回校長室を離れ、近くの部屋に入ってたんだ。そこが、さつき入った部屋だよ。そこで僕は、いろいろと考えて、創造魔法の妖精を呼び出したんだ。これで、もうわかったら?」と、今にも泣き出しそうなミーに言った。ミーは、創造魔法の妖精に自分の家の戸に作った、通路の印の跡を見つけ全て理

解した。(創造魔法とは、空間と空間をつなぎ、瞬時にして行き来が出来るようにする、瞬間移動の魔法のことである。)そして、チエドに言葉では、言い表せないほどの感謝の気持ちだが、わきあがり泣きたくなくなってしまったのだ。そしてとうとう、

「ありがとう、本当にありがとう。」と言いながら、涙を流した。そんなミーを見て、チエドは、安心した。ミーが、生きていることを今やっと確認できたような気がしたのだ。

チエドは、不気味な玉を、校長に、突き出された時の、ミーの変化を見て、ミーが、死んでしまう!と、感じた。その時チエドは、イガの、隣を音を立てないように、すべるように、歩いているところだった。もしそこで、チエドがあせり、ミーの元へ、走りだしてしまったのなら、今ごろ2人、いや、もしかしたら、イガもあの闇の現という物に、吸い込まれていたかもしれない。しかし、チエドは、決してそんなへまを、しなかった。隣でイガが、腕を伸ばした事に、気がついたからだ。

チエドは、ミーの頭を、ポンポンと軽くはたくと、ミーに

「さあ。ミー全部説明してもらおうよ。」と、優しく言った。ミーは、昨日校長室で、聞いてしまった事や、今日ベルが言った事、そして今日校長室で起こった事を全て隠さずチエドに、話した。チエドは、ミーが話している間、何も言わず黙って聞いていた。そして、ミーが、話終わると、しばらく暗い顔をして、今聞いた話を、理解しようとしていた。そして、数分たったころ、やっと口を開くと、しっかりとした声で、ミーに尋ねた。

「僕にも、闇の現とは、何なのか、ベルの言っている話の意味だとかは、わからない。でもそういう事じゃなくて、ミーのことで、一つ聞きたい事があるんだ。何で、昨日校長先生と、黄土色のマントを着た男との話を、聞いただけで、校長先生が、地球から、物を持ち込んだ事に関わってると思ったの?もしかしたら、ドリスっていう魔法使いにもらっただけっていうふうにも、考えられたらだろ?」
と、もつともな、質問をした。この事を、ミーには、ちゃんと説明

する事は、出来なかった。ミーにも、よくわからなかったのだ。

「実を言つと、私にもよくわからないの。チエドの言う通り、もらただけとも、その時には、考えられたわ。でも、私にはその時、何故か、そうとは、考えることが、出来なかった。あとで、もしかしたら、校長先生は、関わっていないかもしれない、とも少しは思つたの。でも本当に少しだけ。」と、困つたように言つた。チエドは、その気持ちをも、完全に、理解することは、出来なかったが、なんとなくわかるような気はした。

「でも、まあ、ミーの直感は、多分当たつてたんだよ。生徒を闇の現の、実験台にしようとするぐらいだからね。多分、闇の現を使つて何か悪事を働こうと、したんだらう。でももう、今ごろイガに捕まっているだらうし、校長先生の計画を、心配する必要は、なくなつたんだ。」と言つた。それからミーとチエドは、これからのことについて話し合つた。

「ドリスという魔法使いは、伝説の世界に、禁断の魔法をつかつて行つたつて校長は、言っていたけれど、そんな事が出来そうな禁断の魔法なんてあつた？」

「本当は、禁断の魔法じゃないかもしれないよ。創造の魔法だつてつかえるんじゃない？」と、チエドが、答えると、創造の魔法の妖精が、

「無理よ。創造の魔法は、その魔法使いが行つた事のある地じゃないと、空間を、つなぐ事は、できないの。」と、言つた。2人は、妖精たちが、いる事を、忘れていたので、いきなり声が出て驚いた。そんな2人の様子には、気づかなかつた妖精たちは、4人して、順番に、自分の意見を述べ始めた。

第12話

「禁断の魔法を能力に、持つ妖精の中で、もしかしたら、異世界に行くことが、できる妖精が、いるかもしれないわ。調べてみてあげる。」と言ったのは、透明魔法の妖精だった。

「私は、闇の現ってなんなのか、知ってそんな妖精に、聞いてみてあげるわ。」と言って

「それより、今日シャルルは？」と言葉を付けたしたのは、チエドの妖精だった。

「ベルっていう子は、聖なる木から生まれたんじゃないかって、人間から生まれたの？じゃあ、もしかして、妖精を呼び出す事、出来ないんじゃない？」といったのは、ミーの妖精だった。そして、最後に、創造魔法の妖精は、みんなの、疑問を、ほとんど解決してくれる言葉を、さらりと、口にした。

「ねえ・・・、私ずっと不思議だったんだけど、みんな本当に聖なる木から人間が、生まれるって思ってるの？聖なる木から生まれるのは、私たち妖精だけよ。あなた達人間は、別の世界から、聖なる木の使者の妖精が、魔力を持った人間を、連れてくるの。その、ベルっていう子が、言っている、人間が人間を生むのか、どうかは私は知らないけれど、その子のいう通り、聖なる木から、人間が生まれるなんて事は、絶対ないのよ。」と言った。

みんな、この話を、しばらく理解することは、出来なかった。しかし、時間が、たつにつれ、妖精たちは、自分たちが、聖なる木から生まれていることが、わかり、感動した。ミーとチエドは、自分たちは、他の世界から連れてこられたという事を知り、ショックを受けたのだった。

「私は、今日初めて、呼び出されたから、人間たちが、どういう考えでいるのか、知らなかったけれど、まさか、こんなふうに、考えているなんて、思いもしなかったわ。」と、信じられないというよ

うに、首をふりながら、創造魔法の妖精は、言った。

「何でそんなこと知ってるの？」と、ミーが、やっとしぼり出したような、声で言った。

「私が、聖なる木の、使者だったの。」と、嫌なことを、思い出したように、今までとは、打って変わって、暗い声で、答えた。

「あなたが、使者だった？じゃあ私を連れてきたのもあなたなの？！」と、ミーが、大きな声で、言った。

「覚えてないわ。何千人も連れてきたんだもの。」

「そう……。でも何でやめたの？」

「自分からやめたんじゃないわ。聖なる木が、私に、やめると、いったのよ。」と、金髪の、フワフワな髪を、いじりながら答えた。

すると、今まで黙っていた、チエドが、ゆっくりと、自分の言葉を、確認するように、

「君は別の世界に、行って何千人もの、人を連れて来た……。という事は、人間がどこの世界から連れてこられるか、知ってるんじゃないのかい？」と、言った。妖精は、悲しそうな顔で、チエドを見つめると、

「それだけは、教える事ができないの。」と、申し訳なさそうに言った。この言葉には、ことなりゆきを、見守っていた他の、妖精たちも、がっかりしたように、ため息を、もらした。

「何で?!」と、チエドは、思わず叫んだ。

「聖なる木との契約で、別の世界のことを、教えてはいけない事になってるの。」

「じゃあ、僕達を、聖なる木の元へ、連れて行ってくれ。直接会っていうから。」と、チエドが、言うと、チエドの、パートナーが、

「だめよ！そんなことしたら、死んでしまうわ！」と、言った。ミ

ーと、チエドには、何故か、わからず、首をかしげた。すると、今度は、ミーの、パートナーが、

「聖なる木は、妖精の領域にいるんだ。」と、説明した。それを、聞きチエドは、絶望したが、ミーは、納得できなかった。

「今まで人間が、妖精の領域に行ったことが、あるの？」と、尋ねた。みんなその言葉に、ハツとした。すると、創造魔法の妖精が、「私が知っている限りないわ。でも、聖なる木も、人間は来ることができない。もし来れたとしても、死がまっている。と、言っていたのは確かよ。」と、答えた。

「そうね。私たちもそういうふうには、教えられてきたわ。でも、それは行ったら死ぬ。というふうには、人間に信じ込ませ、行こうという気にさせないように、誰かが仕組んだのかもしれない。」と、ミーが、言った。これには、創造魔法の妖精も、反論する事が、出来ず黙ってしまった。

「だって、みんな考えてみて。伝説の世界だって、今まで存在しないとか、滅んだとか、いわれてきたのよ？でも、ドリスという魔法使いは、地球に行き、闇の現まで持って帰ってきた。それが、たとえ悪いことでもね。でも、私たちが、教えられてきた事、信じてきたことが、間違っているって事が、わかったわ。それと同じで、もしかしたら、妖精の領域に行ったとしても、生きて帰ってくる事ができるかもしれない。」と、ミーはみんなに、説明した。チエドはその通りだと思った。妖精たちも、少し疑いつつもうなずいた。

「そうだ。これで、話はまとまった。妖精の領域に行き、聖なる木に、僕たちは、どこから来たのか、そして、僕たちが誰から生まれたのか聞いてみよう。」と、立ち上がりみんなに、言った。

「そうね。そして、もし出来るのならママに会ってみたい。」と、ミーが言った。すると、ヒラヒラと、ミーの横を黙って飛んでいた、対応魔法の妖精が、

「ねえ、ミー、世話人になったんだよね？そのベルっていう子の所に、行かなくていいの？」と、言った。ミーとチエドは、今何時か考えた。そして、赤い鳥が飛んでいったのは、少なくとも2時間前だと、気づくとあわてて家を、飛び出した。

第13話

ベルの家に、着くと、中は真っ暗で、誰もいないかのように思えた。しかし、チエドが、電気のスイッチを、手探りで探し、急いでつけると、奥のソファアに、すやすやと、寝息を立てながら、寝ているのがわかった。ミーは、ベルを起こさないように、寝室に行き、毛布を取りに行こうとした。しかし、階段に足をかけた時、つまずいてしまい、物音を、たててしまった。その音に、ベルは、気づき目を覚ました。そして、ミーの、姿を、見つけると、嬉しそうに駆け寄ってきた。ミーは、ベルが、自分の元へ笑顔で、来た時、ベルの事を、忘れていたことに、とても、罪悪感を覚えた。そして、これからは、2度とベルを、真っ暗の中、1人でいさせたりしないと、心に決めた。

「お姉ちゃん！遅かったね。僕もお腹ぺこだよ。」と、言って、笑いながら、ミーに、抱きついた。ミーは、朝、ベルが、自分の事を、

「お姉ちゃんに、そっくり！」と言った事を、思い出した。ミーは、家族というものを、知った今、朝言われた時とは違い、とても暖かい気持ちになったのだった。そして、ベルを、優しく包むように、抱くと、

「うん。ごめんね。今からすぐ作るから。何がいい？」と、言った。すると、妖精たちが、

「チヨコ！」

「ケーキ！」

「パフェ！」

「クッキー！」と、言った。ミーとチエドは驚き、妖精たちの方を見た。

「えっ?!妖精って何か食べるの?!」と、チエドがいうと、妖精たちは、怒ったかのように、

「食べるよ。」と、口をそろえて言った。

「だって、今まで食べてた事なんかじゃないか。」

「だってこんなに長く妖精の領域に、帰らなかつたことなかつたもん。」と、チヨコと言った、ミーのパートナーが答えた。そして次は、ケーキと言った、チエドのパートナーが、

「そうよ、今まですぐ、帰っていたもの。」と、甘い声でささやくように言った。

「私は、今誰のパートナーにも、なっていないから、ほとんど妖精の領域にいるの。でも、昔パートナーになっていた時も、人間と一緒に食べたことなんてなかつたかも。」と、昔を思い出すように言ったのは、パフェと、言った透明魔法の妖精だった。そして最後に、クッキーと言った、創造魔法の妖精が、

「私は、今まで人間に、呼び出された事も、ソロンに來た事もなかつたから、もちろん人間の、前で物を食べたことなんてないわ。」と、言った。そして、ミーとチエドが、ポカンとした顔を、していると、妖精たちが、一斉に、

「ねっ！だから今日は、みんなで食べようよ。」と言って、ミーとチエド、そしてベルの回りを、飛び始めた。ミーとチエドは、笑うと、

「了解！」と言って、キッチンへ向かい、物作り魔法の妖精を呼び出した。ベルはというと、妖精たちを、興味深々の顔でながめ、触ろうと手をのばしていた。妖精たちは、それに気がつくことベルの、頭の上に座つたり、ほうに触つたりしながら、ベルと遊んだ。ミーとチエドは、急いで妖精たちの希望通りの品と、ベルの好きそうなものを、考えた結果浮かんだ、ミートソーススパゲッティを、物作り妖精に手伝ってもらい作っていた。そして、出来上がると、物作り妖精は消え、ミーとチエドは、料理を机に運びみんなに席にくるように言った。（もちろん妖精たちはイスに、座らず机に腰をおろした。）ミーのパートナーと、創造魔法の妖精は、自分の前に置かれたチヨコやクッキーを、少しづつ割りながらおいしそうに食べ

た。しかし、パフェとケーキを注文した、透明魔法の妖精と、チエドのパートナーは、スプーンやフォークが、大きすぎて使えないらしく手で食べることにしたため、ちよつと不機嫌な顔をしていた。ベルは、ミーたちの予想通りミートソーススパゲッティが、大好物だったらしく、おかわりをした。そんな様子を、見ていたチエドが、

「そうだ！妖精たちに名前をつけようよ。だつて一緒に、謎を解いてく仲間なんだから、名前があつた方が、呼びやすいよ。」と、いきなり言った。妖精たちは、名前を、つけてもらったことが、なかつたのでとても喜んだ。そしてミーも、その意見に賛成だったので、「うん。何にする？」と、机に体を乗り出し、チエドに尋ねた。その時ベルが、ミーの妖精を指差し

「チヨコ！」と、叫んだ。最初みんな意味がわからなかつたが、チヨコと言われた、ミーの妖精が、にっこり笑い

「じゃあ、僕チヨコ！」と言つたので、ベルは、名前のことを、言つていたので気づき、ミーたちは笑つた。そして、妖精たちは、チヨコに続いて自分たちの、食べていたものを、自分の名前とした。ベルは、にっこり笑うと、ミーに、

「僕にパートナーが出来たら、ミートソースつていう名前にする。」と、言つた。パー

トナーになつていない、パフェとクッキーは、どうかベルのパートナーだけには、将来なる事がありませんように。と、心の中で願つた。パフェと、クッキーが、考えていたことが、手にとるようになって、チヨコとケーキは、笑いをこらえることが、できなかつた。ミーは、そこまで嫌な名前かしら？と思つたが、妖精たちにも、好みがあるのだろう。と考えたのだった。そして、ミーは朝ベルが話した事を、詳しく聞こうと思ひ、

「ねえ、ベル。朝の話なんだけれど、ベルには、家族がいるんですよ？」と、ベルに尋ねた。すると、ベルは、

「家族つて何？」と、無邪気な顔をして、ミーに聞き返した。ミー

は、

「朝言つてたじゃない。ママと、パパとお姉ちゃんが、いるんですよ？」と、言った。

「ママ？パパ？いるような気がするけれど、よくわかんないや。でもお姉ちゃんは、わかるよ。ミーだもん。」と、にっこり笑い答えた。ミーは、何で？と思いつながら、

「私じゃないわ。あなたの家族のお姉ちゃんよ。アンっていう名前の！」と、あわてて言った。

「アン？誰のこと？僕わかんないよ。」と、ベルは、困ったように、ミーを見つめ答えた。その時、聖なる木の使者だった、クッキーが、小さな声で、

「ソロンに、魔力を持った人間たちを、連れてくる時間は、聖なる木が、食事をする時なの。聖なる木は、人間たちの記憶を、食べるのよ。」と、言った。ミーやチエド、そしてクッキー以外の妖精たちは、言葉をなくした。ミーとチエドは、なぜ自分たちに、連れてこられる前の世界の記憶がないのか考えたことがあった。そして、やっとクッキーの発言によって、理由がわかったが、それはあまりにも、悲しい答えだった。そう……。ソロンの人々は、聖なる木によって、4歳までの記憶を、奪われていたのだ。

第14話

クッキーは、みんなが黙っているのをみると、話を続けた。

「でも、時々全て食べるのではなく、少しだけ食べて残すことがあるの。記憶を全て聖なる木に食べられなかった人間は、自分が1番大事に思う記憶だけ、残される。でも、それも、時間がたつにつれ、曖昧になって、最終的には消えるの。そう、ベルのようにね。」と言って、ベルの方を見た。ベルは自分の名前が、出たことはわかったが、何の話をしているのか、わからずポカンとしていた。ミーは、聖なる木に憎しみを覚えた。チエドは、怒りを抱くことはなかったが、1つ疑問に思う事があった。

「聖なる木は、何で魔力をもった人間ばかり連れてくるのか知ってる？」と聞いた。クッキーは、

「わからないわ。ただ昔に、聖なる木が魔力をもった人間を探し出し、つれて来い。と、先代の使者に言ったらしいの。」と、答えた。そしてチエドが、

「その謎を解けば何か見えてくるものがあるかも知れない。」と、言って眠そうな顔をしているベルの方を向き、

「もう、遅いから寝よう。明日は学校に行つてイガ先生に、あの後どうしたのか聞いてみなくちゃ。」と、ベルを寝室まで抱きかかえ運んでいった。ミーは、チエドが帰ってくるまでの間少しだけ、ソファで横になろうと思いついてソファに、腰をおろした。しかしチエドが戻ってきた時には、ミーはすっかり寝息をたて眠りに落ちていた。チエドはしかたないなあ。と苦笑いをする、また寝室に行き、自分の分の毛布とミーの分の毛布を持ってきた。そして、ミーにそつと毛布をかけると、何か笑いながら話している妖精たちに、

「おやすみ。もう妖精の領域に帰っていいよ。あつ！クッキーいるいと、話してくれてありがとう。」とにっこりと笑い、言った。クッキーは、何も言わず微笑みかえした。そして

「おやすみ。明日の朝できるだけ早く呼び出してね。それまでに、いろいろと情報集めておくから。」とチヨコが、言いみんなそうそう。というようにうなずき消えた。それからチエドは、ミーの向かい側のソファでいろいろと、考え寝たのだった。

次の日の朝、最初に起きたのは、ベルだった。ソファで寝ているミーとチエドを見つけると、昨日の事を思い出し、どういう意味だったんだろう。と一瞬考えたが、面白くなさそうだと思い、すぐ考えるのをやめた。そしてミーのそばに行き、僕ミーに似てる人してるような気がするんだけどなあ。と思ったのだった。そんな事を、考えていた時、誰かが、戸をドンドン叩くのが、聞えた。その音に2人も目をさまし、目をこすりながら戸へ向かった。そして、戸を開けると、右胸にソロンのシンボルマークが記してある黒いマントを身につつんだコペが立っていた。その姿を見た瞬間ミーとチエドは、胸が高鳴った。その独特のマントは、護衛魔法使いの衣装なのだ。仕事の時身につける特別なマントで、護衛魔法使いの誇りでもある。コペは興奮し顔を輝かしている2人に、

「そう、喜ぶな。まあ、わしも初仕事の時は、興奮したもんだがの。」といい、子供のように笑った。ミーとチエドは、やっぱり仕事なんだ。と心の中で呟きコペの次の言葉を待った。そしてコペは笑うのをやめ、もう一度2人の顔を順々に見ると、

「今回の仕事は、ちとキツイかもしれん。初仕事となればなおさらな。」と、今度はミーとチエドを試すように見た。2人は大丈夫だというようにコペを見つめ返した。その目にある勇気と知性を見つけたコペは、優しく微笑み

「わしは、お前たちに期待しておる。お前たちを護衛魔法使いに推薦したのは、何を隠そうわしのじゃ。」ミーとチエドは初めて、誰が自分たちを推薦してくれたのか知り、それがコペだとわかると、とても光栄に感じた。そしてコペの期待に答えられるよう今回の仕事を頑張ろうと誓ったのだった。コペは、

「おっと、こんなことを話している暇などなかったんじゃった。今

回の仕事はお前さんたちの学校に関係のあるものことなんじゃ。今すぐ学校へ向かってくれ。他の護衛魔法使いはもう集まっておる。」と、言いミールとチエドが何か質問する前に消えた。

「まさか、イガ先生がカールを殺しちゃったとか？」と恐る恐るミールがチエドに聞いた。

「いや、イガはそんなことしないよ。そりゃ昨日まではイガは人殺しでも、何でも出来るって思ってたけど、昨日イガがミールを助けてくれたのを、見てからイガは本当は、良い人なんじゃないかと思うんだ。」

「うん。私も今までイガ先生のこと大嫌いだったけれど、今ではそうでもないわ。まあ、イガのパートナーは、嫌いだけれどね。」とミールも、チエドの意見に賛成の意を示した。

「それじゃあ、早くケーキたちを呼び出そう。昨日早く呼び出すって約束しちゃったし。それにいろいろと情報を集めてきてくれたかもしれない。」と、チエドはいい、くすぐったい低い声で自分のパートナーであるケーキを呼び出した。ミールはチエドが、妖精を呼び出すときの声が、好きだったのでチエドが言い終わるのを、待ってから自分のパートナーであるチヨコを呼び出した。そして2人はパートナーを通しパフェとクッキーを呼び出そうとした。しかし現れたのは、ケーキが連れてきたパフェだけで、チヨコはクッキーを連れてこなかった。いや、正確に言えば連れてくる事が出来なかったのだ。ミールがチヨコの顔が真っ青なのに気づき

「どうしたの？」と聞いた。チヨコはミールを、悲しみにあふれた目で見ると、

「クッキーは・・・石になっちゃった。死んじゃったんだよ。」といい泣いた。他の妖精もハッと手を口にやり、涙を流し泣き出した。ミールとチエドは驚きチヨコを見た。チヨコは、何があつたのかを説明をした。

「僕、クッキーのところに行ったんだ。ミールが呼んでるよ。って、いいに・・・。そしたらクッキーは石になってた。僕何があつたの

か、わかんなくて、クッキーの顔を覗き込んだんだ。でもクッキーは、目をぎゅっとつぶって僕のことを見る事はなかった。「チエドは昨日最後に見せたクッキーの優しい笑顔を思い出した。」

第15話

「クッキーは何か聖なる木と、使者になる時契約した。だから僕たちが、どこから来たのかだけは教えることが出来ない。って、言っただよね。でも本当に言っただよない事ってそれだけだったのかな。もしかしたら聖なる木が、魔力を持った人間の記憶を食べるっていう事も言っただよ、いけなかったのかも。それでクッキーは、僕たちのために契約を破った事によって聖なる木に罰をうけた。」とチエドは昨日のことをおもいだすように言った。そしてまた昨日のクッキーの最後の笑みを思いだし

「クッキーは、自分が石になることを知っていたんだ。」と、付け加えた。今ではミーも泣いていた。チエドは、ぐつと涙をこらえ「クッキーのためにも絶対に謎を解こう。たとえどんな結末が待っているようにも。」とみんなに強く言った。

「そうね。じゃあまずは、早く学校に行って何が起こったのか調べなくちゃ。」とミーが涙を拭きながらまっすぐ前を向き言った。そしてベルの朝ご飯だけを用意すると、

「じゃあ、ベル行ってくるね。今日は昨日より早く帰ってくるようにするから。」とベルにいい、ミーとチエドは急いで自分の家へ、護衛魔法使いのマントを取りに戻った。

ベルは、何がおこったのかやっぱりわからなかったが、クッキーにもう2度とあえないんだ。という事だけ理解しミーとチエドの用意してくれた朝ご飯を、悲しい思いで食べた。

ミーはすぐにマントを着てチエドを待った。チエドはマントを手に持ち、走ってミーの元へ来た。チエドは、ミーの元へ着くと息を切らしながら、すばやくマントを着て、またミーと一緒に学校への道を走った。

学校へ着くと護衛魔法使いの人々が学校の回りを陣取り、生徒や教師を学校の中へ入らせないようにしていた。ミーとチエドの姿に気

がついたサナは、

「やっぱり2人もそのマントを着てるのね。何があったの？」と聞いた。ミーとチエドは、

「わからない。」とだけ答え仲間の元へ急いだ。コペは、護衛魔法使いの1人から、何か報告を受けていた。2人は、手の空いてる護衛魔法使いを見つけると何があつたのか尋ねた。

「昨晚この学校のイガという教師が、消えたのだ。そしてその時一緒にいたと言われている校長の姿も見えない。そしていなくなった部屋には、まがまがしい空気が残っていたことから、禁断の魔法が使われたと思われるため、われわれが調査にきた。」と説明してくれた。ミーとチエドには、あのあと何かあつたんだ！と思い、校長室へと走った。やはり2人が消えた部屋とは、校長室だったらしい。3人の護衛魔法使いが、校長室の中で何か話し合いをしていた。ミーとチエドに気づくと軽く挨拶をしたが、また何もなかったかのようには話しだした。2人は校長室の中の空気の乱れを敏感に感じ、この部屋では、禁断の魔法が使われただけではなく、伝説の世界から持ち込まれた闇の現も使用された、という事がわかった。そしてカールがまんまとイガを闇の現により出し抜き自分はどこかに姿をくらましたのだらう、と推理した。それとイガは、あの恐ろしい謎の代物・・・闇の現により殺されてしまった。とも考えた。2人は、ベルの話聞いていたコペに今すぐ自分達が知っている事を話そう、と思いコペの元へ行こうと校長室を出た。するとそこへ、サナが来て

「やあ、大変なことが起こったね。さつき君たちの仲間の護衛魔法使いに聞いてびっくりしたよ。僕に出来ることは、ないかもしれないけれど、僕の生徒が危険を犯し、人を助けようとしているのを、黙って見ていられない。僕にも手伝わせてくれ。」と言った。2人は本当に嬉しかったが、いくら自分たちの先生だとはいえ、護衛魔法使いではない人を危険にさらしてはいけないと思い、チエドは「先生、本当にありがとう。でも大丈夫。いろいろと分かっている

事があるんだ。解決まで、その時間はかからないから。」と言った。サンは納得できない様子で、

「何がわかっていているんだ？」と聞いた。

「詳しいことは言えないんだ。あっ！そうだ、先生！ドリスっていう人知ってる？校長先生の知り合いらしいんだけれど。」と、逆に尋ねた。サンは、首をかしげると、

「さあ、聞いたこともないな。そのドリスという人物が何か関係しているのか？」といったものサンらしくない真剣な顔で尋ねた。

第16話

「いや、それはまだはつきりわからないんだけど、全然関係してない、って事はないと思ってるんだ。じゃあ、もう行かなくちゃ。先生ありがとう。」

「ああ、何も役にたたなくてすまないな。じゃあ、頑張れよ。」といいにつこり笑いコペの元へ駆けて行く2人を、しばらくの間見つめたあと、サンは、消えた。

ミーとチエドはコペの元へ着くと、コペを静かに話しが、出来るところへ連れて行き、ミーはチエドに話した事と同じ事を、チエドは聖なる木の秘密や、妖精の世界に行くことができるかもしれない事など、昨日校長室から逃げてきたあと、みんなで話し合った内容をコペに話した。コペはすぐ話を理解し

「それでお前さんたちは、妖精の領域に行き聖なる木に話を聞こう、というんじゃない？」と2人を、鋭く観察するような目で尋ねた。2人は何もいわずただ頷いた。コペはやはりな、というようにため息をつくと、

「お前さんたち2人だけでは、行かせん。生きて帰ってくる見込みが少ないのに、わしが黙って行かせるとも思ってたか？わしはお前さんたちを失いたくないんじゃない。」と暖かい口調で2人を抱きしめながら言った。2人はコペの言葉が、胸に突き刺さった。本当に痛かった。血はながれなかったが涙としてながれた。ミーとチエドは7歳の頃からずーと2人だけだった。いや、正確に言えば他にも回りに、世話人のおばさんやおじさん、そして学校の友達や先生がいた。しかしみんな、世話人という役を演じる人間のおばさん、おじさん。友達や先生という役を演じる人間のサナやサン。クラスである事件が起こった時から今までそう考えてきた。その事件とは、イガの授業、つまり魔法授業の時に起こった。その日の授業の内容は、「死の薬」という死刑となった罪人が、飲まされる薬を作るとい

とても難しい授業だった。なぜ難しいかというところ、「死の薬」とは、作っている最中少しでも集中を乱せば、薬を飲まなくても、薬が自分の心に染みわたり、想像を絶するほどの苦しみを味わったあと、確実に死ぬという、作る者に恐怖を与える薬だからである。しかしクラスの人を除いては全員、恐怖に負け集中力を乱すこともなく作ることができた。その除かれた1人は、作ることが出来ず6歳にして死んだ。そう、苦痛に叫び体を痙攣させながら……。その声はみんながまだ作っている最中に聞え始めた。しかし、集中を解かなかった。解いたら自分も死んでしまうのだから、当然といえば当然である。それに確実に死ぬのだから、助けようとして自分まで死ぬことはない。と考えるのも当然である。ミーとチエドもそう考える人間の1人だった。そして作り終わると恐る恐る声のした方へ行った。その人物はイガが、痙攣している体を必死に抑えようとしているせいで、余計苦しみもがいているように見えた。顔は紫だった。目は黄色だった。そして体からは、ぎしぎし音がなっていた。縮んでいたのだ。その時作り終わっていたのは、ミーとチエドの2人だけだったので、その人物が死んでいく光景を見ていたのは、ミーとチエド、そしてイガだけだった。ミーは気が変になりそうだった。人が死んでいくのを初めて見たのだ。チエドは目の前で起こっている光景を現実だと受け止めることが出来なかった。しかし2人とも目を放すことはなかった。イガはそんな2人を見て恐怖を覚えた。死というものに魅了されていると思ったのだ。3人がいるような感情を抱いている中、その人物は死んでいった。耳に今でも残るほどの叫びを残して……。イガは、その叫び声を聞いた瞬間奇妙な思いにかられた。言葉で説明できるような思いではなかった。そしてその時からイガは生徒に嫌われるような教師になった。ミーとチエドも変わった。もちろんイガのように、意地が悪くなったわけではないが、以前のように人間を人間だと思えなくなった。自分たち以外の存在を、認めることができなくなってしまったのだ。それは、死んでいく人間を見たからとか、あの叫び声を聞いたからでは決し

てない。(もしかしたらイガも、恐ろしい叫び声を聞いたからというわけだけでは、ないかもしれないが、今となってはわからない。) 叫び声を聞いたあとの事が原因なのである。ミーとチエドはその人物が死ぬまでただ呆然と立っていたわけではない。この光景を現実のものだと受け止め気をすっかり持った2人は、その人物の名前を何度も何度も呼んだ。イガも体を抑え無理とは、わかっていても痙攣を止めようとした。そんなイガを、2人は手伝いもした。でもやはり予想されていた結果は、変わらずその人物は死んだ。それから少しして、薬を作り終えた人が、段々とその人物を囲み、座っていた3人の回りに集まってきた。そして、すでに原型を留めていない、死んだ者に目をやった。最初みんな悲しみの意を示したが、誰かが、「恐怖に負けて集中を解いたからいけないんだ。自業自得だよ。」とぼそつと言った。その言葉を聞いた時、ミーとチエド以外の生徒は、その意見に賛成したらしく、死んだ者を、見る目が変わった。悲しみを表す目から、同情、そして軽蔑の目になったのだ。その目を見たミーとチエドは必死に、自分たちはこんな人間とは違う。こんな人間じゃない。こんな……。と心の中でいい続けた。それからしばらくは、その思いが態度に表れていたが、時がたつにつれ、心の奥底にしまいこみ態度に表れることはなくなった。というより、その思いがミーとチエドの一部になり、自然な感情になったのである。それから今までの約6年間、2人は自分たち以外の人間の存在を自然なことのように認めなかった。認めるのは、人間じゃない生き物の存在、そう、妖精や動物だけだった。しかし人間を嫌いになつた訳ではない。教師の中ではサンの事を信頼しているし、好きだとも思っている。そして、あのカールのこと、好きだった。だが好きだという事と、存在を認めているという事は一致しない。つまりもしサンが死んだとしても、悲しくないという事である。存在を認めていないのだから、死んでもなにも変わらない。しかしベルがソロンにやって来て、家族の存在、血のつながりを教えてくれてから、2人の気持ちは変わりつつあった。もちろん、2人は気づかな

いうちにだが。そして今、コペによって2人の心の奥底にあった思いは、涙となって流れた。コペは、2人の一部となつていている思いに気づいていた。ずっと2人の孤独な気持ちに気づいていたのだ。2人を指名し護衛魔法使いにしてから、自分たち以外の人間をみる目の違いを感じていたのだ。そして今、この3日間の間2人に起こった話しを聞いたあと2人の心の変化に驚きつつ嬉しく思い、自分の腕の中で泣いている2人の将来を楽しみに思うのだった。昔2人の身に何が起こり、2人を孤独にしたのかわからんが、良い成長をしてくれた。と心の中で呟くのだった。それから2人は、顔をあげると、コペと妖精の領域に行く方法を話し合った。妖精たちは、ミーとチエドの幸せそうなの顔をずっとニコニコ笑いながら、見ていたが、妖精の領域の話になると、真剣な顔をして話に耳を傾けた。「どうやって行ったら良いんだろう？」とチエドが言った。

「禁断の魔法の中で妖精の領域に行くことの出来るのが、あるんじゃないかしら？」と、ミーが答えた。そしてコペは、

「いや、禁断の魔法の中で、使えるのはない。妖精の諸君は何か知らんかの？」と妖精に尋ねた。妖精たちは何か考え込むと、その考えをまとめるように、チヨコが、

「ヒントになるかどうかかわかんないけれど、僕たち昨日妖精の領域に帰ったあと、聖なる木があるってクツキーが教えてくれた場所に行ってみたんだ。そこは、ソロンと妖精の領域の狭間なんだけれど、右側はソロンの空間、左側は妖精の領域ってなってるんだ。それで・・・」まで言うつと横からパフェが、

「それでね！右側のソロンの空間に穴があいてたの。」と得意そうに言った。チヨコは1番良いところを、パフェにとられ、膨れっ面をした。それを聞いたミーとチエドは、

「それだ！」と、コペはというと、

「それじゃ！」と3人同時に叫んだのだった。

第17話

それから3人は、その隙間をどうやってみつけるか、いろいろと考えた。それは、妖精たちにもわからないらしく、黙ってしまった。

その時コペが自分のパートナーを呼び出した。コペのパートナーは、コペ同様知性にあふれ、それにとっても強い。2人共コペのパートナーを見るのが初めてだったため、最初恐怖を感じたが、妖精がミーとチエドを見て

「これは、これは。ご機嫌麗しゅうでございます。お初にお目にかかりますは、私コペ様のパートナーでございます、望遠魔法の妖精でございます。以後見知りおきを。」と深々とお辞儀しながら、にっこり笑い言ったので、ミーとチエドは変な言葉使いをするユニークな妖精を好きになりすっかり恐怖は消えた。コペは自分のパートナーのお決まりの挨拶が終わると、

「さてさて、挨拶が済んだところで博士よ。妖精の領域とソロンの世界の狭間にある場所に、聖なる木があるそうじゃ。そしてその右側がソロンの空間、左側が妖精の領域の空間じゃ。その右側の空間に穴が空いているらしい。そこを通り聖なる木の元へ行く方法を突き止めてきて欲しいんじゃがやってくれるかの？」と言った。妖精は驚き、

「なんと！？聖なる木の場所ですと！？しかも空間に穴？！……うん？博士と私をお呼びになりましたか？」と言った。

「博士という名はお気にめさなかったかの？この2人が妖精に名前を付けているようなのでな。わしもつけてみたのじゃが。」と片方のまゆを上げ聞き返した。

「名前をつけてくださったのですか？！なんと、嬉しき！！もちろん気に入りましたとも。さあ！最初の話題に戻りますかな。ええ・・・聖なる木の場所にある空間の穴、つまりひずみから聖なる木の元へ行くという事ですか？しかしあまりにも危険なお考えでございます

す。」

「大丈夫じゃ。死にはせん・・・と思うぞ。」

「承知いたしました。私本当は嫌ですが・・・本当は嫌なんですぞ？しかしながらコペ様のご命令でしたら、今すぐにも覗いて調べてきてみましょう。まったくもって悲しき・・・コペ様の頭は星が飛んでいるのではと思うほどです。」

「わしの頭は、星など飛んでおらん。ひよこもな。さて、博士。無事を祈っておるぞ。」とコペが博士に微笑むと博士は、

「明日にでもお呼びして下さいませよう、お待ちしております。」とまた深々とお辞儀をして、奇妙なポンという音をたて消えた。それからコペは、訳のわからないという顔をしているミーとチエドに自分のパートナーの能力を教えた。望遠魔法の妖精の能力とは、遠い場所からその場所を覗き見ることができる。博士はその能力を使い、その空間の穴を、自分が行かずして見てみよう、としているのだ。見るだけではなく、自分の手や足を想像すれば、その場所に実態を持たぬ手や足が現れる。その幽霊のような手と足は覗き見た場所にある物を触る事も出来るため、もしそこに草でも生えていたら抜く事もできるのである。（しかし、物に触れても、持ち帰ることは出来ない。）ミーとチエドは、さすがコペのパートナーだと思っただ。こんな能力を持つ妖精のレベルで考えられるのは、最強のレベル6だと思ったのだ。（もちろんその推測は当たっている。コペもドリス同様レベル6のパートナーを持つ魔法使いなのだ。）それから、昨日ケーキが、

「闇の現に関して調べてくる。」といていたのを思い出し、ケーキに何かわかったことは、あったか聞いてみた。しかし昨日は聖なる木の元へ行くので精一杯だったらしく、何も聞いていないと答えた。その時空では赤い鳥たちが、鈴をならし飛んでいった。その姿が見えなくなるまで見ていたあと、3人は明日会う約束をし、家に帰ることにした。

ミーとチエドは、ベルの元へ行き3人でご飯を食べた。それからミ

ーとチエドは妖精に

「おやすみ。」と言い別れた。そしてベルはシャワーを浴びに行き、チエドは自分の家に帰った。チエドが帰ったあと、ミーはベルが浴び終わるのを待ち、浴び終わったらしいベルが現れると、髪を乾かしたあと寝させた。そしてやっとミーは自分の家に帰ると手早く着替え、すぐにベッドに入った。眠りにつくまでそう時間はかからなかった。そしてチエドはというと、ミーより一足早く自宅に着いた。それから軽くシャワーを浴び、髪を乾かさなままベッドに倒れこんだ。そしてそのまま寝てしまったのだった。（翌日のチエドの髪形は、ご想像通りすさまじかった。しかしチエドは髪を濡らし直したため、ミーに笑われるという事はさけられた。）

2人が目を覚ました頃、コペは博士に結果報告を長々と受けていた。ミーはベッドから起きると、まずシャワーを浴び、昨日同様黒マントを羽織るとすぐにベルの家へと向かった。チエドは、ご存知の通り髪を直した。そしてミーと同じく護衛魔法使いのマントを着ると、ベルの家へ走った。チエドはベルの家まで行く途中で温度計を見た。温度計は葉っぱをオレンジ色にし、「快適な温度」だと教えていた。カレンダーは、現れなかったが水曜日だという事はわかっていたので、得に気にはならなかった。ベルの家に着くと、

「おはよう。今日はチヨコに頼まなくていいみたいね。」とミーはチエドに言った。

「おはよう。温度計が快適な温度だつてなつてたしね。ベルは？」
ベルの姿が見えなかったチエドは、あたりを探るように見ながら、聞いた。ミーはにっこり笑うと

「ベルね。近所に友達ができたらしくて、朝ご飯食べたらずぐ遊びに行っちゃった。お昼に食べように、サンドイッチ作って持たせたから、今日はウィックおばさんに頼む必要はないわね。」と言った。
チエドは

「そう。ベルにも友達できたんだ。じゃあこれからは、僕たちがいない間寂しくないね。」と安心したように笑い、答えた。ミーもそ

うね。というようにうなずいた。そして、2人幸せな気分で朝ご飯を食べ始めたのだった。(ミーはチエドと一緒に食べようと思い、ベルと食べずに待っていたのだ。)その時コペが、戸をあけ入ってきた。横には博士が、良い気分だというような顔をして、品よく羽を動かして、堂々と胸をはり飛んでいた。その姿を見た2人は、きつと良い結果だったんだ。と感じ胸が躍った。そしてコペが口を開く前にミーは、

「コペおじいちゃん、何かいい事がわかったのね?!」とコペに尋ねた。コペは多少驚いたが、豪快に笑い

「よくわかったの?まあ、博士の様子を見れば分かるかもしれない。朝から自分の英雄伝についてずっと聞かされての。それで少しばかり来るのが遅れたんじゃ。」と言った。ミーとチエドは

「そんな遅れてないよ。それに何時に来るか約束しないで別れちゃったから、もつと遅いと思ってた。」とコペに言った。コペは、それは良かった。というようにまた笑うと、

「さて、博士や。朝方わしに聞かせてくれたすばらしい英雄伝を、またミーとチエドのために話してやってくれ。わしは、台所を借りて朝ご飯でも食べることにしよう。」と博士に言いキッチンへ向かった。ミーは、ベルのお昼のために作ったサンドイッチが残っていることを思い出し、

「コペおじいちゃん。サンドイッチが残ってるの。おじいちゃんサンドイッチ食べれる?」と聞いた。するとコペは満面の笑みで

「奇遇じゃの。わしも今からサンドウィッチを作ろうとしてたんじゃない。大好物なんなの。」と嬉しそうに答えた。ミーは

「良かった。じゃあ今持ってくる。」と言い残りキッチンへと急いだ。そしてサンドイッチを持ってくると、騒々しく自分の席に座り博士が話したのを待った。博士はみんながイスに座り、コペ以外は自分の方を熱心に見ているのを確認すると、1回咳払いをし、重々しく自分が昨日妖精の領域に帰ったあと、やった事を話し出した。

第18話

「私はコペ様をあわれに思いながらも、ちゃんと言われた事はやりとげたのです。まず最初に自宅に帰り魔法を唱え、妖精の領域とソロンの狭間を探したのでございます。狭間はすぐに見付かったのですが穴を発見するには、それからしばらく時間がかかりました。そして私が見つけると、その穴はとても小さく、コペ様のような長身のお方はもつとものこと、あなた様方のような小さいお体のお方も入れないくらい小さな穴でした。あなた様方の妖精はよくみつけれたと私、感心いたしました次第でございます。ええ・・・話がずれました。そうです。それから私その小さい穴をコペ様が楽々通れるくらい大きく開きました。」そこまで話すとミーとチエドの言葉を聞こうと話をきった。しかしミーとチエドは早く続きが聞きたかったので、そんな博士の様子に気づかなかった。コペは博士のがっかりした様子に気づき、笑いを漏らしたが、博士ににらまれたので、おっとと呟きサンドイツに目を戻した。博士はそんなコペを横目で見ながらも、話の続きを話始めた。

「それでは、続きをお話いたしましょう。それから私は穴の中を覗いてみました。すると、どうでしょう？あなた様方の学校につながっているではございませんか。無論私にはその部屋が何の部屋かはわかりません。ですからあとは、あなた様方がお探しくださいますようお願いいたしたい。」と、言ったあと、おなじみのお辞儀をした。ミーとチエドはそれで十分だと思った。そして2人は希望に顔を輝かせながら、コペの方を見た。コペは2人に笑いかけてから、「サンドウイツチなかなかの味だったぞ。」とミーに言った。それから3人は今博士から聞いた話を話し合った。そしてまずチヨコたちを呼び出すことにした。するとチヨコたちは、何か興奮をしているらしく、ざわざわ騒ぎながら出てきた。

「おはよう。パフェも最初から連れていたよ。」とケーキが言った。

そして、妖精たちは博士に気がつくまで妖精同士の特別な挨拶をした。(その挨拶があまりにも長かったため、ミーは、博士と何を話したのか、こっそりチョコに聞いた。するとチョコは、自分たちにも英雄伝を聞かせてくれた。とわざとらしく、疲れた顔をしながら言った。)「ミーとチエドは挨拶が済むのをまち、

「何か良いことがあなた達にもあったみたいね。今博士もいい事を教えてくれたの。」とミーがニコニコ笑いながら言った。チエドは何も言わずミーの意見に賛成していた。コペはというと、妖精が現れた時、何か思う事があったのだろう、いきなり博士を呼んだ。ミーたちは、何かしら?というように、ちらつとコペを見たが、詮索するのをやめ、チョコたちに何があったのか尋ねた。するとチョコとパフェはケーキの方を見て、早く話して。というように急かした。ケーキは、くすくすと笑い甘い声で、

「闇の現のことが少しわかったの。私の友達のおばあさん妖精が、闇の現のこと知ってたの。」と言った。これにはコペも驚き博士との話をやめケーキの方を見た。

「そのおばあさんの話だと、闇の現って私たちの考えていたようなものではないの。私たちは、覗き込んだ人の魂を抜き取り死体すら残さない残酷なもの。だと思っていたでしょ?でもその考えは残酷な事と、死体ではないけれど体を残さない、っていう事だけしかあってないの。本当は、自分を覗き込む人間をどっかの空間に引きずりこんで一生閉じ込めておく物なんですって。しかも闇の現は生きてるのよ。」と説明した。3人は自分たちの想像をはるかに越える、闇の現の実態に驚いた。博士は全てをもらさず自分の知識にしようと表情を変えることなくずっとケーキを見ていた。そしてコペは

「何故その妖精は闇の現を知っておったのじゃ?」と聞いた。

「私もそう思ってた。昔も闇の現のことで何か事件が起こったみたい。その事件について教えてって言っても、絶対教えてくれなかったの。これだけじゃ、あんまり役にたたないかしら?」と、話の途中3人があまりにも落胆したので心配になり聞いた。チョコ

とパフェもケーキと同じく、心配になり首を傾げ3人を見た。コペも教えてくれなかった事に、多少残念に思ったが、いろいろな事がわかったので、万事上手くいく。思い直したのだった。そして、ミーとチエドの顔を見ると、かすかに苦笑し、

「がっかりしておるようじゃの。わしも最初は惜しく思ったが、闇の現によつて殺されたと思っていた、イガ君も助かかもしれん事がわかっただけでも十分じゃと思わんか？」と言った。2人はしばらく考えたが、イガを助けることが、出来るかもしれないと聞き、今までとはうって変わり、すばらしく晴れ晴れとした顔で、うなずいたのだった。そして3人の意見が

「狭間へとつながっている部屋を見つげるために、早く学校に行く。」という事にまとまったので。ミーとチエド、そしてコペは急いでベルの家を出たのだった。もちろん3人の後からは、忙しく羽を動かしてチョコ、ケーキ、パフェ、博士がついて行った。学校に行く途中コペは、さつきケーキの話を聞くために中断した、博士との話の続きをしようと、博士を自分の顔の近くに呼んだ。ミーとチエドは、そんな2人の話が、やはり気になったが、自分たちに話せる事なら、コペは話してくれるだろうと思ひ、コペに尋ねることはしなかった。3人が学校につくと、学校には護衛魔法使だけしかいなかった。ミーとチエドは不思議に思いコペに、何故みんないないのか聞いた。コペは

「事件がはつきりと解決するまで、学校を閉鎖したのじゃ。わしらは3人以外闇の現のことなど知らんから、いつ学校が再び開校するかは、わしらにかかっておるといふ事じゃの。」と言ひ、学校の校門の前で見張りをしている護衛魔法使いに、

「わしら以外誰もいれるな。」と命令したのだった。それから3人は学校に入り校長室に向かった。誰が言ったわけでもないが、3人とも校長室に「狭間へとつながる道」があると思つたのだ。しかし校長室につき、3人は部屋の中をくまなく探したが、「狭間へとつながる道」は、どこにもなかった。念のため博士にも確認したが

「この部屋ではないようですね。私がみた部屋の雰囲気とも違います。どちらかというところ、このような飾り気のある部屋ではなく、貧しいような印象を受けましたが。」と首を品よく、横にふりながら答えた。なので、3人は校長室を出た。そして博士の言う

「貧しい印象を受ける部屋」を探した。ミーとチエドは自分の記憶を探り、博士の言うような部屋はなかったかと考えた。コペは博士を連れて手当たり次第部屋に入り見て回った。チエドは思い出す場所がなく、ケーキと一緒に自分たちの教室の方を見ることにした。

ミーは食料倉庫かと思い校長室の下の階に降りた。そして地下室への階段を見つければ食料倉庫に入り低い気温の中、チョコとパフェと一緒に隅まで探したが見つからなかったもので、一旦倉庫を出て、また考えた。そして、ふと昨日のサンの事を思い出した。

第19話

「そういえば、あのまま先生のこと見なかったけれど、すぐに帰ったのかな？」と独り言を言った。チヨコとパフェは黙ってミーの考えている姿を見ていた。そしてミーの心の中では、自分に起こったここ2、3日の間の出来事が、走馬灯のようにゆるやかに流れていた。それからミーは、今思い出した記憶を自分で確かめるかのよう

に、
「黄土色のマントの男・・・カールが闇の現を見せていた相手。あれから一度も見えていない。カールは私に気づいたから、その男に闇の現について詳しく教えるのをやめ、話を中断した。あれから、教えてもらったのかしら？・・・いいえ、無理よ。だってその次の日に、イガに捕まったのだから。でもイガからカールは逃れた。闇の現のおかげで。それからカールはどこに行ったの？あつ！イガから逃げたあと、その男の所へ行ったの・・・、いいえ。やっぱりそれも無理。護衛魔法使いが、ソロン中の家を探したもの。という事は、あの男は、まだ闇の現について詳しく知らないんだわ。だって、カールから教えてもらう事が出来る時間は、私が授業を受けている間、私が校長室に、忍び込んだ前しかないもの。もし、誰かが校長室へ行ったのなら、絶対に私たちの教室の前を通るはずよ。あれ？でも黄土色のマントの男を見た日も、私たちの教室の前なんか、通らなかつたわ。通つたのは、先生や生徒だけ・・・。そしてもちろん、私がイガに助けられた日も誰も通らなかつた。通つたのは、サン先生とかイガとか・・・。サン先生？そういえば何で昨日、護衛魔法使いしか学校に入れなかつたはずなのに、いたのかしら。」とゆっくりゆっくり自問自答しながら言った。そして最後に自分で言った疑問の答えは、1つしか思いつかなかつた。それを口に出して確定するように言ってしまう事など、とてもミーには出来なかつた。自分で導き出した答えを否定するために、ミーは最後の望みを胸に抱

き一目散に走り出した。そして、ミーの目指した場所に着いた。そこは、サンの研究室、つまりサンだけしか入る事のできない部屋だ。(教師には、一部屋ずつ自分の小部屋がある。)ミーは、苦しげに深呼吸すると、恐る恐るドアに手を伸ばした。すると驚いたことに、鍵はかかっていなく簡単に中に入ることができた。警戒しながら、ゆっくりと部屋に入り、最初ざつと部屋を見渡した。そしてサンがいない事を確認すると、安心し警戒を解いたが、逆に不安な思いは増えた。そして今度はざつと見渡すのではなく、倉庫の時と同じように、慎重に「狭間への道」を探した。すると、数秒もたたない内に妖精の2人が見つけた。2人は

「ミー！あつたよ！！博士の言つてた通り、狭間につながっているような道が！！」と叫んだ。その歡喜あふれる妖精の声を聞いた時、ミーは心の中で、やっぱり予感は的中してしまった。と嘆いた。そして、グツと涙をこらえると、前を見据え、しっかりとした声で、
チヨコとパフェに、

「みんなを呼んできて。」と言った。チヨコとパフェはミーがショックを受けているのを感じ心配したが、ミーの言う通りコペとチエドの元へ急いだ。コペとチエドの2人は絶望したような顔をしながら一緒にたたずんでいた。しかし2人はミーと一緒にいた妖精が、あわてて飛んでくるのを見て、顔に少しずつ笑顔が広がっていったのだった。そして妖精たちが

「見つけたよ！！」と叫んでいるのが、聞こえ笑顔は完全なものへととなった。それから自分たちを呼びに来てくれた妖精の元へと、自分のパートナーを連れコペとチエドは走った。一方チヨコとパフェは、2人が自分たちの元へ駆けて来るので、止まって待つことにした。そして、2人が軽く息を切らし

「どこに？ミーは？」と切羽詰つたように聞くので、説明は後にしてミーの元へ案内した方がいいだろうと思い、顔を見合わせるとすぐに来た道を戻りミーの待っている部屋、サンの研究室へと向かったのだった。

ミーは、2人がチヨコとパフェの後ろからついて来るのを見た。そして得意そうな顔をしてミーを見ているチヨコとパフェに気づき、可笑しくて思わず笑ってしまった。チヨコとパフェはそんなミーを見て、何?というような顔をしている。ミーは笑うのをやめると、「ありがとう。」とニヤツと笑いながら、2人に言った。2人もいたずらっぽく笑って返した。それから、部屋に入ってきたコペとチエドに、自分が何故この部屋だと思ったのか、2人に説明した。そして、ミーが校長室で見た黄土色のコートを着た男、それはサンだったのではないか、と思っっているという事も話した。(それともう1つ、ミーは気づいた事があつたのだが、まだ確信がないので言わなかった。)チエドは、何故あの時すぐ変だと気づかなかったのかと、自分をののしった。しかしコペはというと、驚きもせず意味ありげに博士と目を合わせミーとチエドに朝博士と2人で話していたことを明かした。

「わしは学校の中に必ず、校長に何らかの形で加担しておる者がいると考えていたのじゃ。まさか、サン君だとは思ひもしなかったがな。昨日まず最初に、イガ君が消えたという報告をわしは受けた。その報告には何も不信任を抱かなかったが、その次の報告には、いくつかが奇妙に思う事があつたのじゃ。それは、イガ君がいなくなつた時校長と一緒にいたらしい、という内容の報告だった。みんな変に思わんか? わしは、その報告を聞いた瞬間に変だと感じた。だからわしはもちろんの事、その報告をしてきた護衛魔法使いに、誰がその情報を提供したのだ?と聞いたのじゃ。すると、どうだろう! 彼は、分かりません。誰かがそういう声を聞いたそうです。というではないか。わしの抱いた不信任は大きさを増していった。そしてお前さんたちの話を聞き不信任は、確実なものとなつたのじゃ。それからその声は誰だ?何のために言った?といろいろ考えた。前者の方の疑問は、分からなかったのじゃが、今わかった。サン君じゃ。ミーの推理の通り、サン君が黄土色のマントを着た男だという事も、彼は教師なのだからうなずける。不思議に思つたじゃろ?何故黄土

色のマントの男の姿をあれから1度も見なかったのか。それは、いつも学校にいるからじゃ。教師としてじゃがな。そして後者の方の疑問の答えは、博士と相談した結果わかった。そうじゃ、わしらは誰かがイガ君が消えた時一緒にいたのは、校長1人だったと思わせるために護衛魔法使いを騙したのだろうと考えた。そしてその人物が黄土色のマントの男、サンだという事も、今となっては推測できる。」とコペは説明した。その間博士は、ふむふむとうなずいていた。ミーとチエドはというと、コペの考えの鋭さに驚き尊敬した。そしてコペは、最後に

「今まで黙っていてわるかったの。」と謝った。もちろん2人はそんな事で責める気はなかったので、

「気にしてないよ。」と笑いながら答えたのだった。

そして、コペの告白も終わったところで、3人は誰から行くか相談した。そして、最初に行くのは、博士にきまった。(行くといつても、本当に行くのではなく、覗くという事だが。)博士が危険がないか確認し、大丈夫なら、コペと博士。次にミーとチヨコ。そして最後に、チエド、ケーキ、パフェ。という順番に行くことにした。

博士は危険がないことを確認し、コペと共に「狭間へとつながる道」に足を踏み入れた。すると、その途端、一瞬にして2人は狭間へと消えた。それを見てミーは多少恐怖を覚えたが、勇気を出しチヨコと共にコペのあとを追い狭間へと消えた。そして最後に残ったチエドたちも、もちろんのこと狭間へと消えたのだった。

第20話

コペが最初に目にしたものは、信じられないほどの数の妖精だった。そして何より驚いたことに、その妖精たちみんながコペの方を向いているのだ。コペは

「何故妖精がいる事を教えんかったのじゃ？」と責めるように、自分のパートナーに尋ねた。博士は困ったように、顔をしかめ

「私が覗いたときには、いなかったのです。」と、博士らしくない、もじもじとした口調で答えた。コペは、ため息をつくと、苦笑しながら博士の小さな頭を小指でなでた。博士はコペが怒っていない事に安心したらしく、妖精らしい美しい笑みをこぼした。そしてその時、コペのあとに続いたミーが現れた。ミーもコペと同じように妖精たちに驚きコペの方をすぐるように見た。コペは

「安心してよい。危害を加える気はないようじゃ。」といい、ミーの警戒を取り払った。そのあとすぐにチエドが現れたが、妖精たちにあまり驚かずミーにすぐ

「なんか殺風景だね。」と言った。コペとミーの2人は、チエドの言葉が可笑しかったらしく、2人同時に笑い出した。チエドは、そんな2人を見て面喰らい眉間にしわをよせた。それから、やっとコペとミーは、笑うのをやめ、チエドと向き合い少し話しをした。(3人は、自分たちを見ているこの妖精たちに話し掛ける決心をしたのだった。)

「何かわしらに用があるのかの？」妖精たちは何も答えない。

「人間の言葉わかんじやないのかしら？」チヨコたちは、そんなはずはないとミーに教えた。

「聖なる木に言われてきたの？」最後にチエドが言った。するとようやく妖精たちに変化が表れた。妖精たちの表情が無表情から憎しみのこもった目、怒りにゆがませた口へと変化を見せた。3人は今のチエドの質問が的を得たのだと思った。しかし、このあと1番奥

にいた妖精の1人が

「お前達が仲間を殺したんだ。」と悲痛な叫び声をあげた。3人は顔にこそ出さなかったがシヨックを受けた。すぐにクツキーの事だと分かったのだ。すると今まで沈黙を守っていた妖精たちは、その妖精に続くように次々と話し出した。みんな一斉に話したため何を言っているのか全ては聞き取れなかったが、大体みんなクツキーの事についてミー、チエドそしてコペの3人に文句を言っているらしい事はわかった。3人は妖精たちが静かになるまでずっと黙って聞いていた。言いたい事を全て言い切ったのだろう。すっかり妖精たちはまた最初と同じように何も言わなくなった。しかし最初とは違い話し掛ければ答えてくれるだけではなく、自ら話をしてくれるようになった。自分たちと同じ妖精だから、という事で、チヨコたちがその妖精たちには話し掛けた。

「クツキーの知り合いなの？」チヨコが言った。

「クツキーというのが、殺された仲間のことならね。」ある妖精が答えた。

「仲間？っていう事はあなた達みんな聖なる木の使者?!」ケーキが驚いたように尋ねた。

「みんなじゃないわ。私とこの5人よ。聖なる木の使者は、私たちとクツキーの7人だったのよ。」と、チヨコの問いに答えた妖精がまた答えた。

「聖なる木との契約ってなに？」今度はパフエが言った。この問いには、使者の中で唯一、男の妖精が答えた。その妖精は使者の中で1番年配らしく、髪に白髪が混ざっていた。

「聖なる木は妖精を生む。具体的にいうのなら、生むというよりも命を授けると言った方が正しいかもしれんが。まあよい。そして生んだあとすぐに、その妖精が使者となる器かどうか見分け、使者になれる者だと思ったのなら、まず契約を結ばせる。契約はそれほど難しいわけではない。聖なる木の食事に関わることで、別世界から人間を連れてくるという事、つまり人間が聖なる木から生まれるので

はない、という事などを聖なる木に関わる事実をソロンの者に教える事を禁じるというのが契約だ。我々使者は人間に関わることはない、そのため契約を破る方が難しい。しかしは使者を辞めるよう聖なる木から言い渡せれ、人間に呼び出される身となってしまった創造の者は契約を破ってしまった。そのため聖なる木が命を奪ったのだ。」ここで初めてミーが口を開いた。

「何故クッキーはやめるよう言われたの？」

「創造の者は、聖なる木の周りにある湖の水を飲んでしまったのだ。」と苦しげに年配の妖精が言った。聖なる木の周りにある湖の話など聞いたことがなかったので、その湖が何なのかミーたちは理解する事が出来なかった。年配の妖精はそんなミーたちの考えを見て取り、湖のことについて説明をしてくれた。

「湖とは聖なる木が妖精に命を与える際、使用するものだ。聖なる木は、自分の葉を湖に落とし、その落ちた葉は7日後に妖精となって湖から姿を現すのだ。まだわからんか？湖が聖なる木の葉を妖精に変えるのだよ。」と話したのを聞いて、他の5人の妖精が心配の顔をした。そして黙っていられなくなったのだらう、5人の中の1人が

「そこまで話してしまつて良いのでしょうか？」と小さな声で年配の妖精の顔色をうかがいながら尋ねた。他の4人の妖精もそう思っていたらしく、その妖精に賛成するようにならずいた。年配の妖精は、苦笑いすると

「大丈夫だ。」とだけ答えた。その時使者以外の妖精の2人が、ほのかな光を放ち消えた。ミーたち人間は何か恐ろしい事が起こったのかと思った。しかし妖精たちは気にしてないようだ。コペは

「今のは何じゃ？」と無意識のうちに尋ねていた。使者以外の妖精の1人が

「ただ、人間に呼ばれただけだよ。」とぶつきらばうに答えた。ミーたちは、今まで妖精が人間に呼び出される瞬間を、もちろん見たことがなかったので、見れて嬉しいと素直に感じた。そして、いよ

いよ確信をつく質問をチエドがした。

「それで、そろそろ本題に入りたいんだけど、いいかな？僕たちあんまり時間がないんだ。何で僕たちが妖精の領域にこの穴から来るのが分かったんだい？それと、君たち使者以外の妖精はどういう役割なのか話してくれないかな？」と、使者たちとその後ろにいる妖精たちを、見渡しながら聞いた。この問いに答えてくれたのは、またしても年配の妖精だった。

第21話

「君たちがここに来るといふのは、ドリスという赤いマントの人間が我々に言ったから、わかった。そしてもう1つの質問の答えは簡単だ。この者達は、我々使者の下で働く妖精だ。我々がついて来るように命令したからいる。」ドリス……。ミーたちは、全身に興奮と緊張、そして恐怖が走った。闇の現をソロンに持ってきた人物の手がかりをやっとつかんだのだ。チヨコたちは、羽で気持ちを表しているかのように、思いつきり羽をばたつかせた。そしてコペは、みなぎる感情を抑えるように、ゆっくりと、

「ドリスはここにいるのか？この妖精の領域に……。」「と使者に尋ねた。使者の中の今まで口を開かなかった妖精の1人が、

「もういないわ。彼は聖なる木の命を奪ったあと、伝説の世界……。地球へと消えてしまった。」と怒りと諦めをこめた声色で言った。
「聖なる木を殺した？地球に行った……。？どうやって!?」「ミーが、叫ぶように聞いた。

「闇の現の力だよ。何であなた達人間はこんなひどい事ばかりするのよ!!!」とミーに負けず大きな声で、答えた。

「私たちは違う!!!ドリスが地球から持ってきた闇の現のせい、1人犠牲になつてるの。その人を助けることが出来るかも知れないって思ったから来たのよ。それにクッキーが自分の命をかけてまで私たちに教えてくれたから!!!」とミーは自分が、泣いてるのにも気づかないほど真剣に話した。チエドはそんなミーをそっと抱きしめ、なぐさめながら、

「ミーの言う通りなんだ。だから昔何があつたのか、ドリスは何故聖なる木を殺したのか教えて。」と使者たちに頼んだ。使者の妖精たちは、信じてはいないようだが、聖なる木が死んでしまったのだから、言ってもいいだろうと思ひ、昔あつた出来事に続けてドリスがした事を説明した。

「昔ソロンと伝説の世界地球は、簡単に行き来ができた。創造魔法の妖精に似た能力をもつ親交魔法の妖精によって、地球とソロンを特別な道でつなげていたからだ。ソロンにはその時人間がいなかった。そのため妖精たちは人間がソロンに来るのをとても喜び、人間たちが妖精に対して横暴になっても許していたのだ。しかしある時、妖精の数が激減している事に気づいた。地球の人間が妖精を連れて行き、魔力のある人間に使わせ戦争の兵器としたからだ。この時ばかりは許すことが出来なかった。我々妖精は、親交の者に道を閉ざすようお願い、親交の者はすぐに従い閉ざした。だが、妖精の数は増える事がなく減りつづけた。我々はまず親交魔法の者を疑った。誰かが内密に道を開き、人間と関わりを持っていてと思ったのだ。そして親交の者を1人残らず、調べ上げた。しかし誰がやったのか犯人をあげる事は出来なかった。そして悲劇が起こったのだ。その時の妖精の王が親交魔法の妖精を、みんな殺した。禁じられた魔法の能力を持つ、灼熱魔法の妖精の力によつて。その光景を見ていた妖精で今生きている者は数少ない。その中の1人が私だ。今でも覚えている。一秒一秒全てを想い出すことができる。悲鳴をあげる事さえ出来ない灼熱の炎に包まれながら、親交の者・・・およそ150人が順々に死んでいった。これで他のたくさんの妖精が助かるのだから。と思い自分の友の者が目の前で焼かれていくのをだまっていた。そしてやっと、親交の者を全て殺した。地球に連れて行かれた妖精以外を。これで妖精の数が増えソロンはまた平和を取り戻す・・・取り戻すと信じた。しかしそれから、数日たったある日の朝、自分の隣の家の妖精・・・自分の友の妖精・・・ほとんどがいない事に気づいた。ソロンの妖精の半分が一夜にして消えたのだ。親交の者は間違いなく全員殺したのに、また妖精がいなくなった。あの時の思いを、言葉で表すとすれば、絶望以外何物でもないだろう。例えば自分が直接手をくだしていないとしても、罪の重さは一緒だ。私も親交魔法の妖精を殺した、灼熱魔法の妖精たちと同じだ。自分の仲間である妖精を疑い、人間を疑わなかった我々が愚か

だった。人間が道を開く事が出来ると考えなかった。ちゃんと考え
ていれば、人間が妖精を連れて行ったのだから、魔法を使う事がで
きるという事に気づかなかつた。絶望にかられていても、我々は道
を探した。しかしどこにもなかつた。人間がソロンに来る方法は連
れて行った親交魔法以外なのに、と誰もが思っていたためこの結
果には、戸惑いを隠せなかつた。太陽があがっている時間帯ですら、
心は闇だった。しかし、ソロンに残った妖精たちが、王の間・・・
今の聖なる木が立っている場所に集まり、これからの事について話
し合っていた時、人間たちがどうやってソロンにきて妖精をさらっ
て行ったのか、分かる出来事が起こつた。残った妖精を地球に連れ
てこよとした人間が、王の間に突如現れたのだ。その時、人間が
ソロンに来るために使つたのが、闇の現だ。その時我々を捕らえよ
うと、地球からやって来た人間が、いろいろと話してくれた。もち
ろん闇の現について・・・闇の現が、妖精であるという事も。最初
の頃地球へ連れて行かれた妖精たちは、魔法使いたちにより、戦争
の兵器、闇の現を作るために、大量虐殺された。そして何らかの方
法で、殺した妖精たちを1つに集め、闇の現に妖精の力を閉じ込め
た。闇の現は、人間をどこか闇の世界に閉じ込めるだけではなく、
あらゆる空間を裂き、どこにでも行く事が可能な物だ。他にもいろ
いろ出来る事があるかも知れないが、わからない。その時も闇の現
をその人間は使おとしたが、王が食い止めた。自らの命を犠牲にし
その人間を殺したのだ。それから闇の現は妖精が守ってきた。その
守り主として、聖なる木が誕生した。我々残った妖精全員の力によ
つてな。その時、湖も一緒に聖なる木の水源として作られた。聖な
る木は我々の想像を越えた力を持つ木となり、湖は神秘の水を作り
だすようになった。絶滅寸前の妖精の数を増やしてくれたのは聖な
る木だ。そして我々が聖なる木に従うようになった。聖なる木は口
に出し話す事は出来ないが、心で会話をする事が出来る。そしても
う何も問題が起こる事はないと思つたのだが、君達も知つての通り、
聖なる木は、魔力をもつた人間の記憶を食する。そのため、仕方な

く我々は4歳の誕生日を迎えた魔法使いの者を、連れてきて聖なる木に、その者の記憶を食べさせるようになった。そしてその人間たちは、妖精の数を上回るほどになった。その時には我々妖精も数が増えていたため、妖精の領域を作り人間にソロンを譲った。そして今のように、人間に呼び出された時以外はこの妖精の領域にいる、という制度がとられるようになった。パートナーの制度を作ったのは、その方が人間に関わる妖精の数が少なくてすむからだ。それから今まで、聖なる木の考えにより、妖精の領域にすれば死ぬ。という風に、人間に思わせ、来る気にさえさせないようにした。伝説の世界についてあやふやにしたのも、昔起こった事を知られないように、つまり闇の現によって行く事が出来るという事をな。しかしドリスにはそれらの努力も意味がなかった。そのため彼は妖精の領域に来て聖なる木に、問い詰めた。聖なる木は、彼に嘘についても無駄だと思い、今私が話した事と同じ事を彼に話した。あと、まだ話していない、聖なる木がなぜ人間に自分が生んだという事にしたのか、という事も。その答えは、単純明確。そうした方が聖なる木は人間に尊ばれるからだ。聖なる木にも性格、感情という物がある。聖なる木は、自分が上にたつ事が好きなのだ。ドリスは真実を知り、聖なる木を見下した。そして、ちようちよとする事なく、ドリスは聖なる木か闇の現を奪った。ドリスは相当な力の持ち主だ。パートナーの力が強というだけではなく、ドリス自身の力が強いのだろう。奪った時は聖なる木を殺さず、気を狂わせただけで終わらした。そのためついさつき、聖なる木を殺した時まで、我々は闇の現が奪われたのに、気づかなかった。彼は聖なる木を殺した後、我々に向かって、「俺の後に、人間が来るだろう。そいつらに、俺は地球に行ったと言え」と言った。そして今に至ったのだ。今またドリスという魔法使いによって歴史は繰り返されようとしている。我々に出来る事は何もない。」と涙を流しながら、真剣に話してくれた。話を聞いている最中、コペは無表情だった。チェドはミールに回した腕をほどき、終始苦々しい表情をして妖精の話聞いていた。ミールは、

自分と同じ人間がした事をとても恥ずかしく思った。年配の妖精の仲間の使者や使者の下で働く妖精たちも神妙な面持ちで聞いていた。中には年配の妖精のように泣く者もいた。コペは自分のパートナーの博士の方を一目見ると、言葉を失っているミーとチエドに変わり、年配の妖精たちに、話し掛けた。

「つらい過去を話してくれてとても嬉しく思う。ドリスが何を企みまた過去と同じ事を繰り返そうとしているのかは、図りかねる。だがわしらは何としてもドリスの陰謀を阻止してみせる。」と妖精たちに、宣言した。妖精たちはコペの言葉を全面的に信じたわけではなかったが、絶望に押しつぶされそうになっている心に希望を与えたのだった。その思いの変化を読み取ったコペはその光景を黙って見ているミーとチエドに、

「何を突っ立つておるのじゃ。ドリスの後を追えば地球に行くぞ！闇の現を使ったのなら、この穴のようなものがどこかにあるじゃろう。探すのじゃ。」と強い口調でミーとチエドに命令した。ミーとチエドは今までコペを怖いと思ったことがなかったが、初めて恐れを感じた。そしてコペは護衛魔法使いの長なのだ、と改めて思うのだった。それから3人とチヨコたち妖精は地球への穴を探した。なんと年配の使者とその仲間たちも一緒になって探してくれた。そしてすぐに穴を見つけることができた。その穴は小さかったが、妖精の1人が大きくしてくれた。そしていよいよコペたち3人とパートナーの妖精たち、そして透明魔法の妖精パフエが地球へと続く穴へ、向かったのだった。その姿を見ていた使者たちは、かすかな希望を胸に抱き、コペたちの帰りを待つのがあった。

第22話

その頃ドリスは、闇の現を手で持ちながら、地球の人間を高いビルの上から見ていた。彼が今思うのは、家族だった。ドリスはベルと同じで、かすかに記憶を残された子供の1人だったのだ。ベルはすでに記憶をなくしたが、ドリスは24年たった今でも記憶をなくすることなく、覚えていた。自分の人格を2つに分ける事によって・・・彼の普段の姿はソロンに連れてこられた時から、サンだった。しかし、家族を想い出し、地球の事や妖精の領域のこと、聖なる木のことを調べている時は、ドリスという魔法使いとなった。2つの人格を作ることで、サンでいる時失いそうな記憶のかけらを、ドリスとして覚えておく事で、記憶を抱きしめ続けた。彼はコペたちが思っているような事・・・魔力を持った人間を筆頭に、妖精を利用し世界を我が物にしようとした人間たちと同じ事をやるつもりなどはなからなかったのだ。ドリス・・・つまりミーとチエドの担任であるサンは、自分の家族に会いたかった。ただただ家族と再び会いたかったのだ・・・。サンは、ドリスと共に色々地球への行き方を調べた。しかしミーと同じよう、本からは何も知ることが出来なかった。そのため、ドリスはいけないと知りながらも禁断魔法の妖精の中の1人、拷問の妖精を呼び出した。そして拷問魔法の妖精を従わせ、歴史家である妖精に色々聞いたが、わかったのは、妖精の領域への行き方だけだった。しかしサンはそれで十分だった。妖精の領域に行く方法は、太陽に触れればいい、とその歴史家は、拷問にかかけられ無意識のうちにサンに教えた。その頃、サンはまだ8歳だった。8歳で禁断の魔法の妖精を呼び出す事など、考えられないことだった。もちろんこの時、護衛魔法使いに禁断の魔法を使っただが、サンだと気づかれたのなら今こうして地球にいる事はなかっただろう。しかし、サンであるドリスは、サンを弱い魔法使いだという回りの人間に思わせるため、人前で自分のパートナーである、レベ

ル6の妖精、虚ろ魔法の妖精を見せる事はしなかった。それだけではなく、虚ろ魔法の妖精の能力である、人に偽の姿を見せる魔法・
・つまり決して人に自分の本音や感情、素質を見抜けないようにする魔法を自分にかけて続けたのだ。そのためその時調査に来た護衛魔法使いも、サンを弱い魔法使いだと思い、サンが犯人などとは、少しも思わなかった。それにサンは、魔術が弱い者のクラスだったため、余計に考えられなかったのだろう。その護衛魔法使いとは、当時まだ長とはなっていないかったコペであった。コペも騙されミーとチエドも騙されたのだ。もちろん、3人はまだドリスとサンが同一人物であるなどは、知らないのだから、騙された事にも気づいていないが。この後知ることになるだろう。コペ、ミー、チエドがドリスを追い地球へとやって来るのだから……。
3人と妖精たちが、穴を抜け最初におりたつた場所は、公園のような場所だった。そこには、ドリスはいなかった。ドリスは移動しビルの上にいるのだから、いないのは当たり前のだが、そんな事は知る由もない3人と妖精たちは、どこかに隠れているのではないかと思い、必死になりドリスを探した。そしていない事を確信し緊張感が和らぐと、伝説の世界、地球へ本来に来たのだと実感が、だんだんと沸いてきた。ミーはずっと思い憧れてきた地球の地をこうして踏んでいる事が本当に嬉しかった。公園は誰もいなかった。3人は公園からひとまず出る事にし、妖精たちに空からドリスを探してもらおう事にした。チヨコたちは分かったといい、空へとヒラヒラと飛んでいった。そして残ったコペ、ミー、チエドは、何か手がかりがないか、公園の周りを歩いてみることにした。
「ねえ、ドリスは地球にいるって事がわかったけれど、サン先生は？どこにいいのかしら、妖精の領域？それともサン先生も地球に来てるの？」ミーはドリスのあとを追うと決めた時から思っていたサン先生の行方についてコペに尋ねた。
「それなんだから、サンは妖精の領域に来た事までは確かじゃが、そのあとの足取りがわからないのじゃ。彼はまだ妖精の領域にいる

可能性もあるが、ドリスのあとを追い地球に来たとも考えられる。しかしサンは強い魔法使いとは言えない。わしの考えでは黄土色のマントの男になったのも、カールがそのかしたのじゃろう。彼の事はドリスの問題を片付けたあとで良いだろう。」とコペは悩みながらチエドにも聞えるように答えた。その話を聞いていたチエドはある事を思い出した。

「そういえば、校長つてどうなったんだろう？」と、コペとミーも忘れていただろう思い、勢いよく言葉にした。ミーとコペは、チエドの考えどおり見事に忘れていた。コペは、心の中で笑いを漏らした。ミーは、カールなど生きていようが死んでいようがどうでもいいと、思っていたためチエドに言われても、あまり感心を持たなかった。しかしコペは

「そうだのう、カール君はもしかしたらサン君と行動を共にしているのかもしれんな。」とまじめに答えた。チエドは、そうかもね。というようにうなずき、感心がなさそうにしているミーに軽くため息をついた。コペは、ミーは自分たち以外の人間を認めるようになって、好き嫌いははっきりしとの。とチエドと似たような事を思うのだった。その時、地球ではじめて見る人間が、目の前の家から出てきた。家から出てきた人間は黒いマントを着ている3人をうさなくさそうな目で見た。3人はそんな事には気づかず、その人物をしげしげと眺めた。自分たちと違うと一目見て分かるのは、言語だった。見た目は同じなのに、その人物の言っている事がまったく理解できなかったのだ。その人物は3人に向かい、

「こんにちは。この辺に越して来た人ですか？」と、怪しい思いながら聞いたのだ。3人は言っている事がわからなかったが、初めて会った人が話し掛けてくるのだから、あいさつをしてくれただけだろう、と思い自分たちの言葉で

「こんにちは。」と答えた。今度はソロンの言葉がわからなかったその人物は、外人さんかしら？と思い、にっこり笑うとそそくさと立ち去って行った。その姿を見ながら3人は、自分たちの言葉も通

じない、そしてもちろん地球の人々が話す言葉もわからないという事に多少意気消沈した。地球の人と話したいと思っていたのに、無理だとわかったのだ。そして、もう1つ自分たちが場違いだという事にも気がついた。地球の人間はマントを着るといふ事はしないらしい。という事である。(この発見は重要だった。得にドリスを探すために、街中を歩く際、着ていたままなら、間違いなく3人は、花道を歩くことになるだろうから。)そして、3人はマントを脱ぎ抱えた。

第23話

公園を一周したが、魔法の残り香はしなかったため、一旦公園に戻り妖精たちの帰りを待つことにした。公園でまっっている最中何人が5歳くらいの子供が遊びに来た。その子供たちと一緒に手をつなぎ、来る女の人が出た。コペたちにはそれが母親という存在の人間なのだろう、と瞬時に気が付いた。その母親と子供が何か話し追いかけてっこをしている姿や、子供が遊んでいるのを暖かく見守っている母親の姿を目を放す事なく、見つめた。コペは自分が母親、（いや男なのだから父親だろう。）になった気持ちで見ている。ミーとチエドは自分が母親から見守られている子供になった気持ちで見ている。自分たちが魔力を持った人間に生まれてきたことを悔やんではない。ソロンに連れてこられた事も今では良かったとも思っている。しかし、聖なる木に4歳までの記憶を奪われた事がつらかった。思い出だけでもいいから家族が欲しかったのだ。あと1つ何度も何度も考えている事があった。結論はいつも同じだったが、無意識のうちにも考えてしまう事……。それは、ソロンに連れてこられた自分たちは、母親の顔も父親の顔も何もかも覚えていないが、地球に残った家族は自分のことを覚えているのだろうか？自分は死んだことになっていいのか？それとも突如消えた事になっていて今でも謎のままになっているのだろうか？という事だった。ミーの考えはいつも覚えていない、もしかしたら家族も私に関する記憶を失われているかもしれない。というものだった。チエドは、わからない。という言葉がいつも最後に頭の中に残る声だった。しかし、覚えてはくれないだろう。と思う自分がいた。数時間前ソロンの歴史を教えてください使者たちに聞けば答えてくれただろう。だが、ミーもチエドも聞く事が出来なかった。はつきりと、家族はお前達の事を覚えてはいない。といわれるのが怖かったのだ。しかし、子供と一緒にいる母親の姿を目の当たりにした今、ミーは誰かに

「家族はお前のことを覚えている。今でも……。」と言って欲しかった。たとえ嘘でも……。そう思った瞬間、今にも消え入りそうな声で、コペに

「ねえコペおじいちゃん、ママやパパは私の事覚えているかな？もしかしたら、いるかもしれないお姉ちゃんとかも……。」と尋ねた。コペはミーの思いが手にとるように分かった。この言葉を聞いた時のチエドのビクツとした体の震えから、チエドも気にしていたのだろうという事もわかった。2人の思いを理解したからこそ、偽りの幸せを与えようとは思わなかった、ミーたちを喜ばせる嘘をつくことは出来なかった。そのためコペは2人が落胆するという事がわかっていても、自分の考えている真実の思いを口にした。

「ミーやチエドが何と答えて欲しいかは分かる。だが、わしは後で涙するよりも心をはつきり持ち真実を受け止めた方がよいと思うのじゃ。嘘は真実より幸福な思いになる事が多い。真実は嘘より苦しい思いになる事が多い。じゃがの、わしは真実こそ人々が幸福になるものだと思う。つらい真実を知ればその時は、つらいのは当たり前じゃ。しかし嘘はしょせん偽りの幸福を与えてくれるものだ。今わしが自分の考えを口にするというのなら、それは、ミーにとってチエドにとって受け止めたくないものだと思う。わしの考えは、お前たちの事を家族が覚えている可能性はとても低いという事じゃ。理由は簡単じゃ。長い間地球から人間を連れて来ているのに、地球で問題になっていない。わしは過去にソロンから妖精を連れてきたという事柄も、地球の歴史には残っていないと考えている。ソロンにも残っていないのだからな。じゃが、気を落とすことはない。これはわしの考えであり、列記とした真実ではない。それに真実が嘘でもあることはある。」ミーとチエドはコペの言葉の意味がわかった。わかったからこそ、それが真実なんだと受け止めた。もしここでコペが嘘をついていたのだとすれば、2人は最後にたどりつく真実を受け止めることは出来なかっただろう。2人は真実を受け止めたからこそ、家族を探すという思いに決心をつけることができた。

コペは2人の表情から受け止める事が出来たかどうかを察する事は出来なかった。そのため2人が言葉を発するまで待った。それは数分だったかもしれないが数秒だったかもしれない。ミーとチエドは考えがまとまった時自分でも驚いたが、笑った。悲しいという思いはなかった。ミーはコペに言った。

「コペおじいちゃん。私もそう考えてた。でもはっきりと口に出して言われるのが、怖かったから使者に聞く事もしなかったの。でも今コペおじいちゃんに聞いてよかったと思ってる。それに不思議と悲しくないのよ。あと決心がついたの。」と、ミーは自分の進む道がはっきりと見えた今、とても強い声で言った。チエドも

「僕もだよ。コペさんに言われた真実を受けとめる事ができたのは、嘘をつかないで言ってくれたおかげだよ。」と、にやっと笑いながら言った。チエドの目にも迷いはなかった。コペは2人が今回の経験を通してよい方向に成長したと思った。コペもミーたちと同じような事を考えた事がなかったわけではない。しかしコペ自身がけっこうな年であるため、母親や父親が生きているとは考えられない、とすぐ結論に達した。その考えは、当たっているだろう。コペが自分の家族に会う事はもう2度とないのだ。そんなことを心の隅で考えながらも暖かい目で2人を見つめた。チエドは話を続けた。

「僕はそれでも一度家族に会いたい。たとえ遠くから眺める事しかできないでも。」と言った。それに続きミーも

「私もチエドと一緒によ。もちろんドリスの問題が片付いてからでいいの。」とコペをまつすぐに見据え言った。コペは何も言わずただうなずいた。うなずいたコペの後方から、何かパタパタと飛んでくる。チヨコだった。チヨコの後から見えてくるのは、パフェだった。チヨコが何か言う前に、見つける事が出来なかったのだろう、と思った。うつむき加減でもしよぼんとしていたからだ。ミーはチ

ヨコに

「そんな顔しなくてもいいって。ありがと。それにチヨコでも見付からない場所にいるって事がわかったし。」と笑いながら言った。

チヨコはちょっとふてくされたような顔をしたが、にやつと笑ってみせた。コペとチエドは気にすんな、というように肩をくいつとあげてみせ微笑んだ。そしてチヨコの報告がすんだあと、パフェがすいっと前に現れ、誇らしげに背筋を伸ばし誰か尋ねてくれるのを待っていた。その思いに答えたのはチエドだった。

「パフェは何か良い知らせを持ってきてくれたみたいだね。」とパフェの顔を笑いながら覗き込み聞いた。パフェはパアツと顔をほころばせこくこくとうなずいた。

「うんっ！あのね！！ドリスのパートナー見ちゃった！」と一気に言った。その報告は思っていたよりも、良い知らせだった。コペも興味をかられた様子でパフェの話に耳を傾けた。チエドは詳しく言うように、パフェを急かした。

第24話

「やっぱり、パートナーのレベルは高いみたい。多分カールの言っていた通りレベル6だと思う。オーラが凄かったもの。能力は、虚ろ魔法だと思うわ。」と、みんなを見渡しながら言った。チヨコは妖精の能力を聞いても、どういう効果がある魔法なのか検討もつかなかったが、他の3人は簡単にはいかないと、決意を改たにしたのだった。カールの言っていた事の中に、ドリスが地球から闇の現を持ってきたという事など、合致しない点があったので、もしかしたらレベル6という事も間違いなのかもしれないと、3人共少なからず思っていた。使者たちが

「ドリスは相当の力の持ち主だ。」と言った時も、もしかしたら・・・。と少し安易に考えていたのだ。しかし、パフェの話聞き、そんな考えは最初から捨てておくべきだった。と、安易に考えていた自分に腹が立った。そんな3人の顔の表情や緊張感を感じたチヨコは、どういう魔法なのかわからなくても、危険なんだ、遊びで何とかなる問題じゃないんだ、と初めて真剣に事態を受けとめた。妖精たちはみな主として、好奇心が強い。そして、いつも考えが前向き、というよりも楽天的なのである。そのため、今回の事も、何とかやるよね、面白そう、などとしか考えていなかったのだ。恐怖にかられる場面があっても、その瞬間だけ、という場合が多い。それが、妖精たちの良い所でもあり、悪い所でもある。今回は悪い方に傾いてしまったとはいってもない。今でもチヨコ以外の妖精は、危険、恐怖、緊張という言葉からはかけ離れた心境だろう。それが、もしかしらこれから役にたつかもれないが、死に接近する1つの障害となるかもしれない。妖精たちの多くが本当の恐れを初めて感じるのが死ぬ時なのである。しかし、死を感じている博士の心境は、違っていた。今こうしている間にも、博士は死ぬか死なないかという場面に直面しているのだが、面白いことに、心境は幸福というも

のなのである。

ドリスを見つげるため公園から、北の方角へ魔法の残り香を感じ取りながら、黙々と博士は飛んでいった。公園から東西南北全ての方角に、魔法の気配がしたため、妖精たちは各自分担を決めたのだ。博士は北、チヨコは南、パフェは西、ケーキは東という事になった。そして公園から飛び立ち数分してから、博士はここにドリスは立ち寄っただろうと思う場所を発見した。そこはパン屋だった。古い歴史あるお店という印象を受ける店構えのその店は、男の店員が1人、女の店員が3人いた。男は若く、女は3人共子供のようなようだった。年はせいぜい15歳ぐらいに見えた。この店でパンを買ったのか、ただ寄ってみただけなのかは、博士には分からなかった。だが、ドリスにとって意味のあるものだったのだろう、と推測した。博士は自分が人間に変身できる能力の持ち主だったのなら、この場で変身し店の人間に、赤いマントの男は何をしていったのか尋ねる事ができるのに、と悔やんだ。(しかし、博士は人間に変身できる能力の持ち主でもなければ、そんな能力の妖精がいるわけでもない。考えるだけ無駄というものである。)そして博士は、魔法の香りが続く方へ足を進めた。その時だった。いきなり目の前が真っ暗になり、気を失う前、かすかに目にした物は、真っ白のチューリップだった。それから、博士は自分が意識を取り戻すまでに、どのぐらいの時間がかったのか、分からなかったが、日の照り具合から言ってほんの数分だろうと考えた。地球にきた時と太陽の位置や、空気の流れが変わっていないからである。(ちなみに、地球へ来た時刻は、紫色の翼に黄色の胴体というユニークな鳥が飛ぶ時間、つまりお昼の時間が約2時間ほど過ぎたぐらいだった。)そして、意識が戻った時、最初に目にした物は、またしてもチューリップだった。しかし、気を失う前に目にしたチューリップではない、色が違うからだ。今度は真っ黒だった。そして、そのチューリップを手にしていた妖精こそ、ドリスのパートナー・・・虚ろ魔法の妖精だった。もちろんその隣には、サンでありドリスでもある人物が立っていた。だんだ

ん頭がはつきりしてきた博士は、自分の前に立ちばはかる妖精と魔法使いをじっくり観察した。そして、その魔法使いの魔力、パートナーの妖精のレベル、全てを瞬時に計算し、敵わないと思った。周りを大雑把に見渡したが、何か建物の中にいるらしいという事しかわからず、出口の位置など重要な事を知る事が出来なかった。博士は諦めドリスと妖精に視線を戻した。チューリップを持った妖精は美しかった。しかし、美しいバラにはとげがある。ということわざが似合う妖精だとも思った。とても、笑顔が恐ろしかった、いや、それよりもその妖精の放つオーラが凄まじかったのだ。博士は、必死に考えた。この場をどうやってぐり抜けるか……。まず何をすべきか……。そして考えついたのが、一般的に考えたのなら最悪なものだった。しかし博士にとっては、最高の思いつきだったのだろう。博士は不敵な笑みを浮かべ自分を眺めているドリスに向かいにっこり笑うと

「これは、まさに噂に聞く通りお強い印象を受けますは、ドリスさん。ご機嫌いかがかな？私コペ様のパートナーでございます。博士という者でございます。以後お見知りおきを。」と深々とお辞儀をし、言ったのは、例によってあのおきまりの挨拶だった。これには、多少意表をつかれたドリスと虚ろ魔法の妖精は眉間にしわをよせ、観察するように、博士を見た。博士は自分を誇らしく思っていた。こんな場面でさえちゃんと挨拶ができてこそ真の紳士というもの。私はやはり真の紳士なのですな。と見つめ返しながら考えていた。そして、ドリスは

「ご丁寧にも。私の事は知っておられるだろうと思いますので、今更名乗りませんが、私のパートナーを紹介いたしましょう。この妖精は貴殿と同じレベル6の妖精、名前は付けていませんが、そうですね。つけるとするならば、預言者ともつけますかな。」と、馬鹿にしたように、博士の口調を真似て言った。それに気がついたドリスのパートナーは笑みをこぼしたが、博士は気づかず、コペ様がお考えになっっているよりも良いお方なのかもしれませぬ。と聞

えるはずもないのだが、心の中でコペに話し掛けた。もちろんそんな事はないはずもなくこの後にドリスが言った言葉は、博士の死を確定するものであった。ドリスは最後に軽蔑するように博士を一瞥すると、パートナーの妖精に、

「必要のないやつは早く処分しろ。いちいち連れて来るな。」と言いきびすを返し去って行った。博士は今度ばかりは瞬時に判断する事が出来なかった。

第25話

しかし、敵わないと思った時から、覚悟している事だったため、自分の推測が当たったのだ。とぼんやりと考えましても自分を誇らしく思った。ドリスのパートナーは、博士を鋭い視線で見つめ、死を直面しても恐怖の色が見えない博士を苦々しく思い、どうやって始末しようかと、残酷としかいえない表情で考えた。そして思っていたのが、チューリップの毒で殺すというものだった。今も持っている真つ黒、漆黒のチューリップの色は博士の見た通り、最初は真つ白、純白だったのだが、博士の未来をこの妖精が予言した瞬間漆黒のチューリップに変わった。ドリスが、もし名前をつけるのなら、予言者をつけようと言ったのには、ちゃんとした理由がある。ドリスのパートナーである、この妖精は予言を趣味でするのだ。しかもその趣味は必ず当たる……。そして、博士の未来は、「死」だった。そのためチューリップが漆黒、「死」を意味する色に変わったのだ。この妖精は、いつも白い花を使い予言をする。心の中で自身に予言したい事を聞いたあと、花に意識を集中させ複雑な言葉をいう。決して魔法を使っているわけではないが、その時使用した花は色が変わり、予言の結果通りの色となる。深紅なら、病気や怪我。漆黒なら、死。純白のままなら、今と変わらない未来という意味の結果となる。そして、「死」を表した場合は花が毒の蜜を作り出すのである。その毒の蜜を予言者であるドリスのパートナーは博士に与えようとしているのだ。まがましい笑みを浮かべ博士に「これを飲め。」といいチューリップを傾け蜜が滴り博士の口に入るようにした。博士は絶対に言う事など聞きません。と妖精をにらみながら心で唱えていた。しかし、妖精が博士の目に蜜をこぼし入れようとしたので、博士は慌てて目を閉じた。その時、唇に水のような感覚のものが、触れるのを感じ、博士は無意識に舐めてしまった。その水のようなものは、甘く甘く感覚が麻痺してしまうかと思

うほど、素晴らしい思いを与えてくれる味だった。しかし、麻痺のような感覚・・・というだけだったら、良かったのだが、本当に麻痺しているのだ。博士がそれに気づき水のようなもの・・・蜜を吐き出そうとしたがもう遅かった。口はしびれ手は震えていた。視界は色をだんだん失い、しまいには見えなくなつた。胃は縮み痙攣した。これで終わりだった。博士の小さな体はいくつもの粒子となり、光となつて煌いた。そして散つた。博士の人生は幕を閉じたのである。博士は苦しみを表す叫び声をあげていても、幸福、あるいは満足感を胸に抱いていた。それは、自分の人生に悔いがないからである。コペのパートナーに選ばれてからコペと共に過ごした日々、ミーとチエドに出会い伝説の世界に訪れた事、全てに感謝をしていた。博士はコペが大好きだった。とても尊敬していた。だから幸せだった。自分の死をコペは悲しむだろう、そう思えるのが幸せだった。そう思えるのは自分が本当にコペを信じているからだからである。それが最高の幸せだった。最後までコペ様に幸せにしてもらつた、そう思い博士は死んだ。永遠の瞬間だった。死は命ある者すべてに訪れる。死は自分だけのものであり、幸せの片割れにいる者のものでもある。コペの幸せの片割れである博士の片割れは死んだ、コペの片割れと共に。しかしもう片方の片割れはコペの心のなかで生きている。その片割れはコペが死ぬ時共に死ぬ。博士は永遠の一瞬を経験した。コペは博士の永遠の一瞬をいつ知るのだろうか・・・。

第26話

コペたちは、パフェに詳しい、いきさつを尋ねた。

「私が西の方角に向かって飛んでいた時に、誰かの家に、妖精がいたの。だからすぐ隠れて、建物の影から見ただけだけど、その妖精、白いチューリップの花だけとってまたすぐ飛んで行っちゃって見逃すところだったんだけど、その妖精が飛び立った瞬間、家の人が庭に出てきたの。そしてチューリップの花だけが、なくなってる事に気がついて、なんか怒り出して……。そしたらその妖精、空から魔法をかけてその人を……。なんていうか、ふにやふにやしっちゃったの。だからね！何も怒ってないわよ。みたいな表情になって……。つまり表面上だけだと思っただけだけど、人格が変わったの。それを確認してまた飛んで行っちゃった。この地球に私たち以外に妖精がいるとすれば、ドリスのパートナーだけじゃない？だからあの虚る魔法の妖精はドリスのパートナーだ！って、思ったのよ。それで、すぐ報告しなくちゃって、帰ってきたの。」とみんなが感嘆の声をもらすのを聞き余計気分が良くなったパフェは声を弾ませながら話した。ミーは

「虚る魔法なら攻撃系の妖精じゃないから、考えていたより能力の種類でいうならいいんじゃない？」とみんなに聞えるように言った。コペは

「そうかもしれんな。他の妖精を呼び出される前に何とかする事が出来ればよいのだが。」とあごをさすりながら、考えるように答えた。それを聞きチエドは

「大丈夫さ！3人いるんだから。」と同意を求めると言った。コペたちは軽く笑うなずいてみせた。しかし本音をいえば、不安と緊張だった。大丈夫などとは考えられなかった。チエドも実はそうであるが、そう口に出してしまったら、恐れが現実になってしまいそうと言う事など出来なかったのだ。そして、パフェの報告から

北に向かったという事が分かったので、3人はまだ帰ってきていない、コペのパートナーとチエドのパートナーを呼び戻し、北へと向かう事にした。チエドは妖精を呼び出すため、魔法をつかう体制に入った。意識を集中させた。チエドの回りの空気がざわつき、ケーキが疲れた表情で現れた。チエドは心配し

「大丈夫？！何かあったの？」とあわてて聞いた。ケーキは目に見える以上に疲れているらしく、息もたえだえで、

「大丈夫。ちよつと逃げてきたから。ちよつと呼び出してくれて良かった。」と言った。ミーも心配しチエドと共にケーキを気遣いながら、

「逃げたつてもしかして、虚ろ魔法の妖精から？」と聞いた。ケーキはミーが妖精の事をすでに知っていたのに驚いたような顔をしたが、

「さつきパフェが報告しえくれたんだ。」と言ったので、納得したように、笑うとミーの問いに対してうなずいた。そして、まだ現れていない博士のパートナー、コペの方をミーたちは見た。ミーたちがコペを見るとコペは視線に気づいたのか、振り向き一言

「博士は来ん。死んだ。」とだけ言った。ミーたちは驚いた。妖精たちの中で1番強い博士が？死んだ？なぜ?!あまりにもシヨックだった。博士は死んだという真実を受けとめることなど出来なかった。死というものをミーとチエドは分かっている。だからこそ信じられなかった。こんなあつけないものなのか……。涙がとどまることなく、ほうを伝い地面に触れ消えていった。チエドも泣いた。妖精たちも泣いた。涙をながしていないのは、コペだけだった。少なくとも瞳から涙をながしてはいなかった。ミーが叫んだ。その声は、痛かった。博士の死が現実のものだと

「どうして?!」と……。そのあとに続く言葉などいらなかった。パフェはさつき虚ろ魔法の妖精は北へ向かったといっていた。博士を殺したのは、虚ろ魔法の妖精そして、ドリスだけしかいなかった。コペは

「泣くのはいつでもできる。今すべき事は博士を殺したドリスの計画をなんとしてでも、砕く事じゃ。」とミーとチエドを一喝した。そして……、その後ソロンが、地球が、どうなるのか、自分たちはどうなるのか、誰も考えていなかった。もしかしたら、考えていたかもしれないが、今はわからない。

それから、3人と妖精たちは、北へ向かうため空から妖精たちに誘導してもらい博士の気配のあった場所へと、急いだ。人の波をかき分けながら町を駆けぬけている最中もコペは博士の事を一心に思っていた。コペは悲しんでいないわけではない。博士の信じた通りコペは誰よりも博士の死を嘆いていた。だからこそ、博士が死んだ最後の場所に行きたかったのである。そこに、博士の亡き骸があると信じ……。コペもミーもチエドも、妖精たちも、みな……。妖精は死んだらクツキーのように石になると思っているのだ。博士の亡き骸とさえも2度と会えないという事を、この時はまだ知らなかった。

やがて、空から妖精たちは、地を走るコペたちよりもいち早く、博士の気配が残っている場所を察知した。そのため、妖精の1人、ケーキが報告のためチエドたちのもとへ降りて来た。3人はおよそ20分間走り続けていたため、とても疲れていた。そのため、チエドにケーキが話そうとしているため、足を止めた時は生き返る思いだった。そして、ケーキはチエドに

「博士の気配が残っている場所はこの先の民家を抜けて、田畑の中にある一軒家よ。まだ地上から見えてこないけれど、空からはもう見る事が出来る位置にあるわ。そろそろ止まって対策を練ったほうがいいかも。」と言った。それを聞きチエドは、ミーとコペに

「ケーキたちは、博士の気配が残っている一軒家をこの先の田畑の中にあるのを発見したらしい、そろそろ止まって計画をたてた方がいいかも、だって。」と息をきらしながらも、気にしている2人に伝えた。2人は分かったとうなずくと、地球の町並みをざっと見渡し、どこか隠れる場所はないかと目を光らせた。ミーは自分のすぐ

右側の通りに古い家が並んでいるのを発見した。

「ねえ、こっちの通りに隠れられる空家ありそうじゃない？家の中入っちゃえばドリスのパートナーに見付かる確率も低いし・・・。」
と言った。

第27話

2人はすぐ了解し、

「他の妖精に、探すように伝えて来て。」とチエドはケーキに頼んだ。ケーキはすぐに、まだ上で見張っているチヨコとパフエに話した事を伝え、自分も一緒に空家を探すため右の通りへと入った。妖精たちは5分もたたない内に、3人かたまり人並みの真中で様子をつかがいながら立っているコペたちの元に戻ってきた。チヨコはすぐ3人に

「空家あるよ。くもの巣はってそうな家だけれど、なんとか魔法使ったりする事ぐらいは出来そう。」と言った。すぐに、ミーはコペとチエドの答えを待たずに

「すぐに案内して。」と答えた。チヨコたちはすぐに、空家へと案内した。そして、着いた場所はさつき博士が、魔法の残り香を感じ立ち寄った場所、そしてドリスのパートナー、虚ろ魔法の妖精に意識を一時的に失う毒の花の香りがかされた場所・・・博士が来た時までは、パン屋であった家だった。しかし今はチヨコの言う通り、くもの巣が張っていそうな古い空家となっていた。博士が訪れた時から、まだ40分ほどしかたっていないのに、何故こうも違うのか、この時博士がまだ生きていてコペたちに教えたのならこのあとに起きる出来事を予測し行動できたかもしれない・・・コペたちがこの家にかけられた魔法にすぐ気づいたのなら、家に入る前に防御魔法などかける事ができただろう。

空家に最初に足を踏み入れたのは、ミーだった。その後にチエドが続き、そして最後にコペが家の中へ入った。中は外よりも暗くほとんど何も見えない状態だったため、何回もミーはつまずきそうになった。しかし、電気など空家にあるはずもなかったので、暗い中なるべく早く計画をたてようと決めた。チヨコはいち早く小さな部屋を見つけた。その部屋は他の部屋より比較的綺麗だったため、す

ぐに

「この部屋なら外からの明かりがちょっとぼれてくるし、いいんじゃない？」と一番近くにいたコペに教えた。コペはうなずくと自分の一歩後ろに着いているチエドを確認した。そして一番その部屋から離れたところにいるミーを気遣い

「チヨコ、すまんがミーをここまで誘導してきておくれ。わしとチエドは先に部屋に入っている。」と言いチエドと共に部屋に入ろうとしたが、チエドが

「僕はちよつとあそこの本棚みて来る。」といい終わらない内に、すでに部屋の隅にある木材で造られている本段へとケーキと共に رفتってしまった。コペは

「まったくしょうがないのう。」と笑いをもらし一人で部屋へと入った。チヨコはコペに言われた通り、暗いので歩くのが遅くなってしまうているミーのもとへ行きミーを誘導していた。先に部屋に入ったコペは部屋の異様に気づいた。チヨコは気が付かなかったが、コペはこの部屋が他の部屋よりも綺麗なのが妙に気になった。しかし目を走らせても誰もいる気配がなかったので、気のせいだろうと思いを直した。その時ミーがチヨコの誘導のもと部屋に入ってきた。

部屋に少し光がもれていたおかげで、ミーはコペの姿を確認できた。コペもミーを見る事が出来た。その頃まだチエドは本を手に取り読もうとしていたが、暗かったため諦め部屋へ持っていこうと思いついた。そしてチエドが部屋に入った時、コペが

「チエド！」と叫んだ。チエドは意味がわからず

「何？どうかした？」と答えようとした時、背中に激痛がはしった。そしてミーの悲鳴がチエドの耳に届く頃には、チエドは膝を床につきくずれ倒れた。ケーキは倒れていくチエドをただ呆然と見ていた。しかし、コペに

「ケーキ！早くこつちへ来んか！」と叫ばれたため、急いでコペの後ろにいるチヨコとパフェのもとへ駆け寄った。そしてコペはすぐにチエドの元へ駆け寄ろうとしているミーを止めた。ミーはコペの

腕を振り払おうともがいたが、コペは決して放さなかった。そして暴れるミーに

「チエドがなぜ倒れたか、考える。チエドの後ろにいる男が見えんか！」と怒声を飛ばした。ミーはビクツと体を震わせコペに言われた通り目をこらした。しかし暗く広がる闇のみしか確認する事は出来なかった。そのためミーは

「何も見えない！チエドのもとに行かせてよ！」とコペにミーは初めて本気ではむかった。コペはように

「おろか者！」とミーに言うとなチエドの後ろに向かい

「そろそろ姿をはつきりと見せたらどうだ？」と轟く声を響かせた。ミーは混乱していたがコペの話し掛けた方向を再び目をこらしみつけた。すると、部屋が外と同じぐらいの明るさに突如変わりミーは、はつきりとチエドの後ろにたたずむ赤いマントの男を今度は確認する事が出来た。コペは軽蔑えをこめた笑みを浮かべると

「君がドリスという魔法使いかね？チエドに何をした？！」と顔までもマントで隠す男に尋ねた。すると、その男は

「そんなに怒らないで下さい。チエドは無事ですすよ。ちょっと血は流れていますけれどね。このナイフ少し刺しましたから。それと、私はドリスではありません。今はね。」と気味の悪い笑みを浮かべ、小型のナイフをちらつかせながら答えた。ミーはチエドが無事だと知り安心した。なので、黙ったままコペとその男の会話を聞く事にした。

「今はとはどういう事じゃ？」コペは男に油断を与えず厳しい表情で尋ねた。

「そうですね、ドリスについてヒントを差し上げましょう。コペさん、ドリスはあなたと昔会っているんですよ？あなたがまだ長ではない時に。わからないようですね。覚えていませんか？確か20年前・・・学校で禁断魔法を使った犯人をあなたが探しに来た時ですよ。結局犯人を捕まえられなかったようですがね。まあ、捕まえられなかった事はしょうがないでしょう。ドリスはまだ8歳だったの

ですから。それに1番魔力が弱いとされているクラスでしたしね。」
と言った。誰も何も答えなかったので、その男は話を続けた。

「僕の事は覚えているでしょう？何回か会った事ありますし。おや？ミー、僕が誰だかわからないのかい？シヨツクだなあ。君とチエドは僕のお気に入りなんだよ」コペはミーを見た。ミーは顔から血の気がひいたような顔色をしていた。そして

「サン先生？」とだけやつと出たような小さい声で呟いた。その男は「やつとわかってくれたね。」と言って顔を覆っているマントをとった。コペは目を丸くして驚いた。サンはにっこり笑いと

「コペさんにもわかってもらえて光栄だなあ。」と平然とした表情で言った。

第28話

コペは

「サン君・・・君が何故ここにいるんだ?!それにドリスとわしが昔会ったことがあるとはどういうじゃ?!」「サンはわざとらしく、驚いたように

「まだわからないとは。使者たちから情報をもらわなかったのですか?ドリスは赤いマントの男だと。」「とあざ笑うかのような声色でコペに言った。さすがに、コペとミーは理解することができた。ミーは怒りのこめた声で

「サン先生がドリスなのね。」「と言った。

「そうさ。でも今はサンだ。チエドを刺したのはドリスだから僕を恨まないでくれよ。」「とミーに笑いかけながら答えた。ミーは学校でいつも優しく笑いかけてくれるサンを思い出した。コペはミーに向けていったサンの言葉を聞きやっとな得した。

「そうか、君は二重人格なんじゃな。それならサンである君と話している意味がない。ドリスと話したい。」「

「おや?いいのかい?さつき言っただろう。ドリスは僕のように優しくないよ。」「

「君で話を通じるのなら、君のままでもいいがの。」「

「ははは、十分さ。ミーおいで。」「とサンは突然ミーを呼んだ。ミーはどういうつもりなのかわからず迷っている。

「何もしないさ。僕はサンだ。チエドが心配じゃないのかい?僕がチエドを君のもとへ運んであげてもいいんだけど、コペさん怒っているようだからね。」「と肩をすくめ言った。サンとミーたちの間にはそんなに距離がない。あっても3mだろう。コペは

「ミーじゃなくてもいいだろう。」「と言いコペがチエドのもとへ行くこうとしたが、

「それはだめですよ。何されるかわからないんでね。」「と言った。

コペは苦く思いながらもミーに

「気をつけるのじゃよ。チエドを何とかしてこちらへ戻してくれ。そうしないと何もできん。」と声をかけミーに行くように促した。

ミーは小さくうなずくとサンの元へしっかりとした足取りで進んだ。サンはミーが自分のもとへ来ると

「チエドは今気を失っているが見たところ、傷はそんなに深くないようだ。」と言った。ミーはサンの言葉の意図が理解できなかった。しかし、そんな事を気にしている暇がなかったため、ミーはすぐにチエドのもとへ駆け寄った。そして、そっとチエドの頭を自分の膝に乗せ、少しチエドの体を傾かせ背中中の傷を診た。チエドは背中を刺されていたが、サンの言った通り傷は浅く気を失っている直接の理由は傷ではないようだった。

「ナイフに何の毒をぬつたの？」ミーは今にもサンに飛び掛っていきそうな勢いで聞いた。サンはニヤツと不気味に笑うと

「やはり、君は優秀だね。心配しなくても大丈夫さ。百合でこの妖精が作った眠り薬だ。」と言った。紹介されたドリスのパートナーはサンの後ろから姿を現した。ミーはギョツとし、思わずチエドの肩をギュツと握った。ミーはこんなに、美しい妖精を見たことがなかったが、それと同時にここまで冷たくまがましいオーラを放つ妖精に会ったこともなかった。その妖精はミーをじつと見ると

「サンには敵わないけれど、結構強いようね。」と不敵な笑みと共に言った。ミーは答えることができなかった。すると、妖精は

「ねえ、あなたの妖精誰？」と聞いた。ミーは、コペと共にいるチヨコの方を向いた。チヨコは

「僕だよ。」と挑むように答えた。サンのパートナーの妖精は何か言おうとしたが、サンに

「黙れ。」と言われたので、言うのをやめ、静かにサンの隣でチヨコを睨みつけていた。サンは、横目で自分のパートナーを睨みつけると、ミーに

「さあ、チエド君を連れて早くコペさんのもとに戻ったらどうだ？」

と言った。ミーは、言われた通りにするのはしゃくだったが、急いでチエドの腕を自分の肩に回し引きずりつつチエドの元へ戻った。

コペはミーが自分のそばまで来ると、ミーを手伝いチエドの片腕に手を回し部屋の1番奥へチエドを連れて行き壁に寄りかかるようにし座らせた。そして、サンに向き直ると、

「サン君、君のパートナーがわしの博士を殺したようじゃな。じゃが、君のパートナーは虚ろ魔法の妖精じゃろう。どうやってわしのパートナーを殺した？」と聞いた。サンは自分の妖精に教えてやれ、というように目配せをすると、妖精は

「私はあなたの言うとおり虚ろ魔法の妖精よ。でも趣味ぐらい持つてるわ。今から見せてあげる。」と言いサンに、

「いい？」と聞いた。サンがうなずくと、

「カスミソウ頂戴。」と小さな手をサンに差し出した。サンは自分のマントから白い小さな花が咲き乱れる美しいカスミソウを1輪出し虚ろ魔法の妖精に渡した。そして、花を受け取った妖精はにっこり笑い花にキスをし、予言を始めた。コペたちは妖精が何をしているのかわからず、じっと黙って妖精の行動を見ていた。すると、白い美しかったカスミソウは、黒い小さな花をつけたものへと変わった。その結果に満足した虚ろ魔法の妖精は、花を前に突き出し

「私は花を使つて予言が出来るのよ。黒くかわったからあなた達は死ぬ。という事になるわ。つまり私たちの勝利を示すのよ。そして黒く変わった花には、死の蜜、毒が出来るの。あなたのパートナー、望遠魔法の妖精も私はチューリップで予言した。そしたら死を示したのよ。その毒を飲ましたってわけ。」と笑いながら話した。コペは怒りに手を震わした。そして、一言

「それはどのぐらい苦しみむ？」と聞いた。虚ろ魔法の妖精は正直に教えた。

「想像できる苦しみじゃないわね。考えないほうがいいわよ。でも、あなたの妖精、変な言い方だけれど、死ぬっていうのに幸せそうだったのよ。」コペは、この時初めて涙を流した。博士が苦しみを味

わい死んでいったこと、しかし幸せを感じていてくれたという事に泣いた。涙は博士の死を現実のものだと受け止めたので流れた。ミ
ーはそんなコペを見て、私は、もう博士の死を現実として受け止めていたから、涙を流して悲しんだんだ。でもコペは受け止められなかったから、涙が出なかつたんだわ。と思った。

第29話

その時サンが

「そんな死んだ者のことを悲しんでも仕方ないだろうに。そんなに悲しいのなら、あなたも死ねばいいだろう。」と言った。コペはサンを哀れだと思った。だから何も答えなかった。そんな思いを感じたのかサンは言葉を続けた。

「さあ、もう本題に入ろう。君たちは僕をどうする気でここに来たんだい？」とイラつかせた様子をみせ尋ねた。その問いにはミーが答えた。

「サン先生の計画を止めにきたのよ。」サンはその言葉に興味をもつたらしく、片眉をあげ

「計画？どういう計画だというのだ？」と尋ねた。ミーは強い口調で「昔と同じ事を繰り返し返そうとしているんですよ？闇の現を使って世界を征服させようと・・・。」といった。サンはその話が本当に面白かったらしく、腹をかかえ笑った。

「あはは、面白い。しかし残念だ。ミー、君とは君が入学した時からの知り合いなのになあ。僕がそんな事に執着しておると思ってるのかい？」

「だって、じゃあ何のために地球に来たの?! 何で聖なる木殺したのよ? 聖なる木から闇の現奪ったあとわざわざ殺したのは、聖なる木が自分の計画には邪魔になるかもしれないって思ったから殺したんですよ?」

「聖なる木が僕の邪魔になる? やつには、そんな力などない。」と不快感をあらわにし答えた。

「やつの事を聞かなかったのかい? 聖なる木は、魔力を持った人間がいなければ何の力も持たない雑魚だ。聞いただろう? 使者から。聖なる木が魔力を持った人間の記憶と魔力の一部を喰うと。」ミーとコペはお互い顔を見合わせた。そしてコペは

「わしらが聞いたのは記憶を食べるという事だけじゃ。」と疑うように言った。サンは一瞬疑念するような顔をしたが、ふっと笑いをもらすと、

「という事は使者は聖なる木の本質を知らないという事か。記憶だけではない。魔力も喰う。だから力をつけた。」と言った。ミーとコペはサンが嘘をついているように思えなかった。しかし、使者が聖なる木を造ったというのに、裏を知らないという事も考えられなかった。コペは

「使者が聖なる木の事について知らない事があるとは考えられん。」
と言いサンの言葉を待った。サンはおおげさのため息をつくくと、

「これだから、頭のかたいじいさんは困る。聖なる木にだって物事を考える頭がある。使者に知られないよう魔力を喰い自分の力とするぐらい簡単なものだ。知られたら自分の計画の支障になるからな」とミーをにらみながら言った。ミーは、サンの目の冷たさに鳥肌がたつたが、なんとか平静を装い
「どういう事？」とだけ聞いた。

「ミー、世界を征服するとか何とかっていう計画は僕の計画じゃない。聖なる木の計画だ。聖なる木は今まで喰った魔力で自分を人間に変え世界を征服しようとしていた。自分の中にある闇の現の力をも利用しようとしてな。そして、あと少しで、自分を人間に変えることができる程の魔力が手に入ろうとしていた。僕は太陽に触れ妖精の領域に・・・」ミーがサンの話を途中でさえぎり

「太陽に触ったってどういう事？太陽って熱いんじゃないの？」と聞いた。サンは

「そんなことも知らないのかい？ソロンの太陽の話は授業で習っただろう？たしか僕教えたと思うけど。ソロンの太陽は物体を持たず空気の集合体だ。空気、中でも二酸化炭素が主だが、赤くなる性質がある。と教えただろう？そして、ここからは、僕が歴史家の妖精から聞いて知った事だけれど、太陽は妖精の領域からもみることが出来る。そのため妖精の領域に行こうとするなら太陽に触れさ

えすれば、中を通り来る事ができる、とね。まあ、本当に触れたわけではない。心の目で触れたといった方が正しい。わかったかい？」と嫌味をまじらせ話した。そして

「とりあえずあと1回でも話をさえぎるような事したら、コペさんの質問に答えることは2度とないぞ。」と警告しまた話を続けた。

「その歴史家が言った事を実現するには時間がかかった。太陽を一面に見ることが出来る場所などそうないからね。それにある程度強くならなくては、妖精の領域に行く事ができて、計画を成功させる確率が低かったので今まで待った。そして、初めて妖精の領域に行った時聖なる木は、僕を殺そうとしたのさ。もちろん、そんな事はさせなかった。逆に僕のいう事を聞くようにした。歴史家から話を聞いた時と同じ方法でな。聖なる木は何でも話した。記憶と魔力を食べているというのも、やつから直接聞いた事だ。全てを知った僕は闇の現を奪った。すると、どうだろう、やつはたわいもない。気が狂った。闇の現に魅了されすぎた。だからその時はわざわざ手をくたすまでもないと思った。しかしやつは、俺がソロンに帰ったあと、俺を操りカールに闇の現を渡すように仕向けた。俺は、カールに自分の名前をドリスと名乗り、これは、地球から持ってきた闇の現だ。とわざわざ説明をしてから意識が戻った。すぐカールから取り戻そうとしたが遅かった。カールはすでに、変な男に見せていたのさ。それをミー、お前が聞いていた。闇の現を取り戻すチャンスだと俺はすぐ考えた。お前はカールの浅はかな罠に引っかかった。俺としては馬鹿な生徒を持って嬉しかったよ。サンとしては、残念だったかもしれないがな。」と不気味な笑い声をあげながら、語った。ミーとコペはサンではなくドリスへと変わったのが分かった。背中に冷や汗がしたたり、喉がつまりそうになった。ドリスは背筋が凍る思いをさせる声でまた語り始めた。

第30話

「ミー、お前はイガに助けてもらった。そしてチエドにも。それからイガはどうなったと思う？お前達はこう考えた。カールが闇の現を使いイガを異空間に閉じ込めたとな。しかし真実はどうだろう？真実はこうだ。カールはイガを閉じ込めようとしたが、イガは危険を察知し、カールから闇の現を奪い、逆にカールに闇の現を向けた。そして、カールが異空間へ閉じ込められたのさ。イガは闇の現を護衛魔法使いのもとへ届けようとした。だが、そんな事をされては俺が困る。だからイガを殺したのさ。そして、イガから闇の現を奪った。いや、返してもらったというべきだろうな。つまり、こういう事さ。お前たちが闇の現を俺から取る事ができても、イガは助けられない。ミー、お前は自分を助けてくれたイガが俺に殺される手伝いをしたって事だ。そうだろう？あの時自分だけ逃げずイガの事を考えていたらイガは俺に殺されなかったかもしれないだろ？」ミーが愕然とし何も言わないのを見ると

「さて、違う質問にも答えなくちゃな。聖なる木を殺したのは、俺にめんどろな事をさせたからだ。だから殺した。だが、思わぬ収穫があった。俺はもともと記憶が少し残された人間だったから、地球の事や家族のことは覚えていたが、聖なる木を殺したことによって俺の奪われた記憶だけではなく、ソロンの人間の記憶全てが頭の中に流れてきた。ミー、お前の家族のこともわかる。」と言った。ミーはイガを殺したのは自分だと知り、何も感じる事ができなくなっていた。しかし、家族を知っているという事を聞いた瞬間、自分の手の震えを感じた。ドリスはミーの考えがわかった。

「教えてほしいのだろう？教えても俺にはなんの得もない。しかし、そうだなあ。結果を教えてやろう。お前の家族は生きていない。だが、それは俺の家族もそうだ。ははは、実に、真実とは罪を罰するようになっている……。俺が何年もの月日をかけてやってきたこ

とは全て意味のないものだった……ドリスは最後まで言う事はできなかつた。狂ったように泣き出したのである。ドリスはこのまま死んでしまうのではないか、と思うほど激しく泣いた。その泣き声は、孤独の日々を、全て記憶に残る家族と再び会う事を夢見てすごした、1人の人間の声にはならない思いだった。

真実とは、時に嘘である時がある。しかしこの場合は真実は真実のままだった。使者が決して語ることがなかつた真実……、それは、魔力のある人間をソロンに連れて行くとき、その人間の家族を全て殺す。というものだった……。真実には全て別の真実もついてまわるものだ。

第31話

ミーは自分の家族が殺されていたという現実と、ドリスが泣き崩れているという事が、自分の頭の中を、渦となり駆け巡っていた。魂が抜けたかのように座り込み声のない涙を流しているドリスに声をかける事さえできなかった。コペは自分は家族に会える事はない、とわかっていたが、殺されたという事に頭の芯がしびれていた。その時、ドリスが突如笑い出した。ミーとコペは驚き、あどずさった。「まだ、コペさん。あなたの問いに答えてないことがありますよね。ドリスとあなたは、ドリスが8歳の時に会っているんですよ。学校に禁断魔法をつかった人物をあなたが探しに来た時です。その事件のことは覚えていますか？」とサンに戻ったらしく、穏やかな口調でコペに話し掛けてきた。コペは慎重に言葉を選び

「サン君に戻ったようじゃの。その事は今でも覚えておる。さつき君が言った通り犯人を捕まえることが出来なかったヤマじゃ。」と言った。サンは意を得たというように、笑い

「そうですね。あなたはドリスが禁断魔法をつかった人間だと見抜く事が出来なかった。ミーはイガを殺す手伝いをし、ミーの師であるあなたは、イガを殺した人間、つまりドリスをここまで成長させる原因を作ったのですよ。」と言った。ミーは思わず

「イガを殺したのは、私じゃないわ。それにコペおじいちゃんだつて悪くない！」と叫んだ。サンは馬鹿にしたように笑うと、

「ミー、君は黙ってる。君がなんと言おうとドリスがイガを殺すのを手伝った。そして、ドリスが人を殺すまで生かしておいたのはコペさん、あなただ。もしドリスが初めて禁断魔法を使ったあの時、あなたがドリスを捕まえていたならこんな事にはならなかった。」と震える声で叫んだ。コペは、サンの言葉を自分の過ちとし受け止めた。

「サン君、君の言う通りあの時捕まえられなかった事はわしの力不

足じゃった。だが、イガを殺したのをミーだというのは、サン君自分でも間違いだという事は分かっておるんじゃない？」

「間違い？何故です？ミーがイガを殺したというのはまぎれもない真実ですよ。」

「いや、違う。サン君き……」コペの話途中でさえぎり

「黙れ！！」と怒鳴った。コペは、サンがすでに正気を失いつつある事がわかった。

「そんな話はもういい！！最後にあなた達に真実を教えよう。僕は聖なる木の記憶によっていろいろな事が分かった。ソロンと妖精の領域のつながりは、聖なる木が生きている事によって太陽は空気の集合体を造るということも。しかし、聖なる木は僕が殺した。つまり、今太陽はソロンを照らしていないという事さ。そして、もう一つ。ソロンは太陽が、空気を食べない限り、魔法が効きつぱなしになるという事も。わかるか？今ソロンは、魔法が乱れ暴走しているという事さ。僕とこうやって話している今もソロンは破滅の道をたどっている！さあ、どうするんだい？僕は君たちをただでは帰さない。」ミーとコペは、またしても新しい真実をしり、頭がついていなくなっていた。今日だけです。多くの事が起こりすぎた。博士の死、イガとカールの事、聖なる木の醜さ、使者の語らなかつた真実、家族の死、全てを受け止めサンと向き合う事、そして自分と向き合う事などできなかつた。少なくとも今はできない。いや、できるはずがなかつた。今の現状を把握しているだけでも、まだだつたかもしれない。そして、サンは

「おい。あれを出せ。」と自分の妖精に命令をくだし、妖精はサンに言われた通り、自分の後ろの壁の中から、何か茶色いずた袋を取り出した。そしてそれを、サンに手渡した。サンは、中身を確認すると、

「取れ。」とミーとコペに袋を投げつけた。袋はコペが受け取った。中には鞘に収まったままの、曲線を描いた形の小刀が入っていた。コペが小刀を取り出し、鞘を取るり眺めた。緩やかな曲線が特徴の

そのナイフは、少し齒がかけている所があるが、精巧なつくりのとても良い物だとコペは思ったのだった。ミーは

「ナイフ？ 剣？ 剣にしてはちよつと小さいかしら？」と特に誰かに尋ねたというわけでもなく、一人事を呟いた。サンはもう涙を流していないかった。

「おい！ 早く構えろ！」サン、いやドリスは叫んだ。またドリスに変わってしまった。コペは、サンからドリスへと人格が交代した事に気づいた。ドリスとなったサンは、もう涙を流していないかった。

「ねえ、何をさせる気なの？ 構えろつて……。まさかこの剣で戦えつて事？ あなたと？」とミーはドリスに冗談でしょ？ と思いがながら聞いた。ドリスはにやつと

「その通り。さあ、じいさん。構えろよ。ソロンに戻って破壊を止めなければ、俺を殺せ。そして闇の現をもってソロンに戻れ。」と言った。ミーはコペを見た。コペは小刀を手でsつかりと握り締めてはいたが、構えてはいなかった。しかし、何かを決意したように、「ミー、いいか。ソロンを救え。」と、ミーに微笑みながら囁くと小刀を構えドリスのもとへ駆け出した。ミーには何が起こつて、自分の耳に悲鳴が聞えるのか分からなかった。自分の目に入ってくる光景がどうしてこうなつてしまったのか、理解できなかった。自分の後ろで妖精たちが、

「ミー！！！！」と叫ぶまで。ミーはずつと妖精の事を忘れていた。話している最中、妖精たちが何も口をださず黙っていたため、コペ以外に今自分の名前を呼ぶ声が聞えた事に驚いたのだ。そして、妖精たちのおかげで意識がはっきりしたミーは、コペが駆け出したあと何が起こつたのかを思い出した。

コペはドリスのもとへ声をあげながら、向かっていき自分の手に硬く握りしめた、小刀の切っ先をドリスの心臓に突き刺そうとした。しかし、その途中何も持つていないかに思えたドリスが自分のマントから、チェドを刺したナイフを取り出し、一直線に向かつてくるコペの膝めがけ投げたのだ。そして、そのナイフは膝ではなく、さ

らに悪い事にチエドのわき腹へ鈍い音を立て突き刺さった。その凄まじい痛み悲鳴をあげ、コペは床に突っ伏す形で倒れた。するとドリスはコペの体を蹴り上げ、悲鳴をあげるコペを尻目にわき腹に刺さった自分のナイフをさらに深く突き刺した。そして、コペが最後の悲鳴をあげると、ドリスは、ナイフを抜き取り、ミーへと向けたのだ。ここでミーは妖精たちのおかげで、あと一步のところまでナイフが自分の心臓をえぐるのを間逃れる事ができた。ドリスは、ミーをしとめられなかった事、そしてコペを殺した事に何も感じていない、というように

「じいさんは死んだ。何でお前は泣いていない？」と平然とした表情で尋ねてきた。ミーは、悲しみよりもドリスに対する憎しみで心はあふれていた。

「コペおじいちゃんが言ったのよ。泣くのは後でもできるってね。あんたを殺す機会はこれを逃したらめぐってこないかもしれない。だから私はあんたを殺してソロンを救うわ。」と、自分のやるべき事を見据えた瞳を、恐れる事なくドリスへ向けた。その時

「ミー、君がやる事ないよ。僕がやる。」と後ろから、チエドの声が聞えてきた。ミーは、後ろを振り向きチエドが、立っているのを確認すると、泣く暇なんてないのに、と思いつつも安堵感が胸に一気に押し寄せ、泣きじゃくるように、チエドのもとへ走り抱きついた。

「な．．．んで、だってチエドずっと意識ないから．．．心臓動いているけれど、本当にまた．．．。」と、ミーは泣きじゃくり喉をひきつかせながら、言った。チエドはポンポンとミーの背中を軽く叩くと、

「ごめん。刺されてから数分は本当に意識なかったんだけど、妖精が花の話をしている頃にはもう意識はもどっていたんだ。でも、動けないし声を出す事もできなかったから、コペさんが刺された時も何もできなくてごめん。」と、言った。ミーは何も言わず、首を横に振った。すると、ドリスの笑い声が聞こえ、ミーはビクツと体

を震わせると、チエドから離れまたドリスの方を向いた。チエドは「今はドリスなんですか?」と、見下したように笑みを浮かべ話しかけた。ドリスは

「生意気な態度は取らないほうが身のためだぞ。」と、目に怒りを浮かべながら、チエドに言った。チエドは、おおげさにため息をつくと、

「どうでもいいよ。」というのと、コペのもとへ向かい、顔を覗きこむと、

「ケーキ。」と自分のパートナーを呼び何か命令をすると、コペの手元にある小刀を手に取り、ドリスと向き合った。ドリスは意地の悪い笑みを浮かべると、ナイフを構えた。チエドも構え

「先生からかかってきて良いよ。」と言った。ドリスは

「俺はサンじゃない。ドリスだ。」というのと、チエドを切りつけようと、ナイフを振り回した。チエドは寸前で切っ先をよけ、逆にドリスを小刀で浅く切りつけた。ドリスは低い声でうなると、自分が最初につけたチエドの背中への傷に蹴りを入れた。チエドは一旦止まった血が再び自分のマントを染めるのが分かった。しかし痛みに気をとられずに、冷静にドリスの足を掴み取った。そして、間をあける事なく、態勢を崩したドリスを床に抑えつけ首をしめた。

第32話

「ドリス、僕はお前のように人殺しはしない。だから、僕が手を放したら大人しく僕たちと一緒にソロンに戻るんだ。そしてイガ先生を殺した事や、コペさんを刺した事を償うために、罰を受ける。」と言った。ドリスは苦しそうに顔を歪めると自分の首を掴み軽く絞めているチエドの手を掴み

「はっ。罪を償えだど!? 何も罪など犯してはいないだろう。」とせせら笑った。チエドは

「イガを殺した事はどうでもいいなか。」と言った。ドリスは

「俺の目的のためには仕方のないことだった。」と答えた。

「例え家族に会うためでも、人を殺しても良いっていう事にはならない。」

「黙れ! 俺の生きる目的は、それしかなかったんだ。」チエドは、その言葉を聞きドリスの首を締め付けている力を緩めた。その隙をすかさず生かしドリスはチエドを自分の上から取り払った。そして、咳き込むと、床に落ちていいる自分のナイフを掴んだ。チエドは慌てて自分の小刀を手に持ち構えた・・・が、そんな必要などなかった。ドリスは、まっすぐ自分の胸にナイフを突き刺した。ミィは愕然とし、座り込んでしまった。チヨコとパフエは体をよせあい、がたがたと震えていた。ケーキはコペにつき、チエドに言われた事を黙々とこなしていた。ドリスのパートナーである虚ろ魔法の妖精は、涙を流し泣き叫んでいた。チエドはドリスに駆け寄り、崩れ倒れそうになっているドリスを支えた。胸にナイフを刺したままのドリスは自分の胸に滴る血を手で触れ、自分の血を見つめ、もうすぐ死に行く命のなか、

「本当は聖なる木から闇の現を奪った時点で分かっていたんだ。闇の現はただ持っているだけでも自分の1番心の奥にある思いをあげき出そうとする。俺の思いは家族だった。ソロンに連れてこられた

時から……。闇の現は、俺に真実を教えた。使者はお前を連れ出したあと、お前の家族を殺した。そして、地球に存在しない者たちとした。お前に関わる記憶とお前の家族に関わる記憶を、地球の人間の記憶から抹消した。とな。だが、俺はどうしても、最後に地球を見たかった。そして、地球で死にたかった。」と、血の涙とともに、最後の笑みを浮かべ、自分の望み通り地球で死を迎えたのだ。チエドは、ドリスの体をゆっくりと、床に寝させ、胸からナイフを抜き取った。そして、黙ったままコペのもとへ行く。「ケーキ、血とまった？」と聞いた。ケーキは笑顔でチエドの方を向き

「ええ。もうすぐ意識は戻ると思うわ。でも当分動くのは無理ね。絶対安静ってところかしら。」と答えた。ミーは、ゆっくりと立ち上がる。チヨコとパフェと共に、コペのもとへ行き

「コペおじいちゃん生きてるの？あんなに刺されたのに？」と無表情のままチエドに尋ねた。チエドは優しく笑うと

「うん。大丈夫。傷は深いけれど、急所は外れてるから。」と答えた。ミーはコペの手をしっかりと握ると、

「温かい。」とまだ実感が湧かないかのように、一言だけ呟いた。ミーのパートナーのチヨコは、コペの頬に自分の小さな手をあてミーンに笑いかけながら

「本当だ。死んでないよ。」とはしゃいだように言った。ミーは、涙ぐみながら

「うん。そうね。コペおじいちゃん生きてるね。」と、笑い答えた。チエドは、

「サン先生は、本当に死んでるよ。このまま地球で寝かせてあげた方がいいと思う？」と聞いた。ミーは、コペの手をゆっくりと放すと、立ち上がりサンの体が、横たわっている場所へ行った。そして、サンの顔に自分の小さな体を寄せ、ガタガタ震えながらドリスを見つめている。サンのパートナーであった虚ろ魔法の妖精に

「何で私たちがここにいてわかったの？」と、いきなり尋ねた。

妖精は、ドリスを見つめたまま

「もともと私たちの方が先にここに居たのよ。この家に魔法かけてあるの全然気づかないであなた達は入って来たのよ。今はもう劣化魔法の香りは残っていないけれどね。」と答えた。

「劣化魔法？この家にかけたの？何のために？」とパフェがいきなり言葉を発した。虚ろ魔法の妖精は、今の声は誰？というように、ドリスの亡き骸から視線をはずし、声のした方を見た。パフェは、「私、透明魔法の妖精よ。」と、虚ろ魔法の妖精に気づいてもらえよう、手をふり挨拶をした。虚ろ魔法の妖精は、パフェを一瞬自分の瞳に写し存在を認めしたが、すぐに視線をドリスへと戻した。そして、

「自分より、レベルの下のあなたに同等のように声をかけられたくないわ。」と言った。パフェは傷ついたように、チヨコの後ろに隠れた。チヨコは、虚ろ魔法の妖精をにらみ

「性格直した方がいいんじゃない？」と、軽蔑したように、言った。虚ろ魔法の妖精は、ため息をつくくと、

「うるさいわね。そんなに聞きたいのなら教えてあげるわ。この家はサンが劣化魔法をかけるまではパン屋だった。そしてパン屋の前は普通の5人家族が住む家・・・サンの家だったのよ。サンは家族が殺されていなくても、せめて家だけは残っているだろう。って思っていたの。だから、パン屋になっていて、しかも他の人間がいるのを、見てとてもショックを受けた。それで、この家に住んでいた人間を違う土地に送ってこの家には、これから先誰も住めないように、劣化魔法をかけたのよ。サンが自分で死んだのには、地球で死にたかったという思いの他に、自分の本当の家で死にたいという思いもあったと思う・・・。」と、サンの胸の傷に、涙を落としながら、語った。ミーは、何かを決したように、チエドの顔を見据え、「サン先生は、ソロンに連れて行かない。」と言った。チヨコたち妖精は、賛成の意を示すように、うなずきチエドは

「その方が良さそうだね。」と言い、サンのマントの奥から、闇の

現を取り出した。そして、虚ろ魔法の妖精に、

「この闇の現は、ソロンに持っていくから。」と言い、自分の手に強く握った。その時、ケーキの献身な介護の甲斐があり、コペの意識が戻った。しかし、体を起こす事はやはり出来ないらしい。ミーはコペの顔を覗きこみながら、

「コペおじいちゃん、私のことわかる？」と心配そうに聞いた。コペは痛みがあるにも関わらず、優しく笑うと、

「心配かけて悪かったの、ミー。」と言った。チエドは、ケーキに「ありがとう。」と感謝の気持ちを述べたあと、コペを気遣いながら、

「コペさん、大丈夫？サンは自分で死を選びました。ここはサンの家だったらいいです。」と教えた。コペは

「そうか。チエド・・・すまんが、虚ろ魔法の妖精を呼んでくれんかの？」と言い、痛みが走ったのか、顔を痛みでゆがませた。チエドは、コペに言われた通り、虚ろ魔法の妖精を呼ぼうとしたが、すでに、ドリスのもとを離れコペの顔の上に浮かんでいた。コペは苦しそうに呼吸をすると、しっかりと虚ろ魔法の妖精を、見つめ

「博士はどこにいるんじゃない？」と尋ねた。虚ろ魔法の妖精はただ一言「妖精は、死ぬと粒子になるのよ。」とだけ答えた。コペは、微笑かに微笑むと

「じゃあ、もう博士の亡き骸と会う事もできんのじゃな。」と、自分で言の葉をかみしめるように呟いた。そして、チエドに

「チエド、悪いんじゃないがわりに、浮遊魔法をかけておくれ。」と頼んだ。チエドは、すぐにケーキに命令しコペの体は宙にゆっくりと浮いた。そして、

「虚ろ魔法の妖精や。お前さんも一緒にソロンに戻るんじゃない。サン君はミーに頼み体が腐らんよう、凍らしてもらってから安心せえ。」と虚ろ魔法の妖精に言った。虚ろ魔法の妖精は、涙で顔を覆いながら、

「ごめんなさい・・・。」と言った。その言葉には、ありがとう、

という言葉も含まれていただろう。虚ろ魔法の妖精は心からサンを愛していたのだ。サンの孤独を自分が助けると、自分に誓いサンに尽くしていた。そんな彼女はサンの死を、サンはこれで幸せになった……。と受け止めていた。そして、私は妖精の領域に自分の居場所を見つけるわ。とサンに最後の言葉を残し、コペやミー、そしてチエドと妖精たちと共にソロンに戻ることを決めたのであった。

チエドは、闇の現を虚ろ魔法に見せ
「空間を裂くにはどうやってやればいいんだい？」と尋ねた。虚ろ魔法の妖精は

「ただ、行きたい場所を闇の現に言えばいいの。あんまり長く見つめてみると、サンのように、自分の恐れている事をあばかれるわよ」と質門に答えると共に忠告をした。チエドはうなずくと闇の現に「ソロン」と言葉を放った。すると、まがまがしい紫の光が空間を裂きソロンへと導いた。あまりにも一瞬のことだったが、ミーたちは何が起こったのか理解する事ができた。地球からつながった空間の先は、ソロンの王の宮殿であった。ミーは最後にチヨコに頼み、サンを体の芯から凍らせ、たとえこの家が崩れ原型を留めなくなるうとも、融ける事のない氷の亡き骸……。サンの墓を作った。サンの傷ついた胸の上には、純白のチューリップが1輪置かれていた。それは虚ろ魔法の妖精が最後に贈った、サンへの思いだった。そして、ミーたちは、サンに別れをづけ、闇の現が導いた王の宮殿へと足を向けたのだった。

そこは宮殿の庭園だった。今の時刻が夕方という事もあるが、暗かった。そして魔法の香りが異常なほど強く立ち込めている。サンの言っていた通り、太陽が力を失っているのだ。

第33話

しかし、まだ最悪な状態には陥っていないようせいがある。まだ太陽の姿を微かに確認することが出来た。コペは浮遊魔法で浮いたままであつたが、宮殿の兵士が3人近付いてくるのがわかり、

「わしをこのまま救護室へ連れて行ってくれ。」と兵士の1人に言った。兵士はすぐに返事を返すと、チエドのパートナーを伴いコペを浮かしたまま、救護室へと運んだ。コペは、残りの兵士の2人に「この2人を王の間へと連れ言ってくれ。と言いわたした。2人の兵士は

「私どもに着いてきてください。」とミーとチエドにいい王の間へと案内した。2人は王様に会うのは護衛魔法使いとなりマントを受け取った時以来だつた。ソロンの王ザガートはとても気さくな男で、酒が入るととても豪快な笑い方をする男だが、いつもは、ポーカーフェイスを崩さない立派な王である。そんな王のいる、王の間へと着くと兵士の1人が

「ここでございます。お入りなりコペ様をお待ちください。王はすでにおられます。私どもは中に入ることを許されておりませんのでここで失礼いたします。」と言つた。もう1人の兵士は、

「何か御用時がおありでしたら、遠慮なくお呼びください。」といひ、敬礼すると兵士たちは去つて行つた。ミーとチエドは立派な扉の前で、多少気後れをしたが、チエドは鷹の姿が彫つてある、取っ手を持ち扉をノックすると、中から立派な格好をした年配の男が扉をあけ、ミーとチエドに軽く会釈すると、中に入るよう手を差し出した。ミーとチエドはゆつくりと王の間へと足を踏み入れ、中央にある立派な机の向かい側に腰掛けているザガートを見た。2人が頭を下げ王に挨拶をすると、ザガートは立ち上がり、ミーとチエドに「遠慮はいらん。疲れておるのだろ。早く腰掛けなさい。」と言ひ、自分の向かい側にある長イスに座るよう合図した。ミーとチエ

ドは言われた通りイスに座ると、妖精たちはミーとチエドの間に座った。王はミーたちを招きいれた人物に

「コペの様子はどうか？」と尋ねた。その人物は

「血は止まっていますし、1週間ほど安静にしていただければ大丈夫だという事です。」と答えた。王は嬉しそうに微笑むと、ミーたちの方を向き

「コペのことは心配いらん。もともとあいつは丈夫だからな。」といい、ザガートらしい笑い方をした。ミーとチエドは安心して王に笑いかけ、お礼を言った。そして王の隣にたつ、白髪の人物にも頭をさげ感謝の気持ちを表した。その人物はにつこりと笑うと、王に

「私は席をはずしましょうか？」と聞いた。王は

「いやそんな必要はない。」と答えミーとチエドに

「この男は私の付き人だ。そして、コペ同様わたしの、大切な友でもある。」と紹介をした。すると、紹介をされた少し腰の曲がった白髪の人物は自分の身にまとったこげ茶色のマントを整え、

「チャじいと呼んで下され。」とミーたちに言った。それを聞きザガートはいたずらっぽく笑うと

「いつもこのこげ茶のマントを着ているから兵士たちから影ではチャじいと呼ばれておるのだ。」とミーたちに言った。ミーとチエドも、いたずらっぽく微笑み

「はい。チャじいと呼ばせていただきます。」と答えた。すると、そこへミーたち同様護衛魔法使いが

「失礼いたします。ザガート殿下。王への反逆を企てていた男を捕まえました。」といい、1人の男を前に突き出し部屋に入ってきた。その護衛魔法使いは、ミーとチエドを見ると、

「ずいぶん若い護衛魔法使いだな。」と言った。ミーは、

「こんにちは。」とだけ答え、その護衛魔法使いが連れてきた男へと視線を移した。王は

「この2人は、コペの部隊に所属している。若いが腕は確かだ。」とミーたちの事をその護衛魔法使いに紹介した。すると、コペとい

う名前を出した瞬間、態度が急に変わりうつて変わってミーとチエドを尊敬の眼差しで見つめ

「それは、すばらしい。これが噂の・・・長、本人が直接指名をしたという、少年たちですか。」と言った。チエドは、そんなに自分たちのことが噂になってるのか。と初めて知り多少気恥ずかしくなった。ミーは、その護衛魔法使いの言葉など聞いてなどおらず、じつと反逆者の男を見ていた。王はそんなミーに気づくと

「それで、その男はどういったことをしでかそうとしていたのだ？」と護衛魔法使いに尋ねた。はつとして、護衛魔法使いは王に視線を戻すと、その男をちゃんと立たせ

「殿下の方をちゃんと見る。」と怒鳴りその男が、言われた通りまっすぐ前を向いたのを確認すると、

「この男は、我々護衛魔法使いが長年追ってきた者です。この男は、王の座を狙うために、何度も禁断魔法や闇の者たちとよからぬ計画をたてていました。そして、今日ついに捕まえることができたというわけです。この男のパートナーはレベル1の透明魔法の妖精です。」と王に説明をした。その男は、王から視線をそらしミーを見た。

数秒男と目が合いミーは、校長室での記憶がよみがえり、まるでパズルの最後のピースが自分の頭の中で、パチツとはまったような感覚がした。ミーはゆっくりと口をあけると、

「黄土色のマントの男・・・カールから闇の現を紹介されていたやつ。」と叫んだ。チヨコは驚き

「えっ!? マント黄土色じゃないよ? チャジいみたいなきげ茶だよ?」と言った。ミーは

「そうね。でもそれは汚れているだけよ。その証拠に所々、黄土色が見えてるわ。でも、こんなに汚れているなんて、色を変えるためにわざとやったとも考えられそうだけれど?」と挑むようにその男を見た。その男は神経質に笑うと、

「君はあの時、盗み聞きをしていた子か。あれからカールとは会っていないんだが、君が殺したのか?」とミーに話し掛けた。チエド

は、驚きミーに

「この男が黄土色のマントの男？」と確認した。ミーはただうなずいた。そして、黄土色のマントの男に

「私が殺したんじゃないわ。それにカールは生きているわ。」と答えた。その男はわざとらしく驚いたような表情をすると、

「そうか。それは良かった。まだあの闇の現の説明を受けていないんでね。それに私はどうしても闇の現が欲しいのさ。あの闇の現を使ってこのソロンを私のものにするためにな。」と言った。ミーと、反逆者が知り合いだったという事に、驚いていた護衛魔法使いと、ザガートやチャじいも、その言葉を聞き、はっと我に返ると、王は護衛魔法使いに

「牢屋に入れ判決を待たせろ。」と告げた。護衛魔法使いは、すぐに命令に従い、王の間を後にし、地下にある牢屋へと男を連れて行った。途中その護衛魔法使いは自分も詳しい話しを聞きたいと思っただが王の命令だから仕方がない・・・と悔やみつつも、忠実に仕事をこなし、男を牢屋へと入れた。その頃王の間では、王がミーに詳しいことを聞いているところだった。ミーは、黄土色のマントの事から、今まで地球にいた事など全てのいきさつを語った。王とチャじいは、ため息をつくやら感嘆の声をもらすやらミーの話しに、たびたび反応をしながら、真剣に聞いていた。そして、全てを語り終わった時、王が

「そのサンという者は、本当に家族に会いたいという気持ちだけで、人を殺したのか？」と独り言のように、尋ねた。チエドが答えようとした時、扉がいきなり開き、コペが王の間へ入ってきた。ミーとチエド、そしてザガートやチャじい、みんなが立ち上がり、コペを見た。コペは何食わぬ顔でみんなのもとへと来ると、ミーとチエドを見て

「全て話したのじゃな？」と聞いた。ミーは

「ちゃんと、最初から今までを嘘偽りなく話したわ。」と答えた。

コペは

「そうか。」と言い微笑むと

「ザガート、迷惑をかけたの。」とザガート王に話し掛けた。ザガートは、苦笑いをする、

「もう、年なんだからあんまり無理をするな。」と言った。コペは面白そうに笑うと

「チャジいよりはまだ若いぞ。」と言った。チャジいは

「そんな変わりませぬぞ。」と、言い返した。ミーとチエドは妖精と共に笑いながらその光景を見ていたが、一人虚ろ魔法の妖精だけには、笑みがなかった。コペはそんな妖精の姿に気づくと

「虚ろ魔法の妖精や。お前さんは、もうわしに謝ったじゃろう？そんな暗い顔をしているのは、お前さんらしくない。もっとふてぶてしくしておれ。」と虚ろ魔法の妖精に話し掛けた。虚ろ魔法の妖精は、驚きコペを見ると、あふれ出そうになる涙を必死に我慢し何度も何度もうなずいた。コペは、まぶたを閉じると博士の姿を想像し、博士や。お前さんもわしと同じ思いじゃろ？と心の中で尋ねた。コペの中に残る幸せの片割れである博士は、優しい微笑みを浮かべた。実際には、自分の胸に残る思い出の博士だということは、分かっていたが、コペには十分だった。そして、ゆっくりと目を開けると、ミーに

「それでじゃ・・・王様は全て理解したのかの？」とわざと王様といい、ザガートをからかうように、聞いた。ザガートは、片眉を上げるとコペのジョークに付き合うように、コペをにらみつけた。そんな状況をあまり理解できていなかったミーは正直に

「いえ。今コペおじいちゃんが来たから話を中断したんだけど、王様がサン先生が本当に家族に会いたいだけで人を殺したのか？つて言ったところだったの。」と真面目な顔をして答えた。

第34話

コペは心の中で、ミーは状況判断の能力にかけておるのかの？と思つたが、1回咳払いをすると、

「そうか。それはわしから説明しよう。その間にミー、お前さんとチエドは妖精の領域に行き闇の現をサンの言つた通り聖なる木に還すのじゃ。この部屋はそうでもないが外は魔法の残り香が、ソロンを覆っている。太陽の姿もすっかり見えん。もう太陽が寝ている時間だが、太陽の姿が見えないというのは、やはり聖なる木の死とながつておるのじゃろう。普通なら、いくら夜になろうとも、光を放っていない太陽の姿を見ることができぬのに・・・。兵士たちも何かおかしいという事に気づいておるようじゃ。早く行け。」と言つた。チャジいは、

「闇の現を一目見せてくれませぬか？」といきなり言つた。チエドは目でコペに尋ねコペがうなずいたので、マントから闇の現を取り出し、机の上に置いた。そして、

「さつき話した通りあんまり長い事見てはいけませんよ。」と念をおした。王とチャジいは、うなずくと闇の現を交代に手に取り、チエドの忠告を守りあまり覗き込まないように、気をつけ見ている。そして、気がすんだ2人はチエドにそつと返した。チエドは、慎重に受け取るとコペに

「じゃあ行つてきます。」とだけ言つと、闇の現に

「聖なる木のもとへ」と語りかけた。すると、闇の現はさつきと同じように空間を裂き聖なる木のもとへと導いたのだった。王の間からはいくら覗いても聖なる木の姿を見ることができなかった。そのため、ミーとチエドは覚悟を決めると、チエドから先に空間を通り空間の繋がる場へと消えた。そして、ミーも王の間に残る3人に「さつき私たちが通つた地球への空間はもう閉じてるのかしら？」と聞いた。コペはすぐに

「ここに来る前一応見てみたがまだ閉じては、おらんかったようじや。しかしだいたい穴は小さくなっておる。広げてこなかったからあと少したてば閉じるじゃろ。」と答えた。ミーは、小さくため息をつくと

「闇の現の魔法には太陽が機能していなくても関係ないみたいね。じゃあ、私たちはこの空間が閉じるまでの時間・・・約1時間で戻ってこなくちゃいけない。あっ！コペおじいちゃん。途中で穴を広げたりはしなくていいわ。広げると、私たちが戻ってきてからも、開いている事になっちゃうから。」と言い残しすぐに聖なる木のもとへと消えた。その後をチヨコ、パフエ、ケーキそして虚ろ魔法の妖精がついて行った。最後までその姿を見送ったコペたちは、無事戻ってくる事を願いミーたちが帰ってくるまでの時間を過ごすのだった。

先に着いたチエドは、自分の視界に広がる壮大な空、どこまでも続く真つ青な空、その空をより美しく見せているのが、ソロンでは光を失った太陽だった。そして、太陽の輝きの下で存在を隠すようにはえている葉のない木、その木は奇妙なほどあらゆる枝が折れ曲がっていた。その木のもとへ近付こうとした時後ろで物音がしたので驚き振り返るとミーが立っていた。チエドは安心して笑いをもらすと、「何か話していたの？遅かったね。」と尋ねた。ミーは後から妖精たちが着いてきたのを確認すると、チエドの方を向き

「時間の確認をしていたのよ。私たちはあと1時間で全て済ませソロンに戻らなくちゃだめみたい。」と答えた。チエドは

「大丈夫だ。あそこの木が聖なる木だと思う。葉っぱがないのはサン先生が殺したからだと思う。」と奇妙な枝の木を指差し言った。

ミーは、チエドの指差した先に目を移した。ミーの聖なる木に対する第一印象は最悪のものだった。思わず

「何あの気味の悪い木・・・。聖なるっていうんだから、もっと綺麗な木なんじゃないの？」と口にだし呟いた。チエドは思わず笑うと、

「ああ、でもそれはサン先生が殺したからかもよ？」と言
「とにかく近付いてみようよ。」と付け加え聖なる木のもとへと、
進んだ。ミーもチエドのあとを追い聖なる木へ近付いた。妖精たち
は、その場から凍りついたように動かなかつたが、ミーに
「どうしたの？早く。」と呼ばれたので仕方なく羽を羽ばたかせあ
とを追った。途中ミーはチエドに

「前から疑問だったんだけど、何で聖なる木が枯れた事を殺され
たっていうのかしら？クツキーが聖なる木は生きていうって言うて
いたし、サンも聖なる木は心で会話をすることができると言っ
ていたけれど・・・でも聖なる木は木でしょ？人間や妖精、動物のよ
うに殺されたとかっていうのは、おかしくないかしら？それにサン
はどうやって聖なる木を殺したの？」と尋ねた。チエドは

「うーん、どうだろね？聖なる木は使者に造られたんだろ？で・・・
会話も出来るんだから、僕たち人間と変わらない存在なんだよ。ど
うやって殺したのかはこれから聖なる木に闇の現を還したら聞けば
いいんじゃないかな。」と答えた。ミーはうなずき、目の前にそび
える気味の悪い木を見上げた。今ミーたちは聖なる木のいくつにも
広がる枝の中心部、幹の目の前に立っていた。2人は目を閉じサン
に言われた通り心で聖なる木と会話をしようと試みた。ミーは

「闇の現を持ってきたわ。」と、チエドは
「どうやって還したらいいのですか？」と心の中で囁いた。妖精た
ちはびくびくとおびえながらも、聖なる木の回りを飛びまわり様子
を窺っている。聖なる木からの返事がないため、やはりもう完璧に
意識がないのかと思った時、心の奥底で轟くような響きを感じた。
2人は驚き自分の心の中を見るようにその響きを受け止めた。聖な
る木は2人に

「早く私の幹に闇の現を押し入れて。」と語った。ミーはチエドに
視線を送りチエドはミーの視線に気づくと、一歩前に進み出た。そ
して、言われた通り聖なる木の幹に闇の現を押し入れようと、闇の
現を幹にあてた。すると、闇の現の触れた部分がやわらかくなり、

自ら進んで闇の現を自分の中に取り込もうとしているように、ぐいぐいと中に闇の現が引つ張られるのをチエドは感じた。そして、もう手を放しても大丈夫だろうという程、聖なる木に闇の現が還ったのを確認すると、ゆっくりと手を放しミーの隣に戻った。そして、チエドは自分の目の前で行われている出来事に目を奪われた。ミーはすでに目を放すことができなくなっていた。聖なる木は、幹から闇の現が入ってきた瞬間に変化を起こした。一枚もついていなかった葉が再び若葉となり現れ、奇妙なほど折れ曲がっていた枝は、まっすぐに堂々とした枝となった。そして、完璧に闇の現が聖なる木へと還った瞬間、神々しいほどの輝き、高潔さをかんじさせる力強さをもつ木へと変わった。聖なる木の回りを飛んでいた妖精たちも驚きミーとチエドのもとへ帰って来た。今度は聖なる木が自ら心を通わせてきた。

「感謝します。これでソロンはもと通りになったでしょう。太陽の力は以前のように、働きます。全てあなたたちのおかげです。」と言った。ミーは

「あなたはもう大丈夫なの？」と問いチエドは

「今もあなたは醜い心を持った木なのですか？」と聞いた。聖なる木は、心の中でもこの2人は同じような事を思うのね。と思った。

「私は聖なる木として、命を授かったと同時に、闇の現という強力な闇の品を一生守るといふ運命を授かりました。しかし、私はそんな運命を背負えるほど強くなかった。私は誕生した瞬間から自分の心を闇の現の欲望が支配する精神に奪われていたのです。これを真実と受け取っていただけないかもしれませんが、本当なのです。そして、サンに闇の現を取り上げられるまで自分を失っていました。でも今は違います。サンに闇の現を奪われたあと自分の中に残る闇の現の心と戦い勝ちました。しかし私の中に残った最後のひとかけらの闇の現は、サンを操り自分のいう事を簡単にうけいれそうな力ーという男へと自分を渡すよう仕向けたのを止めることはできなかった。でも今は完全に私の心は闇の現に勝つ事ができます。私は

これからこの闇の現の力を自分の心で支配し平和のために使います。あなたがしてくださった事には、なんと申し上げてよいのかわからないほど感謝しています。あなたたちのお仲間のコペさんや、イガさんにもどうぞ私の感謝をお伝えください。」と聖なる木は語った。ミーとチエドは、聖なる木は真実を話しているということはずぐにわかった。だからこそ最後イガという言葉を言ったのには心底驚いた。ミーとチエドは同時に

「イガを生き返らせてくれたのですか?!」と聞いた。聖なる木は「感謝の気持ちです。そもそもイガさんが命を奪われたのも私の未熟さのせいです。それと、最後にあなたたちに謝るべきことがあります。どうか許してください。サンから使者があなたたちの家族を殺したとお聞きでしょうか?本当は違います。私なのです。闇の現にとらわれていた私が殺したのです。そして、あなたたちの仲間の使者を石に変えたのも・・・。」と言った。ミーたちは、やっぱり、という思いだった。使者がやったのではないと思っていたのだ。もちろん確信はなかったが、漠然とそう感じていた。だから、一言、「わかっていきます。」と答えた。

第35話

顔のない聖なる木が笑っても普通ならわからないが、この時2人は聖なる木が微笑んでいるように見えた。そして、その優しい表情の後ろから小さな光が煌いたのを見た。その光が何なのかミーとチエドには、わからなかったが、と虚ろ魔法意外の妖精たちはすぐにわかったようである。チョコとケーキ、パフェ、は口をそろえ

「クッキー。」と叫んだ。その言葉を聞きようやくその光が妖精であり、クッキーである事をミーとチエドは気づいた。そして、聖なる木にチエドは

「クッキーを石から戻してくれてありがとう。」と言いすでにクッキーのもとへ走って行ってしまったミーを追いかけた。聖なる木はクッキーに話し掛けた。

「ごめんなさい。あなたを石にしまって。あなたは何も悪いことをしていないのに。あなたは人間のパートナーとなり幸せにいろいろな事を経験してください。」クッキーはミーやチエドとはしゃぐのをやめ聖なる木の声に耳をかたむけていた。ミーたちには2人が何を話しているのかわからなかったが、クッキーの表情を幸せそうな表情を見れば、大体察しがついた。クッキーは

「本当は優しい声をしていらっしやるのですね。私に使者を辞めるように言われた事は私が湖の水を飲んでしまったから、そして石になったのは私が約束を破ったから、全て原因は私にあるのです。何も謝る理由などありません。これからはずっとその優しい声でいてください。」と答えた。そして、クッキーはミーたちに

「ありがとう。」と美しい笑顔で言った。ミーたちは微笑みを返しうなずいた。ミーは

「クッキーも帰ってきたし、そろそろソロンに戻らなくちゃ。時間がもつないわ。」と言った。チエドは目を凝らし空間の穴を見ると確かに小さくなっているのを確認した。そして、

「じゃあ、みんな帰ろう。」と一言みんなに言い、自分が先頭となり空間へと向かった。妖精たちもクッキーの周りを飛び回りチエドについて行った。最後に残ったのは、クッキーと面識がなく輪に入っていない虚ろ魔法の妖精とミーだった。ミーはどうしても聖なる木に聞きたい事があったのである。

「ねえ、何故また闇の現を自分の中に取り入れたの？」と聖なる木をまつすぐ見つめ尋ねた。聖なる木は静かな落ち着いた声で

「私から闇の現を取り除くと、私の心から完璧に欲望や嫉妬がなくなるのです。そうなった私は生きていけない。あなた方が最初にみた私には葉がなく気味の悪い木だったでしょう？それは欲望などが私の感情からなくなり、私は生きている楽しさをなくしたからです。欲をもたない人間などいないでしょう？私も一緒です。そういった感情をなくすのではなく抑えて生きていくのが、心を持った命ある者なのです。欲をなくした者は生きた感覚を味わえないのです。」と答えた。ミーは、聖なる木の言っている意味がわからなかった。

「よくわからないわ。」と首をかしげ言うと

「そのうちわかるようになるでしょう。」と優しい声で答えた。その時虚ろ魔法の妖精が

「ミー、早く行かないとあなた取り残されるわよ。」とミーに話し掛けてきたので、ミーは聖なる木に

「じゃあ、使者たちにもよろしく。」といいチエドのもとへと走った。

その頃コペは、

「彼はソロンで自分の居場所を見つけられなかった。だからよけいに記憶を大切にしたのだろう。」と王の聞いたサンについての質問を答え終わったときだった。ちょうど、その時、空間から、チエドの声が聞こえ、空間の穴からチエドの姿が現れた。そして次々に妖精たちが現れ最後にミーがクッキーと共に王の間へと戻ってきたのであった。ザガート王は、暖かい笑い声で、チャジいは

「よく戻られた。」という言葉で、ミーたちを迎えた。そしてコペ

はミーとチエドに駆け寄り両腕を2人に回し優しく抱きしめ

「よくやった。クッキーも連れ戻したのじゃな。お前さんたちはわしの誇りだ。」と言ったのだった。

それから、ザガート王はソロンの人々に、今回の出来事を全て嘘偽りなく語った。放しを聞くため宮殿の前に集まった人々の中には、イガの姿、そしてカールの姿もあった。ミーとチエドは、イガと言葉を交わしていなかったが、その時見たイガの表情は何か昔とは違っていたように2人の目には写ったのであった。カールは相変わらずのようだった。カールは何も罪に問われなかったため、今でも校長職についている。王の語った話しの中にはカールの名もあったが、カールは、それを恥じとは受け取らなかったようだ。ソロンの人々の反応はさまざまだった。自分がソロンの人間ではなく地球から連れてこられたという事に関し、怒る者もいれば、もうどうでもいいと言う者もいた。しかしそんな人々の意見が、まとまった事柄もあつた。それは自分の家族が殺された、という事についてである。ソロンの人々の意見は、

「家族というものが、自分を育ててくれた人のことを言うのなら、たとえ血のつながりがなくてもそれは、自分を育ててくれた世話人だと思う。だから、家族が殺されたと言われても怒りを覚える事はない。」というものだった。そう思える者はサンとは違い、ここソロンという世界に自分の居場所を見つけられた者であろう。サンは、偽りの居場所を持っていた。それは記憶の中の家族という存在だった。その偽りを本物にしようとしたのが、人間の本质である欲望を隠す事なく、さらけだしていたドリスというもう1人のサンであったのだろう。ドリスは全ての人間の心にいる。もしドリスがサンのように、もう1つの人格となり、あらわになったのなら、それは自分の居場所をもたず、さまよう人である。ミーの幸せの片割れは、チヨコであり……。チエドの幸せの片割れは、ケーキであり……。コペの幸せの片割れは、博士であり……。みんな幸せの片割れを探す。それは真実の幸せでなければならぬ。偽り

が真実を語るのは、しょせん偽りで終わるのだから……。

最終話

あれから、10年。ソロンは変わった。聖なる木は地球から魔力を持った人間を連れてくるのをやめた・・・というよりも、連れてくる必要がなくなった。聖なる木は普通の木のように水と光を食するようになったのである。聖なる木の回りにあつた湖は聖なる木の背後にのみ残った。時代の変化とともに人々も変わった。ソロンの人々は、家族をもち子供を産むようになった。今ソロンにいる5歳以下の子供は血のつながった家族という存在を当たり前のようになっている。その子供たちは、今までのソロンを知った時、何を思うのだろうか？歴史は多くのことを語り、そして多くの悩みを与える。今自分が生きているこの瞬間がすでに一秒後には歴史なのである。歴史に残っている事柄が全てではない。真実を隠し進む歴史もある。しかし、いつの時代にも共通するもの、それは命であり、心。命ある者のもつ物の中で一番もろく一番強い物・・・。この世の中に断言することができ、絶対といえる事はない。ある1つを除いては・・・。それは、この世に命が存在するかぎり決してなくなることはない物、心である。人間は幸せの片割れを探し生きる。自分の中に潜むドリスの存在を知りながら、共存し生きる。生きていく時の中では、いろいろな悲しみが自分の身をかすめ、削る。しかし、削られた部分を埋める物がある事を知っているから、生きていく事ができるのである。

10年の歴史を刻んだ現在、ミーは22歳、チエドは23歳となった。2人とも護衛魔法使いを続けている。当時護衛魔法使いの長であつたコペの変わりを立派にはたしているのだ。現在護衛魔法使いの長を勤めているのは、ミーだ。そして、チエドはというと、ザガート王のあとを任せられ、16歳という若さでソロンの王となった。コペはあれから、3年後に引退し、ミーにあとを任せたと、今はソロンの最南端で新しいパートナーである、虚ろ魔法の妖精と暮ら

している。ベルはクツキーがパートナーとなり、勉強にはげむ毎日だ。パフェは、未だに誰のパートナーともなっていない。ザガート王は愛を知り、妻となった女性と時を共に刻んでいる。チャジいはというと……

「早くなされ。ミーさんがもうお待ちですよ。殿下、あなたは本を読むと回りが見えなくなってしまうようですよ。」と王の間で王となったチエドに叫んでいた。チエドは、苦笑し護衛魔法使いの証であるマントを羽織ると

「わかったよ。チャジい。この本が面白くてついついね。」といい王の間をあとにし、ミーの待っている部屋へと向かった。チエドは王となった今も護衛魔法使いを続けている理由の1つは、ミーが長だからである。2人は先月、結婚という2文字を歴史に刻んだ。

そのため、なるべく2人でいる時間を取りたいのだ。ミーの待っている部屋の扉を開けると、中から

「遅い。もうみんな待っているのよ。」というミーの声が聞こえた。チャジいは、チエドに

「ほら、チエド様のせいですぞ。ミーさんの機嫌が悪いと、護衛魔法使いのみんなに迷惑がかかります。」と言った。チャジいの言う通り、チエドの遅刻のせいで、大勢の護衛魔法使いは長々とミーのたわいもない愚痴(というよりも、のろけに近いだろ。)を聞かされていたようで、扉の向こうからチエドの姿が見えた途端、小さな歓声があがったほどだった。

ミーとチエド、この2人はこの先もお互いがお互いの幸せの片割れでありつづけるであろう。ミーの幸せの片割れは、チヨコでありチエド。チエドの幸せの片割れは、ケーキでありミー。コペの幸せの片割れは、博士であり預言者。さまざま者に幸せの片割れはいない。偽りの幸せの片割れを握りしめている者は、永遠の一瞬を味わえない。孤独を味わい死に行く者となるのである。死ぬ時も幸せであるには、幸せの片割れの存在が、大切なピースとなるのだ。そして、幸せの片割れは永遠の一瞬を感じさせてくれる……。人間一人一

人の過去と未来、そして、今は決して完成する事のない P u z z l e
e なのだ。一秒一秒歴史は刻まれつづけるのだから・・・。

最終話（後書き）

これで一応 puzzle は完結です。この小説は作者の処女作でありまだ10代の頃に書いた作品です……。なので皆様お気づきの通り文章ひどいです（ノ、）これから誤字脱字 & amp ; 文章を編集 or 修正していきます。ですが、ベースのストーリーは変わりません。ここまでお読み頂きありがとうございました！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9042v/>

Puzzle

2011年8月20日03時13分発行